女鐸

第十七年第十號



第二回女子教育講演會

十月十九日(土曜日)正午より、神田美土代町青年會館にて開會す

(當日來聽者には紀念品を呈す)

出演者

◎開會の辭　高島平三郎君

◎女四書の話　文學博士　重野安繹君

◎一家の主婦　法學博士　寺尾亨君

◎茶の話　農學博士　澤村眞君

◎家庭と衛生　醫學博士　岡田和一郎君

◎母の務　鳩山春子君

◎餘興　各種音樂　令孃數氏

切取線

▽聽講者は女子に限る

▽聽講料　本劵を所持せらるゝ御方は無料

第二回女子教育講演會

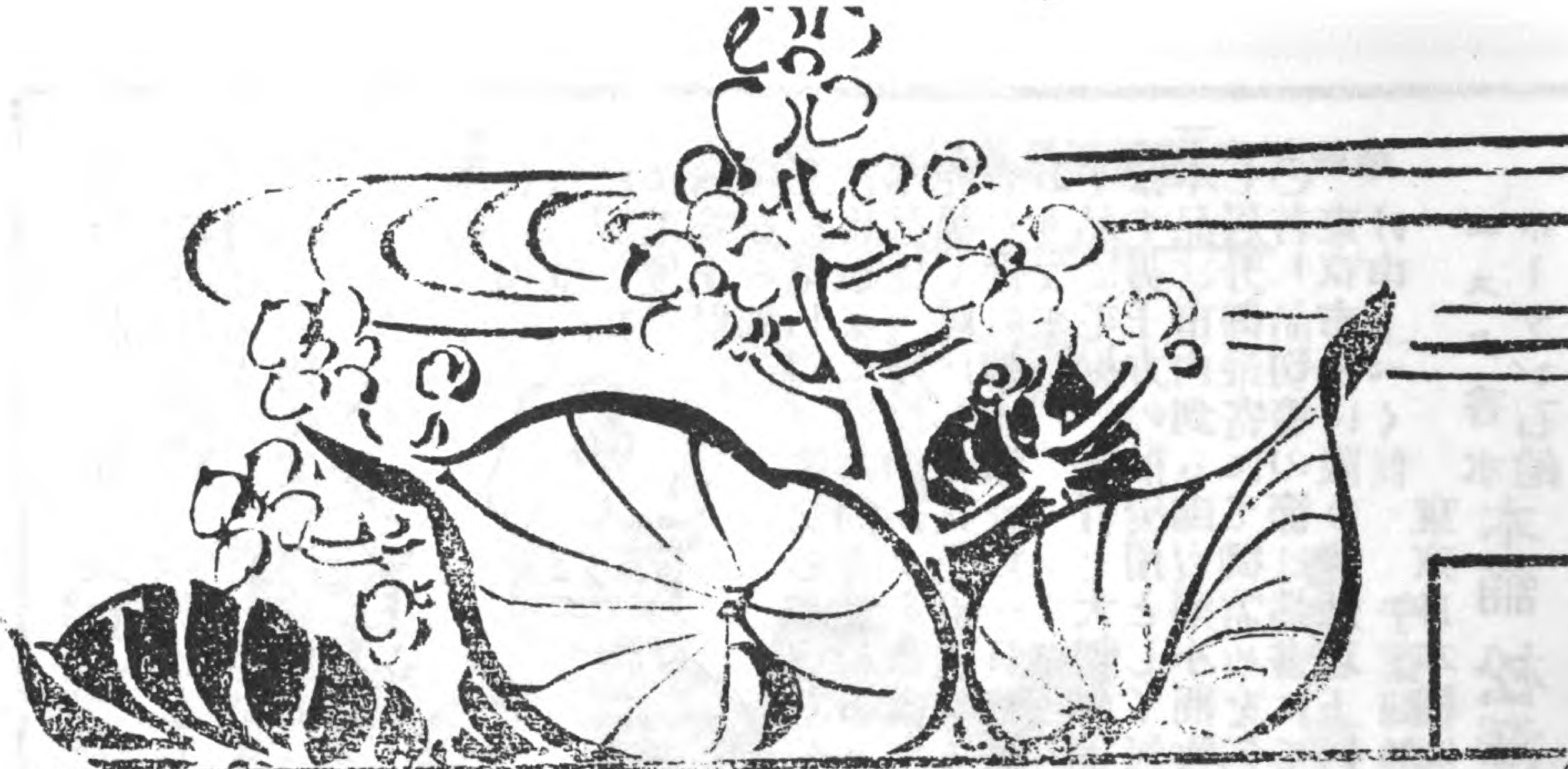
入場劵

一枚一人限

女鑑編輯局


THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
(犬の聲！)
何と云ふ藥が
欲しいのですか
(令孃の答)
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉強して肩が凝たり氣が欝いだりした
時に能く奏効ますからね
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布若二十錢藥罐廿五錢

女鑑 第拾七年第拾號目次



本品は忝くも
皇后陛下
東京勸業博覽會場へ御行啓の際献上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

内務省衛生試驗所檢査濟

ムスク香油

壹瓶 五十錢



一 本品は最良の植物性原油と精製し更に毛髪の攝養に肝要なる上加工を施し尙麝等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき模範的香油であります

一 本品は一度び御用ひあれば乍ち髪の毛さらりとし艶黒く麗しく其上優美なる(バイオレット)の芳香を保ち紳士淑女の一日も缺く事のできぬ香油であります

一 本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一 本品は市内到る處賣藥小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御需めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舖へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御屆け申上べく候

東京日本橋區本石町四丁目

ムスク香水
ホーサン石鹼
本舖 松澤常吉化粧品部

眞正 無毒 高等 化粧

クイーン白粉
クイーン水

◎本品ハ我同盟國ヨリ輸入セル最新最良原料ニ貴重ナル芳香ヲ加ヘ精製シタル化粧品ニテ先祖傳來的ノ陳腐ナル品ニアラズ壹度御試用ノ榮ヲ賜ラン事ヲ

▲取次販賣ハ至ル所ノ小間物化粧品店ニアリ若シ品切ナレバ直接ニ御注文ヲ乞フ



東京日本橋區新和泉町
本舖
三井花陽堂

■造花界の指南者■

大日本婦人造花學會編

造花通信教授講義錄

全四學期の(第壹學期)

■造花技術の良師■

壹學期課目

造花材料器具大割引の特典あり

▲編纂趣旨▲總論講義：造花術の大意▲技術總論講義：如何なる器械器具を用ふべき哉：切り拔き又は切拔の方法▲半製品論講義：紙卷針金の種類と其の作り方：色紙の種類と其の作り方：薬染布の種類と其の作り方▲技術各論講義：各種造花の纏め方：梅、櫻、薔薇、江ど菊、小菊、大菊、すみれ、遊蝶花、山吹、石竹、姫百合、鹿子百合、花菖蒲、藤、桔梗▲造花應用植物論講義：花は如何なるものぞ：葉は如何なるものぞ▲造花應用染色論講義：染料の種類と其の説明：纖維と色素との關係▲造花應用論講義：造花需要の將來▲附錄：造花材料器具の定價表

●申込期限十月十五日限●

豫約募集 貳千名限

●●豫約金八拾五錢 期限後正價金壹圓廿錢復す●●

●御注意● 此の講義錄は文意平易にして趣味多く懇切に解説してある若し質問を要する場合は何時にても郵券緘入の上照會せば直に親切に敎答す

申込の方法

●一時に十名以上申込の場合は金八拾錢に割引す

●全學期申込の場合は全四學期にて參圓貳拾錢に割引す

振替口座一一一三〇に御振込被下度候

爲替なれば大日本婦人造花學會理事非關九郎宛親展にて願上升

●郵券貳錢御送あれば趣旨書送る●

發行申込所

東京市牛込區水道町五〇▲電話番町一六三四▲振替口座一一一三〇 大日本婦人造花學會



はぎ

飯澤天羊

鍋島侯爵家の團欒




木戸侯爵家の團欒


北條子爵令嬢鐸子君

學界の花

三輪田高等女學校優等卒業生



福田花子君



上院議員令孃 加藤愛子君



上院議員令孃 日高富子君

獨逸の風俗



炊婦



遊戲

渓水氏寄贈



スプレート保姆

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

登錄商標

壽美禮おしろい

（以下品評會功勞褒牌）

THE BEST MADE

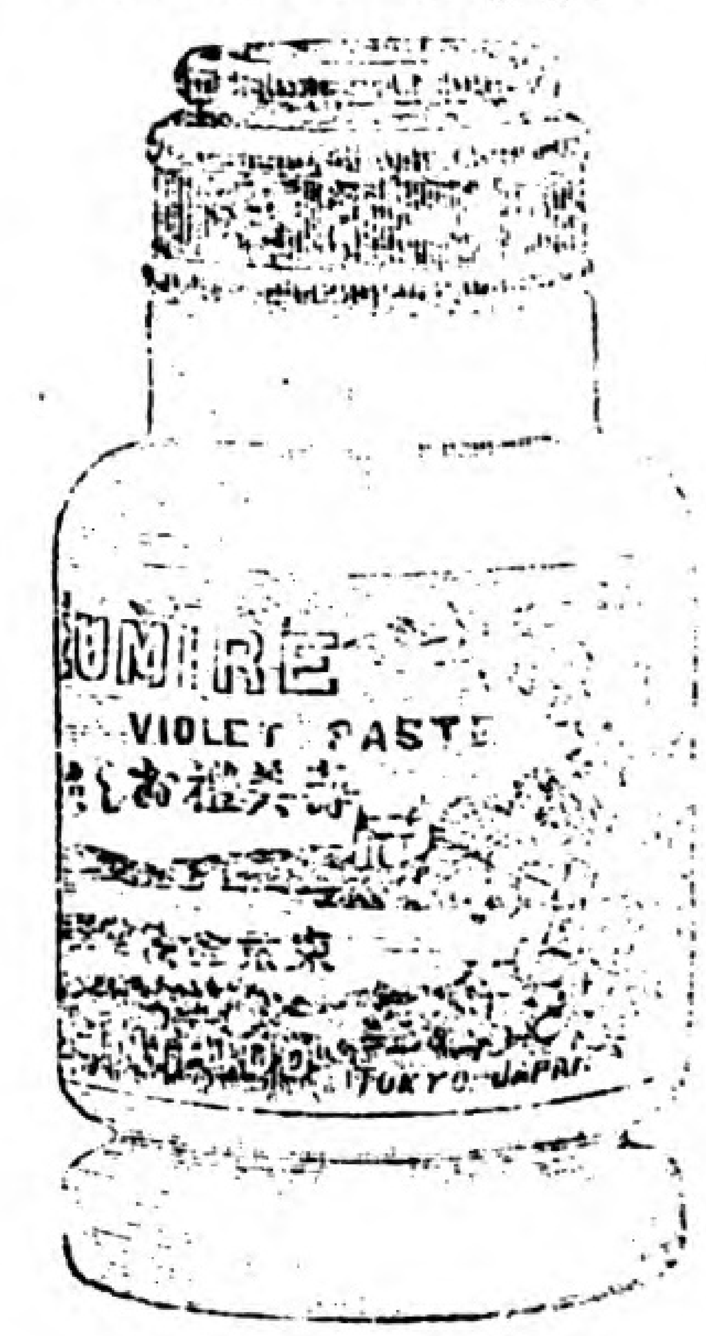
SUMIRE

VIOLET PASTE

ヴアイオレツト練製

附屬品乳白硝子器入

壽美禮おしろい





錫栓附乳白硝子壜入

ヴアイオレツト水製

（◎）壽美禮 [illegible]

すみれ白粉は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清くし天然の色白きに至るべし董『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、觀席、雜踏の場所に臨んで衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋洗濯粉 壽美禮あらひ粉の效能

◎弊舖製造の [illegible] 洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞用する香料及弊舖特製の原料を用ひ調製せしものなれば朝夕此洗粉を用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす
◎常に湯浴に用ひ給へば髮の油ぼりを取り油あかを生ぜず又 [illegible] メリヤス絹綿等に用ひて能く汚垢を落す [illegible]
◎使用法は [illegible] 粉の半分にて能く水又は溫湯に溶しなほ少しく [illegible] 入浴の際用ふるを良とす

綠、紫、紅彩蝶帯入大袋入二錢
紙袋 [illegible] 五厘袋入一錢

登錄商標

西洋色白になるあらひ粉

SUMIRE

Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京兩國

東京兩國橋際

元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

生徒募集

私立 女藝専修學校

専修部
實践部
各若干名

◎從來教室の外に三層大校舍の増築落成せり◎本校生徒の定員は五百名とす

◎専修部の『文學科』は和文學、漢文學、英語、『修禮科』は作法(作結び物)、茶道、生花『美術科』は毛筆畫、圖案、燒畫、書翰習字法、琴曲(附八雲琴)オルガン、『技藝科』は和洋裁縫、刺繍、編物、袋物(細工物共)、造花、レース、和洋料理、タイプライター簿記等とす

◎實践部は躬行實践の教育を奬勵せんが爲に裁縫及び技藝を教授するものとす

◎本校は就學篤志者にして學資不足の女生には情状を査察して補給の便を與ふ

◎教師は知名の女學校に教鞭を執られ最熟練なる技藝及精神教育家を招聘せり

◎寄宿寮は寮用監督の下に家族的生活を爲さしむ◎規則入用者は郵券二錢送れ

顧問員

尾崎行雄　福原秀猪
江原素六　木村正辭
ミセス ミラー　樋脇盛苗
下田歌子　(以下略之)

校長　子爵　松平直敬
副校長　星野愼之輔
主幹　八木兼夫

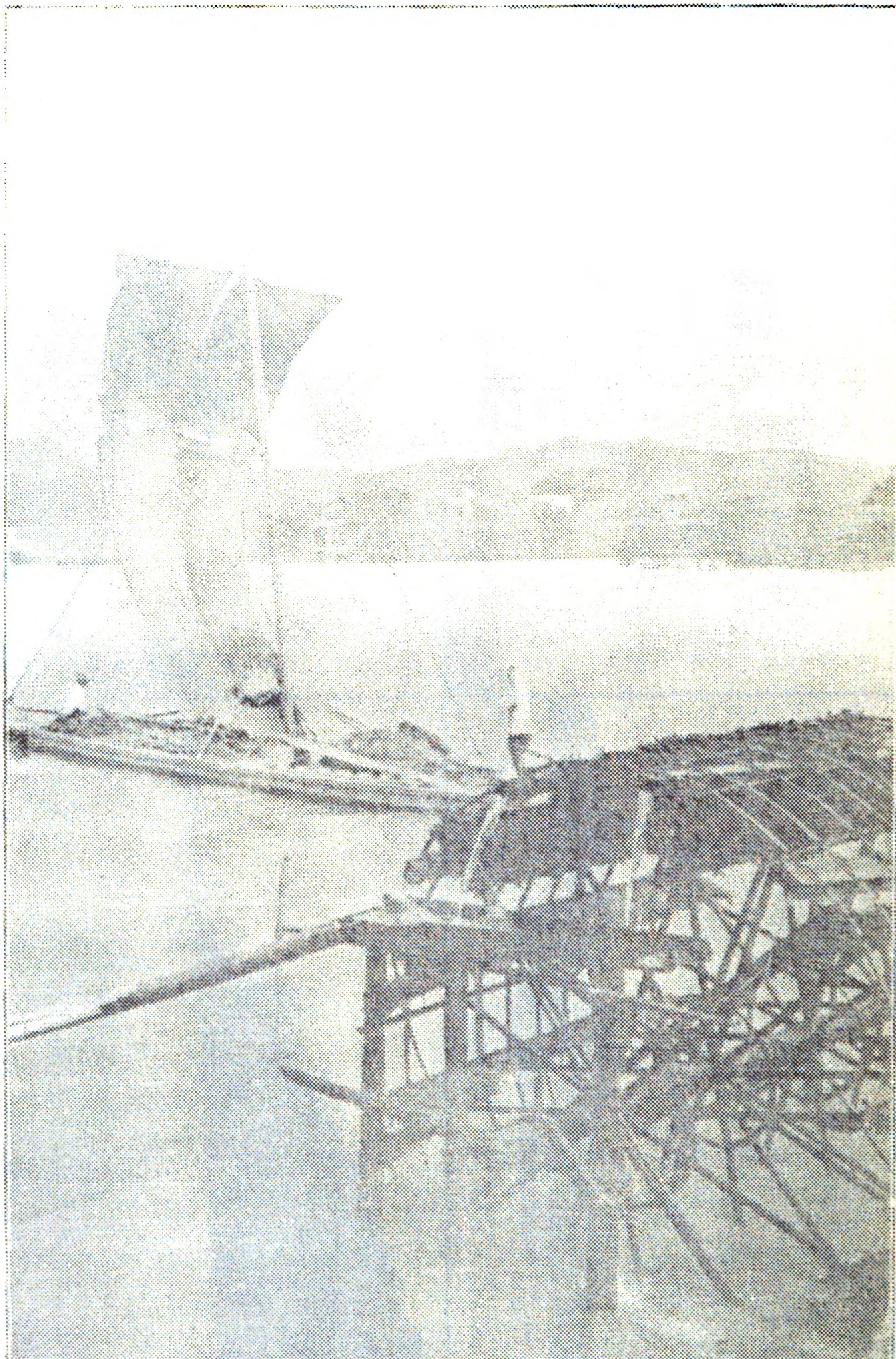
東京牛込區横寺町九、十番地電話番町一七一七

紫式部の筆蹟

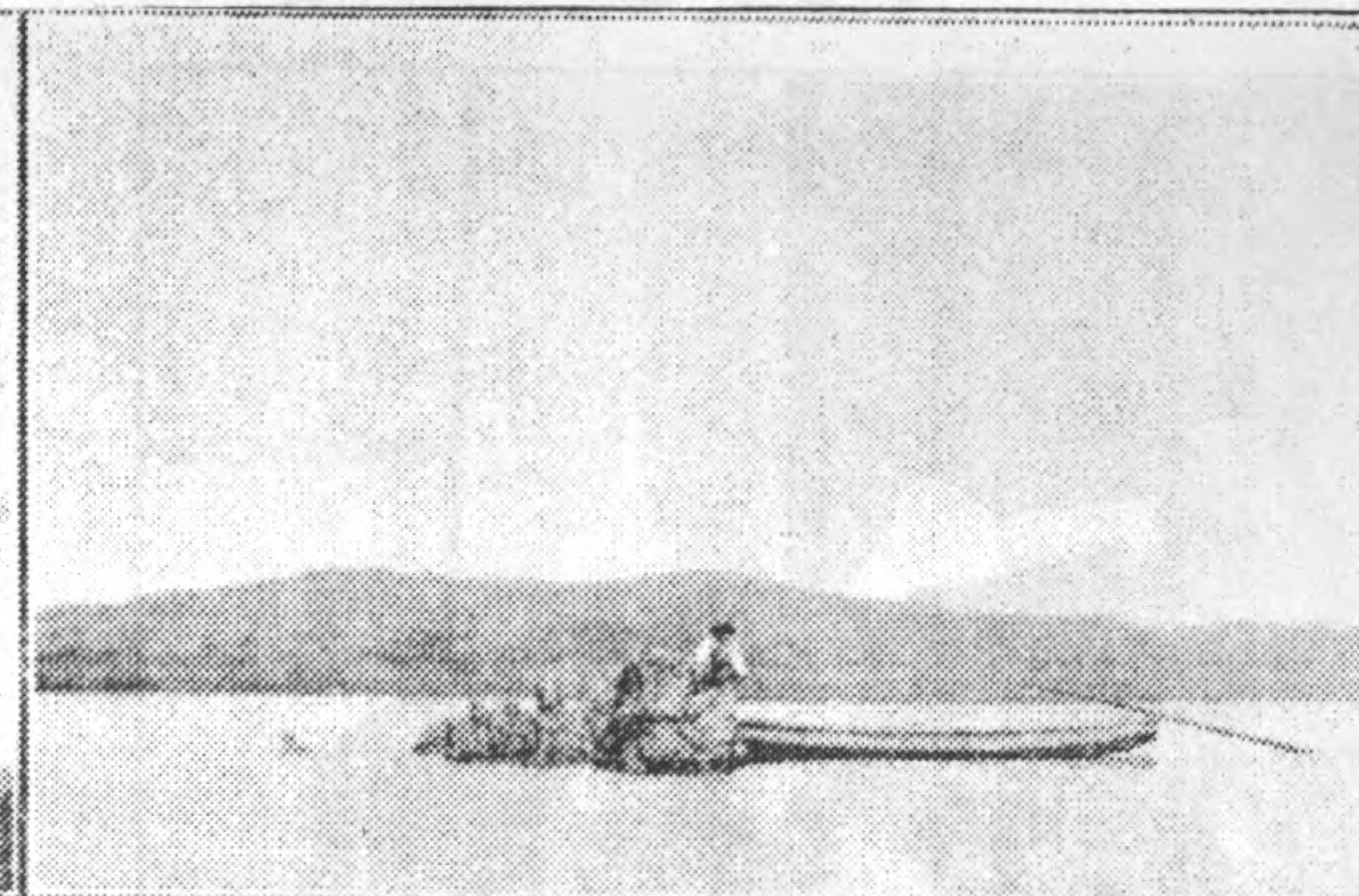


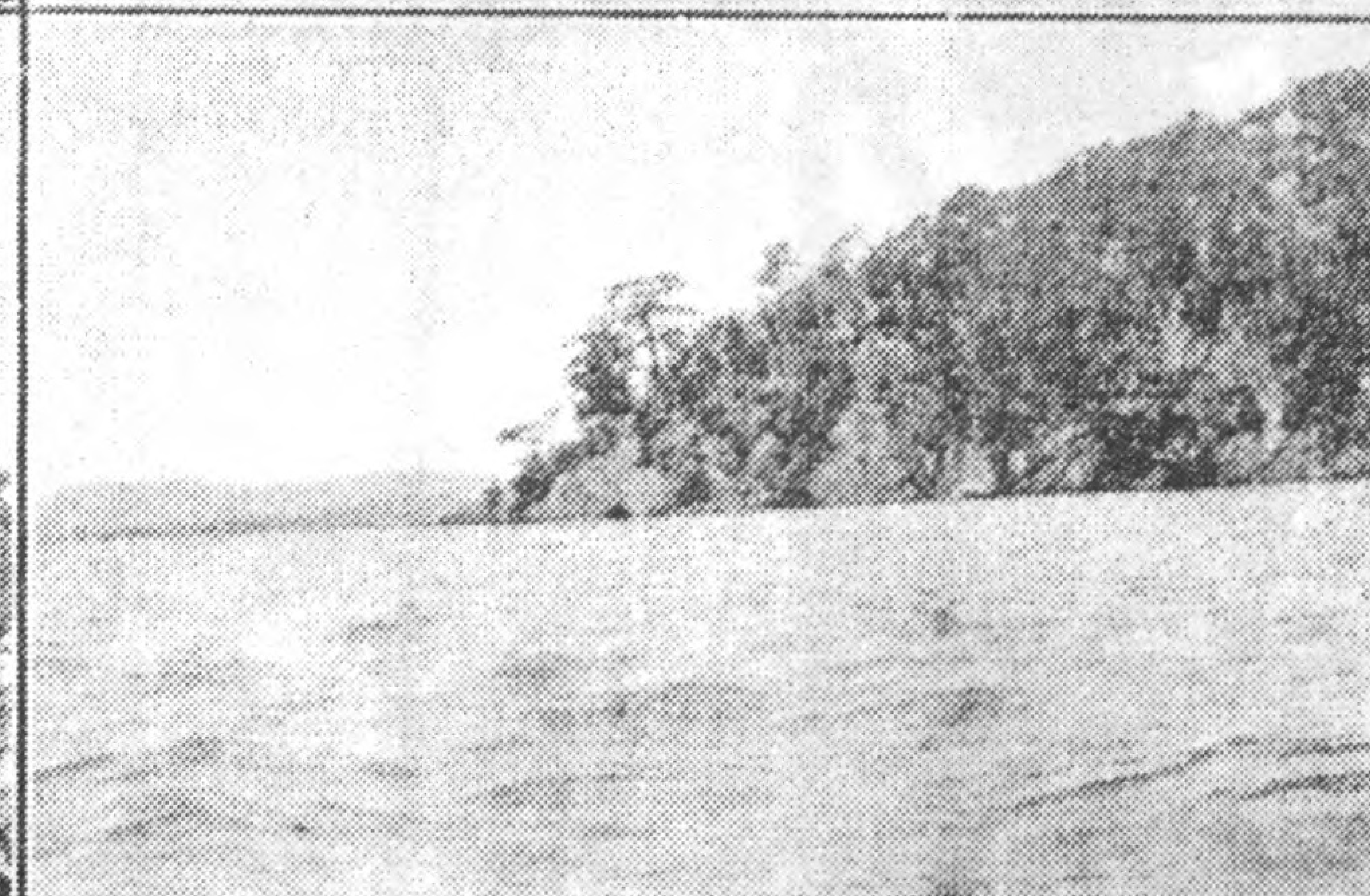
文學博士　松本愛重君珍藏

淀の川瀬の水車



名所の水害







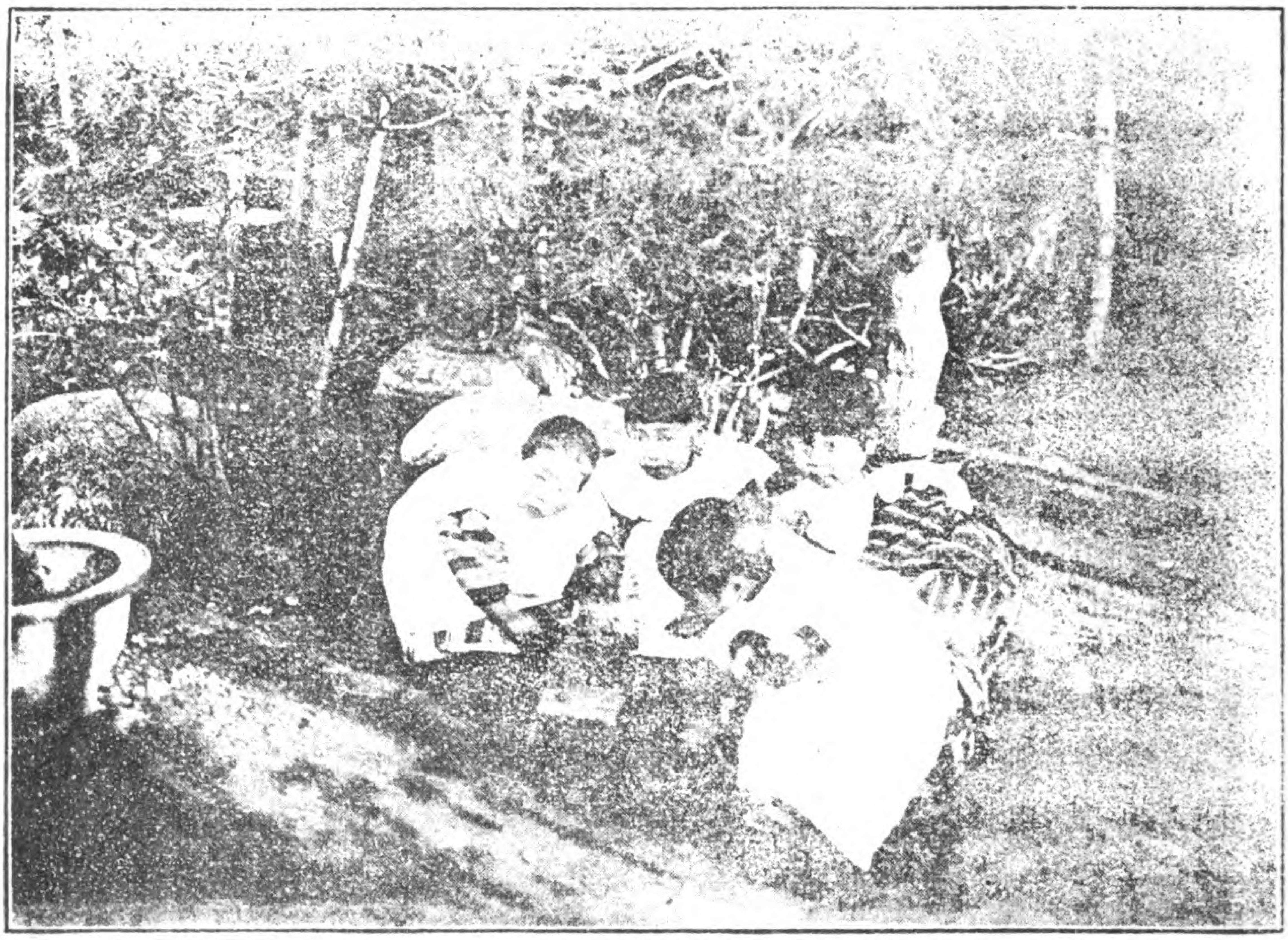


濱名渡　濱名湖　清水港　三保の松原

松平氏撮影

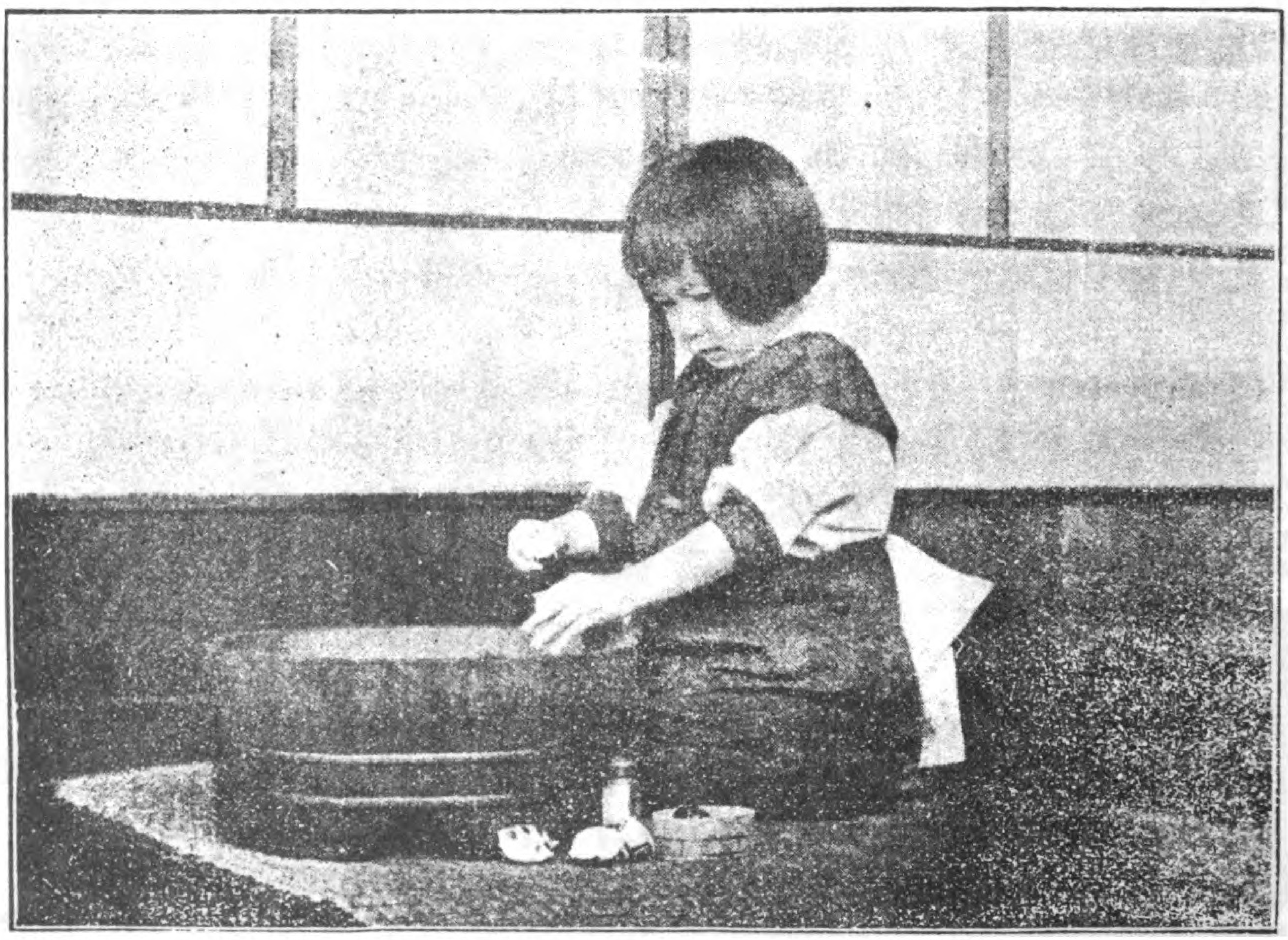
幼兒百態

其の十二　土いぢり



渡邊清次郎君撮影

其の十三　土いぢり



井伊直方君撮影



女鑑

第十七年第十號

月の夜

見もいぶせき塵の世に、清きを何處に求むべき
玉をのべたる高どのも　荒のみまさる賤が家も
隔てはあらじ見る人の　こゝろにすめる月影の
拭ふがごとき大そらに　千里隈なく照らすなり
いく世の秋もすむ月は　一つなれどもさす影の
所からとてをかしとも、折にふれては歎けとも
人さま〴〵に映らなむ　われは興ずる此夜ごろ
雁の渡るもおもしろく　虫の鳴く音もあはれなり

（（中川愛氷作））



女子教育の過渡期

法學博士　木場貞長

近來は日に月に女子の學校が殖えるやうで、女子教育の爲には慶ぶべき事である、之と同時に其文學または技藝の學校を卒業した者が比較的實務に堪えぬと云ふ不平の聲も起るゝやうである、成るべく學校に於て家庭に間に合ふやうにして貰ひたいのは萬々である、けれども之に就ては大いに熟考に値するので、現今と違つて昔時は、家庭に於ける言語の遣ひ方を初めとして、三度の食事、室内の装飾、賓客の接待振、その他萬事萬端なにくれと無く模型があつた、その模型に依て兒童の時より發成して來たのであるから、よく實際に當箝つたに相違ない、その證據には今日尙ほ此模型に入つた人又十分その模型に入らずとも、傍から之を觀て育つて來たものは之を至當と思つて居る人々は、單に女子ばかりで無くして男子にも多いのである、

併しながら此模型に依つて小兒の時より其家庭に於て仕込まれて來たものとすれば、之を以て直ちに今日の家庭に適用することは出來ないと思ふのである、何故なれば、明治の日本は亦舊時の社會とは異つて非常に複雜に爲つて來て居るのみならず、例へば、一家親族にしても種々の家庭がある、即ち富めるあり貧しきあり、且つ上流に位する者もあれば中流に安んじて居る者もあり、或は下流に沈淪して悲慘の境に

在るものもあると云ふ風に實に種々樣々である、尚ほ一歩手許に切込んで見れば、自己の家とても却々變遷が多いので、固より望ましき事では無いが、某事業の失敗よりして家產を滅盡することもあらう、或はまた幸運の爲に家を興すこともあらう、此く變遷極りなき種々複雜なる社會と爲つて來たのである。

斯く社會が複雜になつて來たと同時に、是等の子弟を敎育すべき學校は日一日と增設せらるゝので國家の爲には誠に慶すべきことである、ソコデ此の學校に收容する所の子弟は如何なる種類に屬するかと云ふに、或一二學校を除くの外は、小學校を初めとして、中學校高等學校および大學に至るまで、生徒の種類には農あり工あり商あり、その他萬般の家庭より子女を收容するのであるから、從つて其言辭遣ひから衣服調度の類に至るまで一樣では無い、のみならず同じ商家なり農家なり又は官吏會社員と云ふ中にも自ら其所の家風と稱するもの、例へば、甲の家では質素を旨とするにも拘はらず、乙の家では出來得るだけ華美を好むと云ふが如くに、甲乙丙丁ともに各々その家風を異にして居るのである、かやうの現時の狀態であるから、迚も豫め若い女子の將來とても必らず之が斯うと定むることは出來ないのである、

學校は一個人々々に特殊の敎育を施すべき所では無い、故に校舍の廣狹に由るけれども、成るべく出來得る限り生徒を收容して、謂ゆる國家富强の基本たる國民の智能を啓發するのが目的であるから、既に今日の如く學校の敎育が進步して如何に巧妙でも又敎員その人が如何に苦心したからとても、到底甲乙丙丁各々異なる所の家庭に適應せしむるやうに敎育を施すと云ふことは出來ない、また學校敎育に向つて之が十全を望むと云ふことは少し酷ではあるまいか、

例へば、自己の小兒でも數人あるときは、之が親たるものは悉く己れに酷似させやうと苦心焦慮しても、中々左樣よく自己に肖るものでは無い、又他の已れが理想とする所の人物に似させやうと思つても是以て

思ひ通りには行ぬものである、況して千差萬別なる家庭より集まり來る所の子女を教養して、他日各自の生家と異なる所の當箝るやうに一々之を教育すると云ふことは、望むべくして行はれない、否、望を囑すべき筈のものでは無い、

元來學校と云ふものは將來に伸びて又將來に善い婦女を作るのが本旨であるから、その學校を出てより將來の家庭まで責任を持つものでは無い、それに學校は知らるゝ如く、家婦たるの要素即ち學科が多端であるから中々生徒も忙しいのである、左れば一々細かしい事までは行屆き兼るので、例へば、裁縫の一科でも、之を家庭に於て幼少の頃より、母の膝下か又は裁縫專門の教師に就て學ばしむる時は、最早十八九才に達すれば別に不便もなく衣服を調製する事が出來るのであるが、併し學校は前にも云へる如く他の學科に逐はるゝから左樣は行かぬ、乃で學校は其筋路だけを授くるのである、世には往々此點を誤解して居りはすまいかと氣遣ふのである、

學校本來の目的が右に述べたる如くであるとすれば、その學校の教育が果して能く該目的を成就せしや否やと云ふことは、生徒が其學校を卒業して出たる當時の力でなく、それより三年乃至五年の力に由つて判斷を試みなければならぬものであらうと考へるのである、

尤も昔風の教育を受けた者は、大率十八九才で一人前に爲つて居たのであるが、今日は左樣で無い、學校の教育を受け其學校を出てから尚ほ數年の間は成人せぬのである、併し成人せぬと云ふは語弊があるか知らんが、兎に角家婦たるの資格が未だ備はらぬのである、此の故に學校を出てから三年乃至五年の實習を爲して、サテ出來上つた後の問題は如何と云ふに、それは頗ぶる重要なる事で、學校教育の死活にも關するのである、

前に陳べし如く、一旦出來上つた後に、若しも現今の敎育を受けた婦女子が尙ほ舊時の模型に依つて造られたる女子に劣るとすれば、今日の學校敎育は失敗に歸するのであるが、若しも其女子が小兒を育て敎養する頃になれば、餘程家庭上の事にも慣れて昔の人に較べても最早劣る所ではない良いとすれば、決して今日の敎育を非難することは出來ないのである、

然れば現時學校を出たばかりの婦女子に向つて直ちに家婦たるの技能を要求するのは無理である、不可能の事に屬するのである、去ながら學校に於ても、若し其敎育が數年の後に至るも尙ほ完全なる家庭を造るに不適當であるとすれば、即ち敎育法が誤つて居ると云はねばならぬ、

何事も兎角過渡の時代には非難を受くるものである、我國の女子敎育も實に旺んではあるが、尙ほ過渡期にあるものなれば亦この數を免るゝことは出來ないのである、が若し果して學校の敎育が誤つて居らぬのであれば、數年の後には必ず此過渡の時代に於ける根據の無い非難は消滅に歸することゝ信じて疑はぬのである、

尙ほ親切に云へば、學校の側でも往々敎育を偏らしむるの結果、敎育に從事する人々には、寧ろ不適任なる緣の薄い、未婚の婦女若くは男子を取るから、啻に卒業當時に於て完全なる家婦を出すことの出來ないのは當然なるのみならず、或は終生家婦たるに如何はしき行動のある女子をすら敎養して、遂には其一生を誤らしむるやうの事も尠く無いやうに見聞するのであるから、此點は尤も注意を要すべき事と思はれるのである、

昔し一人の盲人が衆くの盲人の道案内をして、倶に大澤の中に溺れたと云ふ一場の話柄がある、此の談柄は大いに我國現時の女子敎育に心を傾くるものゝ一顧に値ひするものと考へる

主婦のつとめ

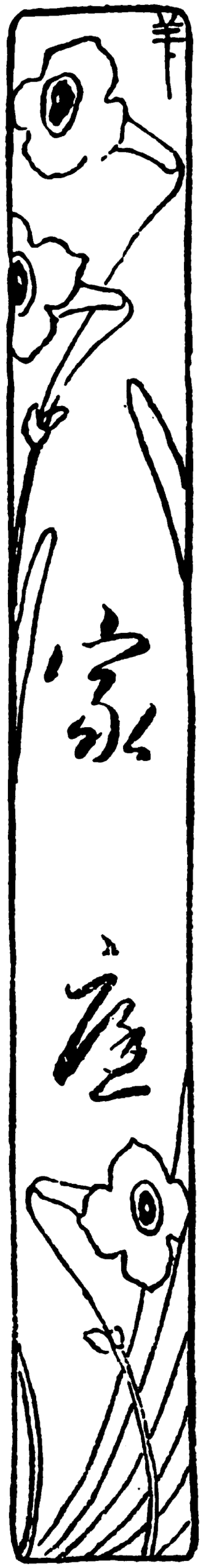
文學博士　木村正辭

一體女子の性質は温雅で、綿密で、美術的に出來て居る、それであるから、手藝などの事は尤も適切の事であらうと思ふのである、けれども手藝を學ぶのは、もと家庭の爲なる事を忘れてはならぬ、されば、技藝の進むに隨うて、ます〳〵禮義を正しくし、その動作に注意をせねばならぬのである、
維新前すなはち舊幕德川時代には、女子はたゞ夫の意を受けて、一も二もそれに從ふもの丶如くであつたが、今日の文明界に於ては、女子と雖もさやうに屈從して居るわけには行かぬから、相當の學問が無くてはならぬは固よりであつて、またそれ〳〵技藝も必要である、しからざれば日用の事にも差支へがちにて、その身自らも不自由を感ずるのである、
それ故に家庭は云ふまでもなく、世間の交際も充分に爲ることは出來ずして、種々の不都合を生ずる事もあるであらう、それであるから、貴賤貧富に拘はらず、相當の學問と技藝とは修めなければならぬのである、しかし婦人は、やゝもすれば、其藝に慢ずる氣味がある、また是に反して、ひたすらに所謂職工風に流れて、卑賤なる擧動をなす事もあるやうに見聞するが、これらの事には一層注意をして、世人の謗りを受けぬやうにせねばならぬのである、
こゝに少しく學説にわたる嫌ひがあるが、諸姉には定めし御存じの事と思ひますが、昔は女子にも紫式部や、清少納言など云ふ、有名な女學者があつたが紫式部はあれ程の學者でありながら、甚だ謙遜辭讓の女性で、あれ程長い物語中に、自分の高慢らしい文辭は絕て見えぬのであるが、清少納言は、少し高慢な僻があつて、式部の謙遜なるに比べますれば、天壤の相違があるのである、これらの事は獨り女子の上

のみでは無いが、女子に於ては殊に注意あるべき事である、

近頃は女子の學校が大變に多くなつて、それらの學校でも、手藝科の設けがある、けれども本科目が澤山にある故に、手藝の事は充分に行つては居らぬが、戰後の經營として、將又國力發展の結果として、且つ東洋諸國をして、敎育および學術技藝を以て、他の國々に施し、開明に進ましむるの任務のある事は、内外人の共に認むる所である、是の故に、女子と雖も、その心を以て世界に立たねばならぬ、然らば家庭のみの事では無い、猶ほ男子と共に國家に應分の義務を盡さねばならぬのであるから、是迄の如くにては濟されぬのである、依つて學問は云ふまでもなく、技藝の事などをも研究して、男子に劣らぬ樣にするは勿論の事である、近頃は實學といふ事が多く行はれて居る、これは國家の爲、誠に慶すべき事で、紙上の學問よりは肝要である、

かの紫式部の源氏物語の中に、婦人の品評がある、その品評中に、そのこの公やけにつかうまつり、はか〲しき世のかためとなるべき、まことのうつはものとなるべきを、とり出さんにはかたかるべしかし、されどかしこしとても、ひとりふたり世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上になびきて、事ひろきにゆづらふらん、せば家のうちのあるじとすべき、人ひとりをおもひめぐらすに、たらはであしかるべき大事どもなん、かた〲おほかる。云々とあり、これは公の政事は、いとむづかしき事なれど、各々その事務がありて、互に讓り合ひてする事なるから、おもひの外安いものであるが、之に引き換へ、婦人が一家の事を一人にて計ふのは、甚だ難い事であつてなか〱にその人を得がたいと云ふことを述べられたもので、これは婦人の家庭の任のむづかしき事を、簡短によくいひ盡せるものなれば、此に抄出して座右に薦むるのである、



胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

◎營養物の話

營養品、滋養物に就いての誤解（續き）

今一つ、一般の食品について曲解されて居ることがある。それは食物を見て「これは滋養品だ消化し易い」とか「これは不消化物だ」とかいつて、一般の食品を、消化性、不消化性の二種に區別されて居る事である。前にも言つた通り、外觀上、不消化な形體を爲して居ても、割烹よろしきを得、咀嚼が充分にできたならば、消化し易いものとなるのである。縱令、牛乳やソップは吸收され易い姿をして居ても、或る者には滋養どころか却つて有害のものとなる事もある――例へば胃のアトニーといつて、筋肉が弛緩んで、其の運動力が減弱つて病氣や又は下痢の甚だしい場合などには、牛乳は決して消化性食品として歡迎すべきものでない。柔かなものでも嚙まなければ、充分に消化されない事もある。野菜は凡て不消化だからといつて、肉類ばかり食べて居ると、虞るべき病氣を惹起すこともある――近く日露の戰役に、旅順に籠城して居た露軍が、植物食缺乏のために、多數の壞血病者を發生して、開城を早めた原因となつたともいふ。

之れを要するに、食物の硬軟、若しくは外観のみでは、消化、不消化の別を立て、滋養、非滋養の差をつけられないのである。

然し強いて消化性、不消化性の別を立てやうと思へば、消化性の食品は、左の四ケ條の要素を具へて居るのでなければならぬ。即ち

一、胃液の浸潤むことの容易で、溶解け易いもの。

二、胃の運動を害しないもの。

三、消化機を過度に刺戟しないのもの。

四、腸や、胃で容易に吸收され得るもの。



でなければならぬのだ。けれども、此の四要素を完備して居るものは殆んど無いといつてもよいのであるから、自然、消化不消化の別を立てることが困難となる譯である。

。。。。

以上述べ來つた所によると、恰かも牛乳や雞卵や肉類やは、滋養分が無いかの如くにも聞え、又不消化なものゝやうにも思はれるが、決して然うではない。最高の營養品、消化性食品に違ひはないのである。けれども是等のものでなければ、補ひが出來ぬとか、生命を保續げないとか言ふことは決してな

い。牛乳、ソップ、鶏卵、肉類が滋養物であると同時に、米、麥、野菜、澤庵、干魚なども營養品であるのだから、返す返すも誤解のないやうにして、彼の肉食を尊んで菜食を擯斥したり、常飯を食べられる腹で、粥食を取つたり、牛乳ソップを飲んで、普通食を減じたりする愚をやらないやうにして貰ひたいのだ。

唯牛乳や鶏卵は比較的消化し易いから、病者の食餌としては至極都合が宜いといふまでなので、絶對の消化性食品ではないのだから、是等は單に、湯茶を飲む代りに用ひるのが至當であらう。

二　人工滋養品について

人工滋養品についても誤解せられて居る事があるやうだから、序に茲で辯じて置かう。

輓近、通俗衞生「素人療治」などいふ著書が、家庭の讀み物として、盛んに歡迎さるゝやうであるが、夫れと同時に、人工滋養品と唱へて坊間に發賣せらるゝものも、非常に需用者の多くなつて來たやうである。

けれども、其の人工滋養品を用ゐる人の中には、單に新聞の廣告、博士學者の證明、又は衞生試驗所の證認などいふ文字に眩惑されて、實際、滋養品そのものゝ性質も知らず、また研究もせず、甚だしいのは「滋養品とは甚麼ものか」といふ事も識らずに用ゐて居る人が、少なくないやうである。通俗衞生書などいふ著書の讀者が増加するのは、必ずしも害はないが、人工滋養品を無暗に使用するのは、決して喜ぶべき事ではない。

其の理由を説く前に、人工滋養品の種類、効用、應用さるべき場合等を簡單に述べて置く必要がある。

其の種類　現今人工滋養品として販賣せらるゝものゝ中には、左の四種類ある。

一、肉製滋養品　蛋白質又は其の消化産物たるアルブモーゼン、プロペプトーン、ペプトーン等を主成分としたもの。

二、含水炭素製滋養品　可溶性澱粉を主成分として、之れに少量の蛋白質、脂肪等を含んだもの。

三、脂肪製滋養品

四、混合製滋養品　以上數種の滋養成分――所謂食素――を適當の分量に含んで居るもの。

等で、第一に屬する製品最も多く、第二に屬するもの之れに亞ぎ、第三第四は前二者に比し、至つて其の數が少ない。

其の應用　斯の如く、人工滋養品には幾種類もあるけれども、健康人の用ふべきものは、一つとしてないのである。之れを應用されるのは

一、普通の食物を攝取ることの出來ない場合、例之ば口内の病氣、食道の病氣、胃の器質的疾患（胃加答兒、胃潰瘍、胃癌等）で痛みを起す時。消化液の分泌が欠乏した時。其他腸の病氣等。

二、熱の發る病氣で普通食を禁じなければならぬ場合。胃腸の安靜を要する場合。

三、身躰が衰弱し、消化不良を起した場合。食慾が全く欠乏なつた場合。等であつて

其の効用　としては單に、食慾を催進め、或は神經を興奮させて其の機能を活潑ならしめる作用のある者もある。又主として營養を目的としたもので。普通食を攝れない時や、胃腸の食物の消化を能くしない場合に、成るべく胃腸に御苦勞を懸けないやうにして、營養補給の實を收めるつもりで作られたものもある。又物を咀嚼くことの出來ないもの、爲めに、蛋白質や、澱粉質を成るべく溶け易く、吸收され易い形として與へたならば、都合が宜からうといふので、調製されたものもある――斯の如く人工滋養品は、大抵合理的に調製て居るやうであるが、

其の價値　に至つては頗るあやしいものが多いのである。新聞の廣告には、貧血、虛弱のものは何週間用ゆれば神効を顯はすの、血色忽ちにして恢復するの、身躰たちどころに肥滿するのと、あらゆる誇大な文字を並べてあるのもあるが、決して信用にはならない。

世の中には最等の文字に眩惑されて、健康な體でありながら、日常の「補ひ」として用ひて居る人が少なくないやうだが、是れは大なる心得違ひ。既に前にも言つた如く、本品は主として病人の爲めに調製たもので、其の構造の上から言つても・また其の性質の點から觀ても、決して天然の食物に比して、優つて居る所はない。といふのは此の種の製品は、大抵其の中の成分が片よつて居る。吾々の身體は決して一滋養成分のみで生活し得らるゝものでない、必ずや他の成分と共に、適當の分量に躰內へ輸入しなければ効のない事は前章にも說いて置いた通りである。だから健康人は勿論、縱使病人であつても是等の製品は、止むを得ない場合の外は賞用すべきものではない。

身體の營養は矢張り天然の合成物──普通の食物に若くものはない、即ち營養品として、天然の合成物ほど理想的なものはないのである。其の味に於ても、其の新鮮なる點に於ても、且つ到る處で得られる點に於ても。

斯く論じて來ると、全然、人工滋養品なるものは半文の價値もない、無意味のものとなつて了ふ譯だが、決して然うとのみ貶へぬ。矢張り本品の力を藉り、助けを乞はなければならぬ場合が、いくらもある。唯惜しいことには、本品は一般に非常に高價であつて、一個の鷄卵、半合の牛乳が含有て居る滋養價を、本品中の或るものから得やうとするには、少なくとも十倍餘の價額を、拂はなければならないのである。これ大なる缺點ではあるまいか。

三　營養品の主要成分──所謂食素

營養品の主要成分たる蛋白質、脂肪、膠質、含水炭素、水、鹽類等のことについて概略の事を述べたいと思ふ。尤も此事は專門學の方へ踏み入る嫌ひがあるので、話も餘り面白味がなく、且つ大體に於て左程必要のない事であるから、省かうとも思つたが、後章との聯絡がつかなく

なるから、煩雑ながら説く事とした。

一蛋白質　食物中の蛋白質には動物性のものと、植物性のものとの、二種ある、が、化學上單に蛋白質と稱へらるゝものは、酸素、水素、窒素、硫黄等から成立つて居るものである（血液中の蛋白質は此の外に鐵分を含んで居る）

食物中に混在して居るうちは、種々樣々の構造を爲して居るのであるが、一度吾人の消化機内に入り來るや、何れも其の運命を一つにする。即ち消化液に逢へば、其の動物性なると植物性なるとに論なく、皆な一樣に、ペプトーンといふ單一のものに變化して、而して最後に體内に吸收される。體内に入つた蛋白質は、一は固形、一は液體として蓄へられる。前者は即ち人身體の基礎たる細胞組織をなし、後者は血液又は組織液をなすのである。

蛋白質の生活運爲によつて消耗せらるゝや、先づ液性のもの之れに當り、以て基礎組織の損失を節約すべく勗める。而かも液性蛋白質にして、日々消費さるゝも尚ほ、餘分のものがあれば、それを組織に附與して益々基礎質の增生を計るのである。基礎質の增生は取りもなをさず身體の發育で、身長の肥大、體重の增加として現はれる。

食物中蛋白質を多く含んで居るものを擧げると

○動物性食品の内では兎の肉、牛肉、馬肉、豚肉、鰹節、黑鯛、鰯、石決明等。

○植物性食品の内では大豆、蠶豆、落花生、腐皮、小麥、玉蜀黍等。

○液性食品の内では羊乳、山羊乳、酪乾、牛乳等である。

二、脂肪　これにも動物性のものと、植物性のものと、二種類ある。化學上、炭素水素酸素の三原素から成立つたもので、通常水には溶解せず、温に逢へば容易に溶ける性質を有つて居る。腸消化液に逢うて、一分は乳化し一分は石鹼化して、而して體内に吸收せられ脂肪組織といふものを形成する。

脂肪は蛋白質の消耗を節約する能がある、即ち蛋白質の身代りに立つものだから、脂肪を體内に饒

く蓄へて居る者は、皆強健である。其他脂肪は體温の放散を防ぐ能もある、だから脂肪富有の人は、寒中でも寒氣に犯されることが少ない。

食物中脂肪を多く含んで居るものは、先づ

○動物性食品の中では牛酪、家鴨、豚肉、卵黄、羊肉、牛肉、鰻等

○植物性食品の中では落花生、大豆、等である。

三、含水炭素　これに屬するものは、澱粉と糖類とである。化學上の成分は炭素、水素、酸素で、脂肪と大差がない。故に本品は脂肪と同樣に、蛋白質の身代りにもなり、又脂肪の代用にもなる能を有つて居る、だから本品を多く攝れば、蛋白質と脂肪とは、自然體内に殘つて組織の増生――身體肥大、體重増加を來たす譯である。

澱粉質は既に前章に於て說き盡せる如く、唾液や膵液の消化作用をうけて、糖分に變化するのである。元來澱粉質は不溶解性のものであるが、糖化すれば忽ち溶解して、輙く血中に吸收される。血中に吸收された糖分は、其の一部は、其のまゝ血中に止まり、他は「グリユーゲン」といふものになつて、肝臟の中に蓄へられ、必要に應じて隨時それを支出するのである。

含水炭素には動物性のものもあるけれど、夫れは至つて少なくして、殆んど植物性食品の主成分を成して居る。

四、膠質　は動物體の軟骨組織及び結締織等の中に含まれて居るもので、其の性、蛋白質に酷似し不溶解性のものであるが、消化せられて「膠ペプトーン」といふものになると、溶解性を帶て吸收せられるに至るものである。本品は前者と同じく、蛋白質脂肪の用を節するものである。

以上四種の食素は、其の中に窒素分を含んで居ると、居ないとにより、又別に『含窒素物』『無窒素物』といふ風に區別される。蛋白質は即ち含窒素の代表者で、脂肪含水炭素は後者に屬する重なるものである。此の分類法は後に至つて必要であるから、茲に一寸記しておく。

（此項未完）

育兒上の注意

侍醫 醫學士 三浦省軒

育兒のことに就ては、最早是まで世間の新聞または雜誌上等に於て再三再四繰り返へされて居るやうであるから、別に是と云つて取立てゝ話すことも無いのである、併し前にも云ふ如く、是まで新聞または雜誌等に唱道せらるゝ所は、隨分微細に渉つて居て、或は素人と云つては少し可笑いが、即ち一般世間の父母に望むには少しく無理な注文がありはすまいか、言ひ換ふれば專門家、即ち小兒科の醫師の範圍に屬する事を混じてありはすまいかと思はるゝ節も尠なからんやうに思はるゝのである、

併し其は孰れにしても、諺に上手の手から水が洩るとか云ふ如く、その微細の項目に渡つて講説せられた中に尤も育兒上に必要缺くべからざる大切の一項を忘れられて居りはすまいか、と云ふのは外でも無い、保姆すなはち子守の事である、尤も自分で自分の小兒の保傅をするものは格別として、先づ社會の中流以上に屬する生活を爲しつゝある家々にて子守を雇ふに就て、餘り注意を拂はれて居られないやうに思はるゝが、是は餘り注意を要せぬ事であるやうで、實は育兒の上に付て最も肝要の事に屬するのである

言ふまでもなく近年は衛生思想の發達した爲に、之に就て一般に注意する人が多くなつて、誠に國家の爲に慶ぶべき現象であるが、サテ一歩退いて脚許を見ると、自己の相續者および之に次ぐ所の大切なる子女を托すべき子守を雇ふにつけ、又は雇うたる後、約めて云へば、子守と云ふものに對して世間一般が輕視して居るやうである、故に子守の給料は炊事をする女中より廉い、從つて其取扱ひも粗略であつて、殆んど餘計者あつかひをする者すらあるやうに見聞するが、大切なる子女を托する親達の心得が大いに間違つて居ると云はねばならぬ、が之は强ち雇主たる一方のみを責ることは出來まいかと思ふ、

と云ふは今尚ほ之は根絶せぬやうだか、昔時より子守奉公に出るものゝ多くは、之を類別するときは、いまだ年齢の若くして炊爨の事に堪へざるものか、又は既に年老いて水仕奉公の出來ざるもの等であつて、謂ゆる口稼ぎのために子守奉公をすると云ふの類が多いから、自然雇主の方に於ても重く之を見ないのは勿論であるが、ツマリ之は双方ともに其本旨を取違へて居るのである、

若し子女の親たる雇主にして、子守と云ふものは前に云へる如く、自己の大切なる子女を托するものであると云ふ感念が深かつたならば、自然初めより之を雇入るゝに付ても精撰するであらうし又雇中とても鄭重に待遇するであらうと思はれるのであるが、何分子守奉公に雇はれて來る者の多くが前來の次第であるから、只主人の目の前のみを繕うて、一歩閾を踏み出すと言語に絶えたる仕打が多いのである、

私も只今では泰宮殿下の御降誕の翌年より拜診の

榮を辱うして居りますが、開業以來殆んど二十餘年間、隨分小兒も取扱ひましたが、その間の實驗に依りますと、子守の惡かつた爲に大切の小兒を危篤に陥らしめた事は枚擧に遑なき程である、私の如きものですらも斯様であるから、他の大家名家等には嘸かし實例に富んで居らるゝ事と考へる、

左れば親たるものは、小兒が斯く重症に陥らぬ中に注意をしなければならぬ、最早氣が付いて危篤になつてからは手後れである、然らば夫が左樣ならない前、即ち之を未然に防ぐことを講じなければならぬのである、その方法は種々あるであらうが、まづ焦眉の急務としては、子守を雇入るに方つて、その子守たるべき者は既に義務年限の教育すなはち尋常高等の小學校を卒業せしものなりや否、而して其當人は少くとも衛生思想を有して居るや否やと云ふ此二點に注意するのが最も肝要であると考へるのである、兎角是までは義務年限の教育の半ばすらも受けないものが多いやうであるが、是は至極險呑な事

と云はねばならぬ、依つて將來は以上の二點を精しく調べて後に雇入れるやうにされたいのである、

從來の例に依れば夫等の要素即ち子守たるの資格を精査しないで雇入るゝが爲に、大切なる子女を其子守に托して外出せしむる時は、その子守たる者は若しも小兒の泣く時は、それを止むるの策として毫も小兒の腸胃等の消化力などには注意せずして、無暗に自己の食する豆類、又は蜜柑、茱萸その他種々の物を與ふるからして、それが爲に小兒の腸や胃を害したり或は熱を發し下痢を起す等の事は尠なくない、又子守たる者が自己の遊びに溺れて居る間に、小兒が椽の上などより墮ちても、外に傷の表はれて居らぬ時は、その子守が隱して言はない爲に分らないが、翌日に至り其が爲に腦膜炎等を起すことがある、斯樣な事は決して珍らしく無い、併し左樣なつてから怒つて暇を出しても取返しの附くものでは無いのである、是は畢竟初めに雇入るゝ時の不注意に基くので、換言すれば子守に重きを置かない罪に歸すると云はねばならぬことである、

右に就て予は十數年前より考へて、未だ實行の運びには至らぬが、例へば、東京の如き市では一區に一箇所位づゝ子守學校とも云ふべきものを設立して既に小學の義務教育を卒へたる者を收容して、半年乃至一ヶ年の間この學校に於て子守に必要なる事項を授け、此所を卒業したる子守は、他の者よりは給料を良く雇ふ、のみならず總て待遇をも善くすると云ふ風にしたならば、雇入るゝ者も又雇はるゝ者も相互に便益を得ることであらうと考へるのである、固より子守に要する事は簡單のものであれば、年限は半年乃至一ヶ年で十分であらうと思ふ、併し教授は無論月謝無しにしたいのである、それに就ては種々の方法があらうと考へるが、兎に角從來の子守の弊風を匡救するには如何しても之が必要であらうと思ふのである、

次に育兒上の弊害とも云ふべきは、之は子守の口からよりも親達の口より種々の事を強るのである、

即ち此くお辭儀はすべきものである、それは此く言ふべきものである、之は斯くせよ彼は左樣すべからざるものであると云ふが如く、いまだ小兒の智識の發達せざるにも頓着せず、無暗に人工的に智識を注入して、若し客でも來て其を擧むるを見て喜び益々之を强る親達がある、けれども之は決して賞すべき事ではない、何んでも幼少の時代には壓迫を加へずして自然に放任して置くのが良いのである、無暗に人工的に干渉を加へて智識を注入しやうとするのは甚だ兒童發達の天則に背いて居るのである、



元來小兒と云ふものゝ腦裏には、生れつき智識を蓄へて居るのであれば、側から氣を揉んで無暗に注入せずとも良い、此の故に幼稚園や小學校の程度を見ても分るのである、決して夫等に於て兒童を教育するに注ぎ込み主義は取らない、孰れも兒童の腦底に蓄へて居る所の智識を抽き出して、之と社會の事物と合せるやうにするのである、左れば未だ幼稚園に通ふ前に於ける小兒等を家庭にて育つる時代にも成るべく親達が干渉しないで天然的に導くやうにして貰ひたい、若し左も無いときは知らず〳〵幼兒の體質および機能に害を及ぼすのであるから、此の事は十分注意して小兒の爲を計ら

ねばならぬ事と思ふのである、

その他睡眠や飲食のことなどに就いては、前陳の如く已に業に諸大家が言ひ盡されてあるから、別に更めて此に說く必要はあるまいが、只一二注意して置きたいのは、よく世間の親達等が小兒の睡眠を半途で覺すことがある、例へば、夕方などに熟く眠つて居ると、夜中よく眠らないと云つて起すことがある、けれども是は決して宜しくない、諺にも寢る兒は育つと云ふが如く、小兒の睡眠は小兒自身の發達上に大切なる關係を有つて居るのであるから、是も無暗に人工を施して小兒の睡眠を覺さないやうにして、十分眠るだけ寢せるが良いのである、

次に飲食と云ふ中にも乳を哺ませることであるが之も醫者が二時間乃至三時間ごとに與へるが良いと云つたからとて、強ち其言に拘はつて、小兒の眠て居るのを無理に目を覺まさせてまで呑さなければならぬと云ふものでは無い、さう云ふ時には放ッて置ても差支は無いのであるから關はぬが良い、併し睡眠の時間外に乳を與ふるには、成るべくたけ時間を節めて遣るが可い、世間には往々小兒が啼くからと云つては直ぐに乳を哺ませるが、之は甚だ宜しくない、何故なれば、如何に乳は液體のものであるからと云つても、恰も大人が喉が渴たからとて餘り多く水や茶を須ゐれば胃腸を害すると等しく、小兒も必らず消化器を傷めるのである、況して小兒の消化器と云ふものは、まだ甚だ其の作用の薄くして且つ力の弱いものであるから、これ亦大いに注意すべき事である、と云ふば、少し卑陋のやうだが、日に何度となく小兒が排泄する所の物の色が其時々に變るのを見ても分るのである、是ば乳を澤山與へたばかりと云ふでも無いが、多くは之に原因するのであるから、是等の注意を忽せにしてはならぬ、



家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第四　注意力

この前に、氣分、と云ふことを御話いたしましたが、この氣分といふものは多く人の感情に基いて居るものでありまして、之に苦樂と云ふやうなものが伴なつて居るのである。

それで注意と云ふことは、物ごとをして行くのに極く大事な作用でありまして、總て物ごとを考へて行くと云ふには、缺くことの出來ない、心の或る作用であります。

この注意、とそれから前の、氣分、と云ふものが一緒になつて作用き、おなじことでも好く出來たり又惡く出來たりするやうなことになるのであります。

好い氣分を持つて注意が十分作用けば、必ず物ごとはよく出來るので、其の物を非常によく爲ることか出來るのであります、其ですから、物事をよくすると云ふことを務めやうと云ふには、注意、と云ふことをよく養ふことが、極く必要であります。

さて、注意、と申すことは皆樣も御存じの、心を一ツ處に寄せることであつて、全體心の性質と云ふものは種々の事に移り替つてゆくのが本性でありまして、一ツことに自若、留つて居ると云ふことは極く少いのでありますがこの一ツことに心を留めると云ふことは、最も大事なことであります。

元來人は動物と同じやうなもので、一ツことに心をよせると云ふことが極く出來にくいのである。

併し一ツ事を遣り出したならば、心を一ツことに十分留めて置く習慣をつけることが大切なことでありまして、小供のときから、十分一ツことに心をよせるやうに心懸くることが肝要である、けれども小供のときには、一寸も自分で一ツ事に心を留めやうといふ心を起すことが出來ないので、詰り、面白い事とか、美麗なことゝか、自分の心をそれに奪は

れて居る間すなはち自分が外界からも刺激を受けて居る其の面白い間は一ッ事に心をとめて居るが、其れが倦きるとすぐ捨てゝ仕舞ふと云ふ風に、少しも自分で自分の心を支配してゆくと云ふことが出來ないのは、自然であります。

それで小供ばかりではなく、下女や下男其の他教育の無い人などは始終其心が替つて一ッことばかりに心を留めてやつて行くと云ふことが出來ないのであります。それですから仕事をしても、縫目が曲つたり綴ることを忘れてしまつたりするやうなことになるのであります。

これは心が他に移るからでありまして漸々と心を修練して行きますと縦ひ他からいろ／＼な刺激があつても其れに打ち勝つて自分の働いて居ることに十分心を集注すると云ふことが出來るやうになるのであります。

殊に一家を治めて行くには之が極く大事なことでありまして、自分が何か考へねばならぬといふときには此處に心を集注して一ッとを整然と考る人でなければならないのであります。

女中などがなにか漠然として粗忽をしたときに唯叱つたばかりではいけないので、必ずよく練習をさして注意力を一處に集めるやうに進めて行かねばならぬのであります。

それで前に云つたやうに感覺を練習し氣分の好し惡しに氣をつけると云ふやうに、根本から心を養つてゆかねばならないのであります。

不注意のあつたときにはよく其の原因を示して斯ういふ處がいけないのである、斯ういふ處は斯うしなければならぬ、と云ふ風に極く細かいところを敎へてやることが、小供や無學な者を導くのには大事であります、唯叱るばかりではいけないのであります、叱られたときは、叱られないやうにしやうといふ考へでも、根本から養つて行かねば到底駄目で

あります。

注意はかうして養つて行くのでありますが

この注意と云ふものは、又習慣によつて大變よく届いて來るやうになるものでありますから、よく習慣を養つてやることが必要である

例へば客が來るすぐ下駄を片付ける盜られないやうに仕舞つて置く、と云ふやうなことを好く氣をつける家と、また少しもかまはない家とあると、此は其家の主婦や、下女が馬鹿であるといふのではなくて、習慣をつけて置かないからである、

斯うして置くと、客が歸るときも大變心持をよくするし又泥棒に盜れないと、云ふやうな譯で度々さうすると、之が遂に慣になつて仕舞つて、客が來るすぐ履物に氣をつける、仕舞ふと云ふやうに我れ知らず注意をすると云ふやうになつて來るのであります。

それで一家を治めて行く人は、其の一家の中の事を、自分が一々考てやつて居るやうでは、とても間に合はないので、大概のことは、注意が自然と一人で其れに向いて來ると云ふ風に大抵のことは、自然とやれるやうに慣をつけねばなりませぬ。

其れで新しく家を持つた人は、學校で敎はつたことをよく實際經驗して見、比較て見て、自分の心持が好い、比べて見て以前より淸潔になり好くなつてゆくといふとを考へて之を實行して見る、さうして好かつたならば、之を根本として漸々改良をしてゆくと云ふやうに、又之ではいけなかつたからかうしてゆかう、あすこでいけなかつたから、かうして行きませうと云ふやうにしてゆけば、初めて本統のことも一人でに出來て來る、自分の考へなかつたことも顯はれて來ると云ふことが出來るのでありますから、注意を習慣にして仕舞つて殆ど心を勞はすして出來るやうに務めると云ふことが、大切なことであります。

それから又今言たやうに、注意を依然と一處に集めて一ッ問題に心を傾け他に移らないと云ふことが

大事であると共に、
もう一ッは自由に心を轉じて行くといふことが必要であります、

例へば一ッことばかりして居て恍惚して居ると叱られることがあるが、これは一方のことばかりに心を向けて、他に心を向けることが出來ないからで、必要によつてその注意を移り替らして行くと云ふことが出來ないからであります。

詰りよく氣のつくと云ふ人は、自由に、注意が移り替つて行く人を云ふのである、

鑿と云へばすぐ槌と云ふやうな、鑿を使用へば槌が入用と云ふやうに、自然と注意がそれに、向いて行くといふことが極く必要なことであります。

年寄などは經驗が澤山あるから、よく方々に氣がつきたとひ身體は動かないで居るけれども、心中ではよく氣がついて居るものである、そこで若い主婦などが氣がつかずに、一ッことばかりに氣を取られて仕舞つて、先のことを考へないからよく小言が出るのであります。

何處にか出懸るとか又着物か何かを出せとか云つたら、すぐ氣を利かして、杖を出すとか、雪駄を出すとか、と云ふやうに、其の履物も、天氣によつて、下駄にするとか、足駄にするとかと云ふやうに向ふから云はれない前に氣を配つてゆくと云ふことが大變に大切なことであります。

これは年寄を扱ふのに限つたことばかりではない他の事でも矢張りその通りである、先きから先へ心を追つて、始終、注意を向けて行くと云ふことが、世を渡るに就ては大變に大事なことであります。

學者として世に立つにも、實業家として世に立つにも、よく注意が行き渡つて、所有方面に向つて心が付くから、成効するのであつて、學者が學問を勉強するに、一方ばかりに心を寄せて居て外の方面のことを一寸も知らんで居ると、自分ではよほど解つて居るやうでも、案外、立派なことでない、役に立たないことがある。

商賣人、殊に企業家、相場をする人などはこれが大事である。

斯ういふことがあるから斯ういふ風になつて來るであらうと、注意を多方面に働して居ると、新聞を見ても、何か變つた事があると直き自分の仕事の上に考へ、斯う變たことがあると、かういふ影響があるだらうと、先から先へ注意が移つて、想像を廻はしてゆくやうになるのであります。

この事は一家の中でも十分使つてゆかなければ、家庭の中は常に愉快に和合して行くことが至難いのであります。

それで惡意で注意をしないのか、心が足りなくて注意をしないのか、二通りありますから、大變利口であつて、今迄よくして呉れたのに、大變に氣が付かないやうになつたと云ふのは、其れは惡意でありますし。一方は自分の心が足りないので、いくら遣つても出來ないのでありますから、之をよく注意して、一家の主婦たる人は、十分注意して、惡意であるか、又根本から出來ないのであるかを、よく見分けなければならん。一方の心の足りないのは罪がないので、決して責むべきではない、之をよく養つてやると云ふことが必要である。

前の感覺と同じ樣に、身體の狀態によることが多いので、何處か身體に惡い處があると、大變一般のことに不注意になり、自分の惡いことにばかり注意して、外の人が惡いと云ふと、大變それに氣をつけると云ふ、同病相憐むと云ふのは是から來るのである。

それで其の事にはよく氣が付くが其の外のことには全然氣が付かぬやうになるのであります。

其れであるから家に召使つて居る者、又小供などには、身體の狀態から來て居るのもあるから、大きな聲をして叱つてばかり居てはいけないのである、よく之を察してやらなければいけない、何處か惡い處があるのである。

前に御話したやうな、物を破したりすると云ふのは、感覺が足りないとか、智惠が足りない者とか、又身體の何處かに異狀のあるために、一方の注意が疎畧になつて、さういふ樣な失策をすると云ふ事があるから、家を治める人は、よく働く者の心を思ひ遣て、夫々注意して行かねばならん事であります。

婦人の衛生

楠田病院長　楠田謙藏

分娩

妊娠十月に及びて期の熟する時は、胎兒は遂に母の體を辭して產出するのである、之を分娩と云ふのである、

この分娩に近づく時は屢下腹に痛みを覺ゆるもので、此の痛みの起りたる後、二三日若くば一二週日にして分娩期に移るのである、

尋常の分娩を爲し遂ぐるには三箇の要件がある、即ち第一は胎兒の通過する道の狹くてはならぬことと、第二胎兒の位置の正しきこと、第三胎兒の產出する力の充分なるべきことゝであるが、之と關聯して胎兒殊に其頭の異常に大なるべからざること、胎盤の附着したる部分の尋常ならざること、產婦の身體の健康なるべき事である、而して分娩に當りては此事に通じたる熟練なる產婆の補助を要するのである、

夏は冬よりも分娩の時間が短いと云ふものがあるけれども之は取出でゝ言ふ程の事はない、

併し國に由ると云ふよりも、人種の文野に因つて分娩の時間に遲速のある事は爭ふべからざる事實で凡て野蠻人種の分娩は容易である、けれども文明國人殊に高等の生活をなせしものには分娩の困難なる事が多いのである、

乃で我國に於ける尋常の分娩の平均時間に就ては今なほ調査中であつて十分定まつては居らぬが、先づ大抵初產婦は平均十二時間ばかりで、二度目からは六時間ほどのものが多いのである、

前に述べたる如く、今や胎兒が母體を辭せんとする刹那は、陣痛が最も烈しく且つ腹壓も又其極度に達するから、產婦の顏は紅を潮し冷汗を流して、その心も甚だ穩かでないやうだが、一旦胎兒の娩出する時には、產婦は忽ち快く且つ心も靜穩に復するものであるが、稀にはいたく疲れ果てゝ人心地を覺えぬ者もあり、或は惡臭甚だしくして蒲團を重ぬるこ

とを望むものもある、兎に角分娩の折の處置は凡て産婆の擔當するものなれども、時としては産婆を招くも間に合はざることあり、又たとひ産婆は間に合ふとしても、姙婦および其家人たる者は分娩のをりの處置を一と通り心得置きて産婆を補くることは大いに必要なる事である、

既に眞の陣痛を發するに至つたならば、直ちに産室および産牀を用意すべきは勿論、且つ姙婦の身體の用意をも爲さねばならぬのである、

ソコデ産室は餘り狹く無い、少くとも六疊敷位の閑靜な室を撰び、空氣の流通を宜くし且つ光線の十分入るやうにすべきは云ふ迄もなく、若し冬ならば相當なる温度を保たしめ、夏ならば成るべく涼しくするやうに爲し、而して室内にある不用の家具類等は凡て他の室に移し、能く掃ひ清めたる後に産牀を設くるが宜い、

その産牀は敷布團二枚ばかりを重ね敷き、その上に白布の上敷を被ひ、更に其上に澁紙を敷き、産婦の臀部に當る所には消毒したる木綿の中にガーゼおよび綿の清潔なるもの、又は藁灰を入れて造りたる蒲團を置くが良い、

斯樣に作りたる産牀は、四方ともに總て壁や障子などより離れて、何れよりにても人が産婦に近づく事の出來るやうに室の中央に位置せしむるが宜いのである、

而して産室の一隅又は隣室には、豫て産婆より調へ吳れたる消毒液、小兒の臍帶、産婦の腹を被ふべき繃帶、臍帶を結ぶべき糸、臍帶を斷るべき鋏、臍帶に付くべき藥、消毒液に浸したるガーゼ、小兒の顏を拭ふべき布片、小兒を裹むべきタオル、金盥二三個、便器、膿盤、清潔なる手拭、石鹼、清水、微温湯などを稍能く配り置かねばならぬのである、

その他別室には小兒の臥牀を設け、湯盥を備へおくべし、寒き折には母のためにも又小兒の爲にも三個の湯婆を用意しおかざるべからず、而して湯は常に不足を告げざるやう湧し置かねばならぬ、

姙婦の產牀に入るときは、淸潔にして究屈ならざる衣服と着換へ、頭に櫛又は簪の類などつけたるものは、凡て之を取り去り、產牀に入らば平らかに仰きに臥るが良い、尤も時としては醫師又は產婆の命によりて橫に臥さしむる事もある、

產室には無用の人の猥りに出入する事を禁ずべし室內の事は產婆と、事に慣れたる二三の人の補くるものがあれば事足るものである、

若し陣痛の劇しきときは、產婦の手にタオルの如き柔らかなる物を握らせ又は傍らの人の手を握らしめ、或は蒲團を積み重ねて脚を支へ、若くば手巾の類を口に含ましむるが良い、

嬰兒の既に生れ出でたるときは、直ちに軟らかなる布もて其顏を拭ひ、殊に、其眼と口とは能く注意して拭ふべし、然る後に乾きたる温かなるタオルなどにて克く包みおき、蒲團などにて壓しつけられぬやう注意すべきである、

右の外尙ほ種々の注意すべき事項少からずといへども、概ね產婆の爲すべき事なれば此には省きて只產婆の來ること遲き場合等に於ける家人の注意までに留めておく、

兎に角分娩の際に於ける萬端の事は一切產婆に任せおき、而して分娩の後、之に用ゐたる布片または綿などは一纏めとなしおき、之を取扱ふものある所にては、その者に運び行かしめ、然らざる土地に在りては相當の場處に埋むべきである、

茲に尤も注意すべきは、何れ汚れるものなればとて、衣服および布團の類を初め、產褥の下に敷くもの等、成るべく汚れたるものを用うるの風習あれども、之は尤も恐るべき事にして、分娩のために汚れたるより 却つて其穢き布片類より尤も恐るべき傳染を來すことは、最早一般世人に知れ渡りたる事柄なれども、之を知りつゝ殊更分娩の時に方りて之を忘れて襤褸の類を用うることあれども、必ず之を避け之を用ゐざることに心を留めざる可からざるものである、

牛乳と衞生

島田琴糸

近年は牛乳の需用者も日一日と増加し、從つて之が供給者も增加して來たが、果して之は國家の爲に慶すべきや否やと云ふことは姑らくお預りとして、人が飲むから我も飲むと云ふ者は是また論外として苟も衞生攝養の爲に飲用するものは大いに注意を拂はねばならぬ事が多々あるであらうと思ふのである依つて思ひ浮ぶがまゝに書き立て見やう、

牛乳に就て第一に喧しい問題は良不良と云ふ事であるが、之は中々素人にサウ容易く分るものでは無い、とは云ふもの丶腐つたものと然らざるものとは誰でも直ぐ判るが、その他は何を標準として判別するかと云ふに、まづ之が監督の位置にあるものと及び當業者との口調等を列べて行つたら自から判明するであらうと思ふのである、ソコデ或一人の當業者は、一口に不良牛乳と云ひますが、何も之を飲で害になると云ふ譯ではありません、我内務省令では、二、八以上の脂肪を含有するものと規定せられてあるが、警視廳では三、〇以上の脂肪分を含有するものと規定されて居る、故に東京は警視廳の取締りであるから、三、〇以上でなくてはならぬ事になつて居るのである、

ソコデ何うかすると乳牛から出た其物に脂肪分の少ないのがあつて、三、〇以下に降つて居るものがある、斯う云ふなのが見付かると、不良牛乳として罰せらるゝのである、併しそれは飲んで害になる毒になるといふ譯では無い、一方には脂肪を脱て仕舞つた、所謂脱脂乳といふものを賣つて居る位ですから二、八若くは二、〇の脂肪の牛乳も、それだけの効能はあるけれども、只三、〇以上と規定があるから、それ以下では功能が薄いものを賣るといふ事になるからそこらの點から警視廳では不良牛乳と云ふのであると考へます、尙ほ他の一人は、

クリームを取つた後の牛乳を配達するやうな事を

云ふ者がある、けれどもソンナ事を爲るものは同業者間には無からうと思ふのである、山の手や横濱などは何うか知らないが、下町の方には餘り西洋人は居らず、從つてクリームの賣口が無いのである、左ればクリームを取つた所が仕樣がない、重ねて之を賣却するの勞を取らなければならぬから、誰も其樣な事は暇潰しであるから仕ないのである、



若しもクリームを掬つて取つたとすれば、無論脂肪が無くなるのであるから、直ぐに警視廳の取締に依つて不良牛乳とせらるゝのである、別に檢査法に依るまでもなく、瓶に入つて居るのを透して見ると上の方にばかり脂肪が浮上つて居るのが知れる、さう云ふ牛乳なら大丈夫である、

左れば牛乳の不良と云ふ事は中々六づかしい程度のもので、警視廳令に依れば、全乳の脂肪量は百分中二、八以上とし、それ以下は不良としてある、併しそれは何も水を混ぜた譯でも何でもない詰り飼料の不足か何かで、乳牛から出た乳に、自然脂肪が少なつたまでの事である、

何と云つても内務省令に基いて、警視廳の取締が嚴重なのであるから、營業者も匆々油斷は仕ない、何せなれば一度不良牛乳といふ事が分れば、直ぐと

新聞等に書かれてお得意が減るのであるから、決してクリームを掬つて取つた後の乳を配達するやうな事は出來ないのである、又水を混合するなど、疑ふものもあるが、若し水を一滴でも混合すれば、牛乳は立ちどころに腐敗するのであるから、決して其樣な馬鹿な眞似をする者は無いのである、之も或一部分には耳を假すべき點がある、尙ほ他の一人は斯う云つて居る、

牛乳の良不良と云ふものは、全く牛種の如何に因るのであつて、飼料ばかりで良くする事は出來ないのである、元より飼料に由つて乳質を粗惡にする事は出來るが、或程度以上に善良ならしむる事は出來ぬのであるけれども素人の方にはチヨット判るものでは無い、

ソコデ牛種の最上等はゼルシー、ゲルンジーで最も脂肪が多いのである、次は短角、エシヤ、ブラオー、ホルスタインなどは大同小異なものである、縱ひゼルシーでも、豆腐殼、ビールカス、アンガラな

どの飼料を與へて居る分には牛質が惡くなるのである、何うしても干草、燕麥、フスマ、大麥、唐黍、油糟のやうなものを與へねばならぬのである、それ故に何處の乳牛が良いか惡いかを鑑別するの方法としては、その牧場に於て、牛に與へて居る飼料を調査するのが捷徑である、

彼の消毒牛乳は其字の示すが如く危險ならしむる爲である、けれども消毒すると甚しく乳質を害する、何せなれば蛋白質が固定するから、本統は生乳の方が衞生的なのである、私の店では消毒乳よりは生乳の方に資本が掛るのである、一寸考へると消毒乳の方が金を要するやうであるが、實際は生乳の方に金が掛るのである、何せかと云ふに、生乳の方は衞生牛乳として賣つて居るが、牧場の方では衞生牛舍といふを建て、內部の組織が凡て消毒牛乳搾取場とは違つて清潔にしてあつて、搾取の場合にも注意が違つて居るのである、

右に反して消毒乳を搾取する場所は、消毒法に依

つて總てを清潔にするのであるから、消毒費は掛つても衞生牛舍に比較すれば安價になるのである、それ故に、衞生牛舍に於て搾取した乳なら、生乳の方が飮んで功能が多いのである、一般に此くありたきものである、所が、

人工的牛乳と云ふ奇怪な名稱を有して居るものがある、今は姑らく其氏名を預つておくが、東京市内に於ける有數なる同業者の一人で、巣鴨に牧場を持つて居る某舍では、八錢の乳を賣つて居るが、あれは何う云ふ所が違うのであるかと尋ねると、サ、バ普通搾取する乳に四錢もあれば五錢もあるかとすれば、六錢もあれば八錢もある、この八錢といへば普通のもの丶倍であるから高價に相違ない、けれども夫は何も同じ牛の乳房から出たものに左樣懸隔のあるべき筈のもので無いと云ふ事である、

四錢の牛乳も警視廳の取締りの通りに、三、〇以上の脂肪があるのですから、滋養になる事は無論のことであるが、元來牛乳は脂肪の多いのが上等で、少ないのが下等と云つたやうなものであるから、四錢の乳に脂肪が最低位の三、〇あるものとすれば、八錢の乳にはその倍の六、〇なければならぬ譯である、然るに六、〇の脂肪のある牛乳を出すやうな牛はヨモヤ無い筈である、牛に由つて三、〇と六、〇と云ふやうに脂肪の差があることは未だ曾て聞かない事である、

聞く所に依れば同舍では、セパレーターと云ふ機械で、牛乳から脂肪分だけを取つて、それを他の牛乳へ混ぜて脂肪を多くして居ると云ふ事である、であるから六、〇でも七、〇でも何んな牛乳でも人工的に製する事が出來るのである、左もなくては迚も牛の乳房から出た儘なれば、八錢など丶云ふ高價な乳は無いのである、

去りながら脂肪は右の如く人工的に增しても、他の蛋白質や何かは其比例に增加はしない、只脂肪だけが增加したと云ふだけである、左れば何も四錢五錢の牛乳が惡いと云ふ譯では無い、之が當然の牛乳

＊　＊

である、八錢と云ふは人工的に脂肪を殖したのである、之は隨分暴利すぎると思はれる、併し飮むなと云ふのでは無い、それも結構として措て、玆に斯う云ふ矛盾がある事は蔽ふべからざる事實である、即ち、

　客と商賣人との間にある惡い習慣である、それは客の方では安くて善い乳を持つて來いと云ふ、けれども之が人工的に製造し得らるゝものと違つて、動物から搾取するのであるから、飼料の安い物を喰はして居ては善い乳が出ない、從つて良い飼料を與へれば資本が澤山かゝる譯であるから、善い乳を安く求めやうと云ふのは、チト無理な話で、値段を値切らるれば、自然惡い乳が來るのは當然である、

　營業者の方にも亦惡い事がある、ソレハ特別に人工的に脂肪を多くした乳を欲する客に對しては格別であるが、左なくば七錢八錢と云ふ高い乳を賣らなくとも宜いのである、牛の腹から出たその物では、餘程良い飼料を喰はした牛乳とて、八錢などゝ云ふ乳の出やう筈がないのである、それを入物を飾るとか又はペーパーを貼るとかして、大層善い搾り立ての乳のやうに見せかけるのは、德義上良くないと思ふのである、

　若し脂肪の多いものが必要であると云ふお客に對しては、正直に牛の腹から出たものには、脂肪が若干より無いから、クリームを混ぜて上げませう、その代り七錢頂くとか八錢貰ふとか、客の得心の行くやうにして商賣したら宜からうと思ふのである、

　また一つ玆に斯ういふ衝突がある、それは醫師と牛乳商とである、醫師は牛乳を消毒するには、百度以上の熱にて三十分と云ふに一致して居るのであるけれども實際百度以上三十分の消毒といふ事は、甚だ乳質を損するものであれば、苟も消毒の出來る以上は、成るべく其時間を短縮せねばならぬのである或人は、八十度以上九十度の熱で消毒が出來ると云ふけれども、それは恐らく百度以上の熱でなくては不可と考へらるゝ、であるから百度以上三十分と云

ふのは長過ぎるから八分時間位で善いと或者は實驗談をせられた、此の八分でさへも多少乳質を損ずるのである、それにも拘はらず、醫師の云ふが如く百度以上三十分など云ふ長時間に渉つては、消毒には良いかも知らんが、牛乳のためには甚だ策の得たる者と云ふ事は出來ないのである、

以上述べ來りたる所に於て、看客の鋭敏なる頭腦は、已に業に其撰擇の方法、滋養の多少等は識別せられた事であらうと思ふのである、依つて管々しく蛇足を添へる事は省略したのである、

料理及菓子製造の實驗

富田豊春

薩摩芋の酢の物

薩摩芋の皮を剝ぎ、極く細く千六本に庖丁し、少し鹽を振りて、熱湯を掛け、露を切り、別に酢一合味淋酒二勺、醬油一勺を合せ、前の芋へかけ、酢のものとして、酒客に出すも妙なり。

捨小舟（香の物）

白瓜を二つに割り、よく中の實を去り、鹽を盛りて、日に干しつけ、六七日も經過して、カラビたる時に壺に貯へ、冬より春にかけて、味淋酒に浸し置き、珍客に出し、饗應に尤も妙なり、『夕立や干瓜の身を捨小舟』といふ句によりて名付けたりとぞ

即席芥子漬の茄子

茄子を小口から二分位に輪切にして、鹽にて揉み芥子を酢にてゆるく溶し、前の茄子を交ぜ合し、器に入れて重き押石を置き、二三時間ほど經過すれば食する丈、小皿に移し醬油を少しかけるべし

（注意）一度の食用だけ漬るべし。

牛肉てり燒

牛肉のロースを二分位に切りて、俎板の上に置きビールの明壜にて叩き、醬油へ唐芥子を二つに剝きて入れ（醬油一合なれば唐芥子五本位）、夫れへ前の肉を漬け三四時間經過したれば、金串をうちて燒き

上液汁をつけて再三燒くべし、◎上液汁の製法は、味醂酒一合を能く煮詰め五勺位になりたれば、蜜を少し入れ又煮詰め、前の唐芥子醬油を少し入れて、鹽加減をなすべし。

やたら漬

白瓜、茄子、胡瓜、新生姜、茗荷の子等色々な形に庖丁て、蓼、紫蘇の實等皆一緒に鹽少しく入れ、よく攪交せ、器に入れ、押し蓋をして、押石を置き二三時間經過すれば、食用になる

(注意)一二度食するだけ製すべし。

梨の酒媒

梨の皮を剝ぎて、適宜に庖丁し、わさびを卸して(卸し方は本誌四月號參照)少し宛、かけて、ガラスの中皿へ氷の片々を置き、其上へ列べて客に出すべし、觀月の席などによし。

豚のおぼろ煮

豚の赤肉を薄く切り、鹽茹にして擂鉢にてすり、『おぼろ』とし、別にヂャガ芋を四分角に庖丁してザツト茹で、前の肉と交合せ、胡椒を振掛け、西洋皿に盛るべし。

◎めしのいろ〳〵のつゞき

粟めしと黍めし(但こはめし)

粟めしと黍めしは、田舍の洒落に偶々製するものなり、予が一絃琴敎授のため、駿河、伊豆地方へ漫遊して、門人の豪農家抔にて、折にふれて此飯を饗應せられたる事あり、至極淡白にして風味もよく、茶媒などにもよし、製法は粟なり黍なり能く搗きて一晝夜程水に漬置き、蒸籠にてふかす、湯氣が上りたれば、冷水を手水にて打ち、再び湯氣が上りたれば、又手水をうつ事三四度すべし

(注意)手水を度々打てば柔かになる、普通のこはめしより少し柔かき方よろし。

稗めし

稗めしは、山間僻地の住民が食用とするものにて米麥共に耕作出來ず、他方より運搬すること不便のため止むを得ず稗とエゴ芋を作るなり、予が目擊し

たるは、遠州秋葉山の奥にて信州との國界に地方村といふ一小村にて土民の咄しを聞くに、何を作りても、折角芽が出ると猪、鹿或は兎抔が、悉く芽も根も荒して仕舞ふ、夫れ故如上の二種を作り、年中の常食とする由なり、加之耕作するにも、又調理するにも、余程面白き異法あり、◎極冬に猪が山皈來を採食しに來り、鼻面にて山地を堀り起す、其所へ三四月頃、エゴ芋といふ極く小形の里芋の如き物を如上猪の堀起した所へ植えて置けば、葉も莖もエゴき故決して獸類が喰はず、併し一個の親芋へ小芋が、稍く三個位の外は出來ず、秋期に至り、採取して家屋の中の土間にいけて貯蓄し、稗と共に年中の常食にす、之を什麽して食するかと云ふに、如上の芋を泥付の儘、水より茹るに、蓋は決して取らずに冷し、温氣全く無きを見て初めて洗ひ、皮を剝ぎ鹽をつけて食す、稗は能く搗き柔かくめしに焚き、前の芋を入れ、鹽加減をして交ぜ合せて食す、如斯粗食では、人體健康を保つまじと、誰も思慮するならむも、そこは不思議なる者にて、山間にては獸類の肉を食用とすれば歐米人がパンを食すると同譯なり

黒豆めし（甲子めしともいふ）

黒豆一合に水一升五合程入れ、釜にて茹で、煮上りたれば、色を出す、（色出し法は本誌四月の巻料理實驗に詳しくあり參照すべし）米一升を能く磨ぎ、前の液汁に一時間程漬け置き、鹽を少し入れて焚くべし、是は甲子の日大黒天へ捧ぐるために焚くものとせり。

蠶豆めし

蠶豆めしは、乾したる蠶豆を一日程水に漬け、柔かになりたれば、皮を剝ぎ、（新豆なれば直ぐに剝ぐ）ざつと茹で、米一升に付豆二三合位の割合にて、水加減は普通より一割程多量にして、鹽を少し入れて焚くべし

豌豆めし

白豌豆の新豆なればそのまゝ乾し、ひね豆なれば一日餘水に漬け置き、柔かくなりなれば、米一升に二三合の割合にて鹽を少し入れて焚くべし。

母と乳兒

醫學士　久保杏林

かやうの問題に就ては隨分是まで世間に唱へられつゝある事であるから、別に珍らしい事もなからうが、併し中には少し變つた事が無いでもないから、聊か子を持つた方々のために記すことゝした。

まづ第一に乳呑兒が屢々病のために苦しむのは何が爲であるかと云ふに、多くは哺育より來るのである、尤も世の中には、職業上又は健康上の關係などより、その子に生母の乳を與ふる事の出來ないものがある、かゝる場合には何うして愛兒を哺育したものであらうかと云ふに、富有の家庭に産れた子女は、幸にして相當なる乳母を雇ふことが出來るから、別に不自由も感じまいが、その他の家の子女にありては、他人の乳を得ると云ふことは却々困難であるから、大概は牛乳の類を以て哺育さるゝのである、

そこで牛乳と人の乳とは、其成分等に於て如何なる差異があるかと云ふに、別に變りは無いのみならず、その効力も亦略同じものである、けれども人の兒は人の乳で育てるに優るものは無いのであるが、若し止むを得ず之を代用しなければならぬと云ふ場合には、決して其儘に用ゐては不可い、大約牛乳一分に水三分、乃至牛乳二分に水一分位の割合に稀薄にして、それに精良なる砂糖を少しばかり混ぜて、よく煮立てた後に與へなければならぬ、

それにも拘はらず、世の母なる人を見るのに、牛乳を稀薄にしたならば、從つて其成分も弱くなるであらうと云ふことを恐れて、その儘に與へるものがある、けれども之は大いなる誤りである、何故かと云ふに、物を消化す力の十分なる大人と、まだ消化力の不完全なる乳呑兒とは、その與ふる食物も異にしなければならぬと云ふ事は分り切つた事であるから、

されば若しも牛乳を其儘に與ふる時は、乳兒の胃にては之を消化するの力が弱いから、胃を刺戟して

其一部を吐き出して仕舞ふ、或は時として其爲に全く消化器を害するに至ることがある、

又牛乳の代りにコンデンスミルクを薄くして與へても可い、或は生後三ケ月を經たる乳兒には、白米を煎じた汁を漉して與へても宜いが、此の米汁は、牛乳のやうに滋養成分に富んでは居ないから、成るべく牛乳かコンデンスミルクを與へるが良い、而して牛乳を入れる器具は、常に清潔なるものでなければならぬ、

殊に乳兒が直接に口に接する部分は、決して不潔物の付かないやうに注意せねばならぬので、かの乳兒に最も恐るべき吐瀉病は、主として此器の不潔および取扱方の悪いのに因るものである、



生後十ケ月を經たならば、カステイラのやうな軟らかで、多少滋養分に富んで居る菓子の類を與へても可い、又半熟の鶏卵は、生後滿一ケ年を經ない小兒に與へてはならぬ、而して消化し易き犢の肉、鶏肉、脂肪の少ない牛肉等は、生後二ケ年を經てから與へるが宜い、又この年頃になれば、淡泊なる青物、馬鈴薯、果實等を與へ、且つ追々に成分の強い食物に慣れさするが良い、けれども消化し難い食物や、香料を加へた食品又は酒の類

等は、少しなりとも與へてはならぬ、すべて砂糖分に富んで居る食物は、小兒には害こそあれ、効は無いのであるから與へぬが宜い、

第二には乳汁を與へる時間であるが、どうも我國ではまだ此時間と云ふことに重きを置かないのであるが、すべて此時間と云ふは大切にしたいものである、而して此乳汁を與ふる時間を一定すると云ふことは、その子の健康上および生長後の習慣上に必要であるにも拘はらず、世の多くの母を見るに、愛兒が叫ぶのを聞くと、直ちに乳汁を與へてその啼を止めやうとする傾きがある、けれども之は善くない、一日に乳汁を與ふる時間を必ず正確に定めておいてその時間外には決して與へぬやうにしなければならぬのである、

第三に乳兒の號叫は、大人の談話とさしたる違ひは無いので、乳兒は此の號叫によりて飢渴を知らせ或は苦痛を訴へ、或は不快等を報ずるのである、故に母たるものは克く種々の點に注意して、若し其號叫が飢渴の爲であると云ふことを知つたならば、常よりも稍多量の乳汁を與へ、或は苦痛の爲であると云ふことを感じたならば、その原因を探りて苦痛を去ることに努め、或は不快を訴へるのであると云ふ事を覺つたならば、若しや小虫等の皮膚に觸れたのではあるまいか、又は被服の溫濕および壓迫等があるのではないかと云ふ風に檢べて夫々の所置を取るが良い、大抵の場合では、乳兒の號叫は健全なることを示すものである、

第四は乳兒の睡眠であるが、一體乳兒は多く睡眠を要するものであるから、その眠つて居る間は、成るべく靜肅にして目を醒さぬやうにしなければならぬ、然るに多くの母は、乳を呑ませながら小兒を寢せ付けるものがある、之は大いなる不心得で、夫が爲に小兒の胃を害するは勿論、時としては母の乳房のために窒息せしむることは往々新聞紙上にて見受ける事である、深く注意せねばならぬ、若し小兒が寢つかない時は、母の手にて輕く小兒の臀部を擦つ

てやりさへすれば、大抵は眠るものである、而して小兒の臥床は、常に清潔にして、輕くして乾きたる物を用ゐ、枕は柔かなもので高くない方が良い、

第五、乳兒の發育を良くしやうと思はゞ、第一に身體を清潔にすることを怠つてはならぬ、乳兒の身體は常に排便によりて汚さるゝものなれば、屢々澡浴させてよく洗つてやるが良い、又最も多く汚るゝ部には、浴後少しく水揚酸を加へた澱粉を塗つて置くが良い、而して澡浴せしむる時は、成るべく四方を密閉したる明るき浴室に於てするが良い、之は乳兒の皮膚は極めて薄弱で、外氣の刺戟に感じ易いものであるからである、若し風雨の甚しき時などには澡浴を廢して、温水に浸したる西洋手拭をよく絞り、之にて不潔部を拭ひ、後に濕氣の殘らぬやうに乾きたる手拭で拭かなければならぬ、ソコデ澡浴に用うる湯は、熱からず冷たからず、攝氏三十四度位の温湯を用うるが良い、而して浴し了らば、暖かく衣服を纒ひて靜かに寢せるが可い、

第六、乳兒の衣服は、軟かで輕く、且つよく空氣を通し温を保つ毛織物にて作りたる物が最も良い、されど不潔になり易く、又高價なれば、木綿にて作りたる物でも可い、不潔物がつき又は濕りたる時は直ちに他の乾きたる物と更へる事を忘れてはならぬ帶や紐を堅く締めたり、又は幾枚も衣服を重ねて胸や腹を壓迫してはならぬ、頭巾、襟巻等は戸外に出る時の外は用ゐないが良い、

第七、天氣が晴朗であつて、風が烈しくない時は成るべく乳兒を抱き、或は乳母車に載せて戸外に連れ出でゝ新鮮なる空氣を呼吸せしむるやうにせねば可かぬ、太陽と清淨なる空氣とは、乳兒のためには此上なき親友である、併し濕氣の多い朝晩には、長く戸外に出してはならぬ、又世間では脊に負ふの習慣が今も尙ほ廣く行はるゝが、之は甚だ宜しくないから、何うか之は廢したいものである、

第八、生後幾もなく、時として乳兒は恐るべき眼病に罹り、それが爲に終生不具の身となることがあ

る、故に母たる人は時に注意して時機を謬らずして專門の醫士に診察して貰うて適當なる治療を受けるやうにせなければならぬ、若しも時機と治療とを謬らなければ大抵は癒るものである、而して其眼病の徴候は、外眦に粘汁が付いたり、又は眼瞼が閉止するなどに由つて知ることが出來る、是の故に母たる者は常に乳兒が眠より覺めたる時は、淸淨なる布片を微温湯に浸して克く眼を拭いてやるやうに注意せねばならぬのである、

第九、生後半年を過ぐれば、早晩齒牙の發生を見るものである、この時期になると、乳兒の顎の緣は著しく膨れて高くなり、且つ唾液の分泌は著しく增して來る、のみならず乳兒は屢々已れの手を口中に挿し入れなどする、又寢ても安眠もしなければ、或は爲に屢々叫び、時としては熱を發する等のことがある、その外此時期には痙攣、咳嗽、皮膚發疹、高い熱などの諸徴候のあるものなれば、決して油斷せずに小兒科の醫士に診てもらふが可い、これまで兒

を多く持つた人達は、是等を悉く齒牙の發生する時に於ける通例の出來事として輕く看過して居る、それが爲に愛兒を死に陷らしむることがある、之は如何にも慈悲のない事と云はねばならぬ、

第十、生後一年を經たる、所謂誕生すぎの乳兒は喃々と語り初むるものである、尤も各自多少の遲速があるものである、さるを世間には、吾兒が隣りの同齡の小兒に比して、言葉の出しやうが少し遲いとて、之を苦にして或は不具ではあるまいかと心配の餘り、神佛に祈念し或は加持祈禱に耽り、甚しきは舌が短いのではあるまいかなどゝ空想を懷いて、舌の繫帶を切斷したら宜からうなどゝ無謀を企つる者がある、けれども此舌の繫帶と云ふものは、小兒が談話に慣るゝに從つて延長して、いつとなく自然に舌を自由自在に運動せしむるものなれば、決して繫帶の切斷などゝ云ふ恐ろしい事を考へるには及ばない、安心して發音するの日を待つが良い、

第十一、小兒が發言する時期に達すれば、小兒は

起ち又は歩まうとするものなれば、危險のないやうに注意せねばならぬ、ソコデ此小兒の起立歩行にも遲速がある、彼の佝僂病に罹る小兒の如きは、骨が柔らかいために、歩行を初むることが遲い、此の病氣は英國に多いので、一名イギリス病と云ふ位で彼國には多いのであるが、幸に我國には少ないが、萬一此病に罹れる小兒のあるときは、決して無理に起立を促がしたり、又は歩行を強いないが可い、何せなれば、それは骨が軟かいから體重のために屈曲するの虞れがある、

支那料理

女子商業學校學監　嘉悅孝子

鶯頭肉（イントーロー）

肉を三分位の厚さに大切にし、表面に布目を烏賊に布目を入れるやうに庖丁し、四角に切り、葱、椎茸は例の如く切り、生姜は微塵に切り、うき粉に醬油柄杓一杯（肉三百目）の割で、初に肉を油でいためておいて、葱、椎茸、生姜を入れ、スープ少々でうき粉を溶いて、醬油と共に入れて煮上げる、

會排骨（ホイパイクー）

豚の三枚の骨つきとて買ふ、これを骨ごとぶつぶつに切り、十五分程茹で、すくひ上け、（煮た汁は、上に浮きたるきたなき物のみをとり去り仕舞おく）すくひ上げたる肉は、小柄杓一杯の醬油（肉四百目）に暫時浸しおきて後、ざつと油であげる、後油少々とき、葱を小く切りて、之にていびり、そこに肉は醬油ごと入れ、暫らくヂリ〳〵いため、汁（うき粉少々を、先に仕舞おきたる煮汁でときたるもの）を入れ煮上げる、

炒裡脊片（ツアオリーチーペン）

肉を薄くそぎ、葱も同じくいつもの通りに切り、生姜を微塵に切り、推茸及豌豆若くは筍等を、同じやうに切り、少許の油にて肉をよくいり、煮え通りたる頃醬油を七勺位入れ、外の品（生姜、推茸、豌豆

等）を入れて煮る、後スープを加へ、うき粉の溶きたるをも少許加へて煮上げる、

黄悶鶏

鳥を骨ごと切り、湯にて茹で（汁をすてずに二十分ばかり）二羽の鳥に小柄杓二杯位の醤油を加へ、葱及び微塵生姜を加へて煮る、汁の半分になりたる頃、うき粉少々入れる、

蓉許肉

肉を二百目位薄くそぎて、小口より繊に切り、葱は開きて小口よりザク／＼切り、生姜は微塵に切り、肉には醤油を五勺位加へ、葱生姜を一しよに入れ、玉子六個ほどこわし、鹽少し加へ、よくかきませ、前の肉等を一しよに入れ、又よくかき交せ、鍋に油の少しときたる所に入れて煮上げる、

炸鶏丸子

鳥肉をよくたゝき、生姜の微塵に切りたるを入れ、玉子の白味二つ位入れ、うき粉及鹽少しばかり加へて、丸くしてあげる、

家政の帳簿

大阪信託株式會社會計課簿記係長　永田隆一

◉上流の家庭へ行つて見ると、半紙を四折にして二十枚か三十枚位を綴ぢ合せて、その表紙に小使帳とか或は覺帳とか、面白い書方をしてあるのが多いやうである、又家庭にも色々御主人の御考が違うて居る、けれども大阪の市内では、商家の家庭と俸給で衣食せらるゝ家庭と二つ位に別れて居る、ソコデ商家の家庭は月給取りの家庭とは少し何かに付けつて複雜して居るやうに思はれる、と云ふは主人公の外に番頭とか手代又は丁稚のやうな人々を使うて居る、その賄から其等の衣類まで始末して遣らねばならぬからである、そして丁稚番頭の衣類等を始末するには是非とも下婢を雇入れて置かねばならぬのである、假りに月給生活をして居る家に一人の下婢で濟むものなれば、商家の方では三人乃至四人も居らねばならぬ割合である、さうなつて來ると隨分仕拂

の費用も澤山になる、主人公から前受けをして置く仕拂の元資も其れ相應の多額に上るのである、その時には何うしても家庭用の帳面が明瞭に爲つて居らねばならぬ、これまで記し來つた小使帳とか覺帳のやうな不完全のものでは、中々用が辨じないのみならず手間が要る、又つまらぬ口上を永く書き立た所で、主人公がそれを調べるにしても、到底一目瞭然とは行かぬのである、例へば、下婢が今給金の前借りを願ふに依り、之を貸し與へたとせんに、その時若し奥様方が、前貸といふ意味を記さずして當り前の給金とでも書て居る場合には如何なるでせうか、下婢の方では惡意を以て、先借りの給金より外に二重にその翌月分を請求した場合には、前貸給金といふ事を殊更よく分るやうに記して置く必要がある、兎角皆様は、小使帳に仕拂ふた金も、主人に立替た金でも、又は下婢に前貸した時でも同じやうに仕拂の順に書いてあるから完全でないのである、たゞその時出した切りで、後日に至つて故障も悶着も起らねば其れで宜しい、けれども一旦拂出した金が、後日戻つて來るとか又は前に主人の爲に立替へた金が入金になつたとか、或は前拂の給金を月末又は年末に差引きをせねばならぬやうな事が度々あるであらう、それであるから家政の帳面は何うしても明細に記して置かねばならぬのである、

◉然らば如何いふ風の書き方をしたら宜いかと云ふと、まづ適當の帳面を二つか三つ位は是非備へてある方が宜しい、少し話は變るが簿記學校などへ行くと、家政簿記といふ一つの學科目が定められてある、簿記として研究すれば、技術であるから中々込入つた原理や法理がある、けれども家庭としての實用帳面は極々單純なもので宜しい、高等女學校でも家政といふ一科がある、その中の內譯學科として家政簿記の課程を受けねば爲らぬ事になつて居る、私は家政簿記の囑託敎師を勤めて居た當時にも、皆様が研究なさるに一の學科として修めるには餘程苦しんで居られたやうです、併し其は學科として修業するの

であるから、實地に使用するのとは餘程趣が違つて居るのである、家庭用としての帳面は決して學理では御話する譯には參りません、けれども舊來の不完全なる小使帳とか、覺帳とかを全廢して、そして左の如き帳簿を設けて置けば充分である、

（一）經費内譯帳　一冊　この帳面の書き方は至極單純なもので、帳面の拵らへ方は、十行罫紙の半紙を三十枚ばかりに表紙を付けて、表紙の上へ經費内譯帳と太字に書いて、中の罫紙に左の如き横線を施して置くのである

―年月日―摘要―支拂先―金額―累計―備考

右の通りに横線を施して、記入の方法は先づその家庭に要する費用の種類を九つ位に分類して置くのである、併し其費用の分類は家々で一定しては居りませんから、只今指定する譯には行かぬ、けれども大概左の勘定種目を區別したら宜いのである、

食料費、薪炭油費、被服費、交際費、器具費、敎育費、借家料（借家なれば）諸雜費、臨時費、

實際に仕拂ふ所の費用は、右の科目よりも外に澤山あるであらうが、若し外に有るとすれば諸雜費といふ中へ含ましても差支は無いのである、又止むを得ぬ場合には新たに費目を起しても宜いのである、

而してその記入の順序を說明すれば、已に前にも述べたる通り、十行の半罫紙に横線が引てある、その各費目毎に口座を取るのです、そして其口座と口座との間は豫め定める事は出來ないが、澤山仕拂のある費用は如何しても口座の紙數が多く要る譯ですから、澤山要る分の座さへ其だけ必要のページ數を見計うて空白をわけて置かねばならぬのである、而して其次に、

◎食料費　とは日常に必要なる米穀、野菜、魚肉、牛肉、味噌、醬油、鹽、漬物等の費用を云ふなり、

◎薪炭油費　とは讀んで字の通りです、而し場合に依りては便宜上薪炭油以外のものでも此中に入れて置かねばならぬ事もあるのです、

◎被服費　は衣類の外に下駄とか靴とか、婦人の方

なれば頭の飾り道具も皆この中に入れて置きます、

◎交際費 は一般の交際に要する費用を云ふ、

◎器具費 は諸道具を買入れたる場合に用うる費目なり、例へば、下駄箱とか、鏡臺とか或は炊事用の諸道具とか、總て道具類の仕拂費用を指すなり

◎借家料 は若し借家なれば、その家賃を仕拂ひたる場合に用うるなり、

◎教育費 は子息または令孃の學校行の費用、或は家庭に於ける教育費用を云ふなり、

◎諸雜費 とは前に述べある諸入費の外に、定めなき費用を拂うた場合には一切この種目の中に記き入



れてしまひます、つまり前の七つの費用分類の中に入れる事の出來ないものは、何でも彼でも記け込んでしまへば宜いのである、

◎臨時費 とは臨時に仕拂ひをなしたる場合に用うるのである、例へば、神社佛閣等の寄附をするとか、臨時に他人を招待して消えた費用とか、兎に角臨時の費用だと思ふ時には此中に付けて置くのです、

以上の勘定種目に依つて經費内譯帳へ口別をせねばならぬ、例へば、食料費なるものは食料費といふ口座へ付け込むのです、薪炭油費として仕拂うた場

合には新皮油費なる口座へ記け込むといふ風に、その仕拂うた金の性質に依つて各々適當の場所へ記入したら宜いのである、舊式の小使帳の如き不完全なものへ譯も分らぬ記方をして置くよりは、少しは最初面倒を感ずるかも知れませんが、一週間ばかりも記け慣れると舊式帳よりは遙かに明瞭になるのである、口座の取り方や記入の方法は下の記入例に倣うて記けて行けば宜いのである、

◎前に述べた所は、帳面の拵へ方と記入の順序であるが、而し夫だけでは尙だ始末が付かないのであれば、十日に一回とか一ヶ月に一回とか合計して置かねばならない、而し合計を出すには別に六ヶ敷い式も何も入りません、けれども何々の費用が何圓で何の費用が何圓何十錢といふ工合に、各費用の種類毎に〆高を出してから、猶ほ各々合計したものを更に集せてしまへば費用の總計が表はれるのである、而して其月中に主人公から受入れた金や、又臨時に他人から預つて置く金や、或は勝手元の方で反古の賣拂代とか屎尿の賣却金とか、入金となりし金を合計して、その中から前の費用總額を引去つて見れば、差引殘つた金額と手元に現在してある正金の高とが吻合はねばならぬのである、

此樣な話をすると、皆樣の中には妙な考が起るであらう、何故に此く手數の掛る事をするのかと疑はる丶かも知れんが、それは無理からぬ事です、依つて少しく其必要を話して見やう、今假りに一國に喩へて云へば、その國に於て年々仕拂ひをする費用は、皆仕拂ふべき金高の豫算と云ふものがあつて、何の費用は本年度内に何程要るであらうか、又それだけの費用は仕拂ひの道を立てねばならぬのである、その仕拂ひの途は如何なる方法であるかと云ふに、其仕拂ひの費用に對する歲入と云つて、謂ゆる收入となるべきものを作らねばならぬ譯です、而し一國の收入と云へば國民の各々方が身分に應ずるだけの負擔即ち稅金なるものを政府へ上納する事に爲つて居る、家庭は先づ之の小さいので殆んど其形が似て居

るのです、
一國から支拂ふべき費用は國民から集める、けれども一家庭では家族のものが互ひに支拂ひの元資を儲けて足るならば宜いが、中流以上の家では、月給取りの主人なれば主人公以外の家人は、終日家事に從うて居らねばならぬ、昔のたとへにも夫は外に働き婦は家事を務むと云ふが如く、婦人の方で所得する事は下等社會でなければ行へぬ事になる、さうすれば家事の費用は勿論、一家計の責任は悉く主人公にあるのですから、何事でも主人の意見に背かぬやうに圓滿なる家庭を作るのは婦人の方に責任がある譯です、主人が朝から晩まで精神を勞して月々の俸給を得た其金も餘程上手に使ふやうにせねばならぬのである、間々世上には例の多い事ですが、兎角婦人は經濟思想に乏しく、甚しきは虚飾心の爲に、入るを計らずして、支出の度を過すことがある、それには先づ收入を土臺にして、支出の豫算を立て、その豫算のくるはぬやうに注意するが大切であるその注意を促がすには何うしても完全なる家庭帳簿を備へ置くの必要があるのです、財産が澤山ある家では猶更必要なのである、月給生活の家庭では所得金の一部を割いて貯蓄とし、その殘額を以て費用を支出せねばならぬから、若し實際に於て貯蓄もせず、收入と支出が伴はぬやうな事になつては、收入に對する支出の超過は、言ふまでも無く借金になると云ふ事は誰でも解るのである、

それであるから生活するには身分に應じたやうにせねばならぬ、と云ふものは、元來金といふものは使うて取るのでは無い、收入して後に支出するのが當然であるから、經費の仕拂ふべき額は何でも彼でも收入する高を以て標準を立てねばならぬのである、仕拂ひする金を無鐵砲に使つて、取るべき金高より多くなつては、たとひ何程の財産が有る家でも、遂には經費が不足して財産の中から費用を出す事になるのである、左樣なつては爲らぬから、帳面を明らかに記して置くといふ事を私は主唱する譯です、

結局何程の所得があつて何程の費用を仕拂うて差引何程の金があるとか、又仕拂うた費用は重に如何いふ種類のものであるとか、その中で何の費用が一番多いかと云ふ事を、一目して解るやうにする計算の尺度となるものである、而して經費內譯帳の記入方を示すときは左の如くである、

經費內譯帳

食料費口座

月	日	摘要	仕拂先	金額		累計	
八	一五	本月分白米何斗代	冬野笠一	九	一四〇	九	一四〇
同	同	本月中牛肉及野菜類代金	秋風福造	六	二〇〇	一五	三四〇
同	三〇	醬油何升代	川尾流之助	二	一九〇	一七	五三〇
		八月分合計		一七	七三〇		
九	一九	漬物二貫目代	鈴木太郎	四	五〇〇	[illegible]	[illegible]
同	三〇	酒何升ビール何打代	芋野平八	七	三二〇	[illegible]	八四〇
同	一九	味噌竹代漬物の高	白井俊之助	三	一七〇	[illegible]	七二〇
		九月分合計		一四	九八〇		

（二）所得金明細帳　一冊　前の經費內譯帳の部に於て、經費の帳面には色々仕拂うた費用を明らかに記けて費用の細目を見るやうに爲つて居る、けれども所得金の明細帳には經費帳に記入するものとは全然反對のもの即ち自分の方へ收入すべき物ばかりを記けるのである、例へば、自分の所有して居る家屋を他人に貸して其家賃を領收したり、又は銀行から預け金の利子を受け取つたり、或は主人公の俸給を入金したり、又土地を所有して居るとか、公債證書を所持して居つて夫等に對して收入した場合とか、何でも彼でも皆此帳簿の中へ記き入れて置かねばならぬのである、而して經費內譯帳の記入法と同樣に矢張各々種類に依つて口座を設けたら宜いのであるが、その種類も色々の收入がありて家々で一定する事は出來ぬのである、けれども大躰左の如き科目があると思へば、大した相違は無いのである、

主人俸給、貸地料、貸家料、收入利子、公債利子、株式配當金、家庭雜收入、以上

◎主人俸給　とは主人公が、官署または銀行會社等

へ平素出勤するものなる時は、毎月その勤務先から得らるゝ月給を云ふのである、

◎貸地料　とは自己の所有にかゝる土地等に對して月々貸料を收入した場合に此科目に入れるのです、

◎貸家料　とは自己所有の家屋は云ふ迄もなく、倉庫または工場或は寄席等、すべて他人に貸付け之に對して受くべき貸料を入金した場合には皆此中に含ませて宜いのである、

◎收入利子　とは自分の方から他人に金子を貸付けた時の利子とか、又は銀行等へ預けてある金の利子を指すのである、

◎公債利子　とは我家の財産として持つて居る公債（公債とは政府から發行する借入金證書にして種類は中々澤山あります、而して其證書に對して年々政府から規定の利子が下る事になつて居る）に對して年々下げ渡さるべき利子金等を此口座中に記け込むべきものである、

◎株式配當金　と云ふのは其家の主人が某會社の重役になつて居るとか、又會社の株主であるとか云ふ時には、その會社が發行した株券を持つて居るから其株券に對しては每年一回とか二回位株主の配當金といふものを受け取る事があります、その時に此科目の中へ記け込むのです、

◎家庭雜收入　と云ふと隨分收入するものゝ種類が多いやうです、あたりまへは雜收入と云ふ口座は入らぬやうに思はるゝが、實際に於ては何うしても必要があるのである、其は前に述べし六種の分類の外に臨時に收入するものが無いとも限りません、一例を擧ぐれば、屎尿の賣拂ひとか反古の賣却代とか、右の六つの區別以外に雜收入のあつた場合には、悉く此中に包括して宜いのである、

右の勘定科目に依つて七つの口座を取ればよろしい、そして所得金明細帳の罫線の引き方は左の通りである、

年月日	摘要	金額	累計	備考

右の如くにして經費の帳面と同一の方法に基て十

行の半罫紙に横線を描きますれば、完全なる和洋折中の帳簿が出來ます、

以上述べたる順序に依つて、毎日記け落ちの無いやうに注意せねばなりません、

爾して毎月の末には締切りをする必要がある、けれども便宜上毎月合計をせずとも、二ケ月に一回とか三ケ月に一回とか合計して置けば宜いのである、左れば合計の式も前に述べたる經費の方の帳面と同じ事であれば、須らく前説を參照して記け誤らないやうにせねばならぬ、

女子と看病

松本かね子

誰しも願ふことではありませんか、いつ何時お互ひに生身を持つて居れば病氣に罹らないとは言ひ切れないのであります、乃でその病人のあつた時には輕いものは兎も角として、重いものになりましては是非とも看病をする人が入用なので、その看病をする者は男子が良いか、又は女子が善いかと云ふに、之は無論女子の方が良いと云ふことは、最早今日世間に異論がないやうに存じます、して見れば看病と云ふことは女子に最も適當なる職業であると思ふのであります、

申すまでもなく、女子と云ふ者は天性優美で、且つ温和の性質を具へて居りますから、若しも身體が衰弱して、心身ともに疲勞して居る患者には、男子のやうに荒々しい擧動で接したならば、病人の苦痛は如何ばかりでありませう、否、苦痛ばかりでは無いのでありまして、遂には其れが因となりて救はるべき命をも失ふに至るのであります、而し女子だと申しても、若しも病人に對する心得を知らなかつたならば、迚も其天性ばかりでは病人を治することは出來ないのは勿論のことで、男子の看病と少しも異はぬのであります、されば専門の學理に渉らないで看病人として普通一般に心得べき事を少しくお話し

致しませう、
看病人の最も重んずべきものは、信實、清潔、精密、節制、秩序、從順、温和の七つであります、
看病人は最も重き任務を負ふものなれば、患者の治癒すると否とは、すべて自己の責任と心得て他人の手を煩はさぬやうにせねばなりません、若しも藥餌や其他の手當等をする者が幾人もあると、兎角間違の生じ易いものであります、
看病人たる者は、温和優美であつて、正直を旨として苟くも輕率の擧動があつてはなりません、而して身體や衣服を清潔にして垢の附かぬやうに注意を



要します、必ず毎朝石鹼で身體を拭ひ、夜はグリスリンを兩手へ塗つて、よく手先を軟かにするやうに努むるが可い、
看病人は凡て身體に飾りの無いのが良い、彼の指輪や襟飾りなどは最も惡い、頭髮は亂れないやう、ヘヤピンは拔けないやう、又は病人の側で櫛を遣つたり、或は爪などを剪取つたりしては宜くないから注意を要します、
たとひ患者は如何なる無理を云つても、決して其心に逆らはないで、愼んで看病せねばならぬ、と云ふは、それは皆病の爲なれば心に留めぬが可い、固

より看病人の義務と云ふものは、唯その病氣を全快せしむるに在るのであるから、如何なる困難をも忍びて、その目的の達するのを以て滿足しなければならぬのであります、

看病人の嚴守すべきは醫師の命令であつて、藥用時間や其他種々の手當等は違はぬやうに時間を守つて、他人が如何なる事を云つても、決して其に迷つてはなりません、

若しも藥用時間に病人が安眠して居た時は、如何にして可いかと云ふ事は、前以て醫師に問ふことが必要であります、普通の病氣には服藥よりも安眠させることが必要でありますが、若し衰弱した患者に用うる興奮劑や、又は間歇性の疾病に罹つて居る者に服せしむる所の鹽規の如きは、時を定めて用ゐるものなれば、たとひ安眠して居ても、之を起して用ゐなければなりません、

病人の容躰は時々刻々に變ずるものなれば、よく日誌に記載して醫師の參考に供するやうにせねばなりません、之は看病人たる者が醫師に對する務めであります、

病室に於ては、最も擧動を靜肅にして細事までも注意し、病人の目前で容躰を話すことは勿論、他の病人の噂などをしてはならぬのです、殊に重病患者や又は死亡した話は決してしてはならぬ、而してたとひ病人が重症であつて、最早死期が迫つても、心配さうな顔色をして病人に悟られるやうな事のないやうに愼しまなければなりませぬ、

人の生命の重んずべき事、又病苦を緩解すべき事は看病人の勤めなれども、生命は天の主宰せらるゝ所のものなれば、我々が如何しやうとしても仕方の無いのです、されば看病人は唯忠實に天職を盡しさへすれば何も遺憾は無いのであります、故にたとひ死期が近いたからとても、決して心配さうな面色をせず、何處までも自ら天使であるを確く信じて愛顔を以て之に接するを肝要とするのであります、

病人の死すべきことが最早定つて、如何しても本

人に知らすべき必要のある時は、必ず醫師の許可を得てから後、生は天に任すべき事、死も亦眞理の一であつて、必ず誰が身にも一度は來るものであると云ふことを諭して生前の慰安を與へるが良いのであります、

次は最も病人に必要なる事で、即ち病室の撰定幷に裝置、臥床の準備、病室の温度、病室の換氣法、清潔法、洗拭法および其方法、浴法の七つであります、

第一病室幷に裝置と云ふは、病室は成るべく日當りの良い、且つ空氣の流通のよい部屋を撰ばねばなりません、而して看護上最も大切なのは空氣と光線であります、併し直接に病人の顏に日光の射すのは宜しくありません、尤も腦病や眼病等の患者は暗室に入れる事がありますが、他に無いのです、

その裝置は、必ず病室には抽斗の附いたテーブルを置き、且つ病人に必要なる器物を備へて置かねばなりません、冬なればストーブ、夏なれば氷を布片に包みて鉢又は桶の類に入れ置き、醫師の許可した食物および果實等を其上に置て冷すが可い、又室内には小形の植木鉢一個か若くば花瓶位は備へて置くが良いのです、併し餘り多いのは善くありません、掛物又は額の類も懸けても可いが、度々取換へては病人の眼を疲らせて惡い、

第二、病症によりて枕の高低は一様でありませんが、重症患者は主に高いのが良い　臥床の上には軟らかなる蒲團を敷き、二枚目の蒲團は二つ或は三つ位に疊みて、脊の部から枕の方へ追々高くなるやうにすべきもので、又その上に柔らかき蒲團を敷き最も上を白き上敷にて覆ひ、枕の位置を見て適宜に直すがよい、若し肺病患者であつたならば、枕はその儘で、背の部に何か物を入れて高くし、胸部の開くやうに敷かねばなりません、若し又腎臟炎とか腹水病などで平臥の出來ない患者の時は半臥の位置にするが可いです、何れの方法を取るも病人をして安臥せしむるが目的であれば、その病症に從つて學ぶ

のが必要であります、
臥床を交換する時には、まづ交換する前に新らしき臥床を作り・その上に衣服をのべ、若し冬なれば温むるの要ありと知るべし、而して病人の衣服を脱がせ、上より毛布又は衣服を以て覆ひ、一人は頭部を、二人は病人の左右より靜かに支へて新臥床に移すべきであります、是は尤も安全なる方法であります、ソコで臥床を交換した時は、殘らず室外に出して日光に乾かさなければ可かぬです、決して室内で乾かすなどの無精をしてはならぬのであります、
重症者の臥床を交換するときは、身體を動かしますから、自然に疲勞を生ずるものでありますから、赤酒又は鹽里母等を與へるが良い、枕は朝夕交換して呼吸に差支へなきやうに注意しなければならぬ、のみならず、上敷も度々交へて汚れの附かぬやうにすべきものであります、
下痢のある病人の時は、上敷を二つに折りて、止下別に敷きて、尙ほ下の方にはゴム布又は油紙を敷き、その上に幾重にも疊みたる布を敷いて、その都度交換するが宜いのです、若しも怠りて不潔になす時は、病人は勿論看病人の爲にも良くないのであります、殊に瘴氣觸接 傳染病 のやうなものは、主に襁褓の取扱ひの惡い所から排泄等を洩らし、遂に夫が爲に傳播の危險を招くものでありますれば、よく〳〵意を注ぐことが肝要であります。すべて病人に對しては、事を爲すに手柔らかに爲すべき筈のものなれども、殊に衣服を交換したり、臥床の敷換へなどをするに方りては、最も手柔らかに靜かに、且つ速かに行つて、必ず病人の皮膚に、冷たき手や又は長い爪などを觸れてはなりません、それから病人の衣服を取換へて遣る時には、最も注意して、若しも窓や障子が開て居たならば之を閉ぢて、少したりとも外氣に觸れしめてはなりません、又冬日にありてはストーブに注意して其度を計り、感冒等の患ひのないやうになさねば可けません、

季節の料理

霞袖女史

松茸飯

常の如く飯を炊き、松茸をよく洗ひ、短册に切り酒と味淋と醤油とにて味をつけ、飯を飯櫃に移す時前の松茸をかきまぜにすべし、水一升の中に酒五勺醤油五勺程を入れて仕掛け、松茸を短册に切りて飯の煮えあがりたる時、投れて炊くもよし、

栗飯

栗は随分大きなるを選みて上皮を剝き、粗と火にて焼けばしぶ皮は容易く剝げるなり、夫より二つに割るか、さいに刻むかして、飯の半ば煮えたるとき上へ置て又火を焚くべし、餘り煮え過ぎたるは、栗悉く砕けて體あしきものなれば能く〳〵注意あるべきものとす、

切鮓いも

薄く切りて湯煮したるいもを、鮓桶に竹皮をしきならべ、常の鮓の如く飯に加料を交せあはせて、いもの上へ三四分位にならべ、幾重もいもと飯をしきて、竹皮にておさへ、壓をおきて鮓のやうに切りて鉢に盛るなり、

みどり鯛

是はかきもち鯛の如く鹽して、身をまた一枚にそぎ、竪に切り、取肴には一寸五分位に、臺引には二寸五分位に切り、端も見合に四角に切りて、ほそき串にさし、こげぬやうに火どりて、玉子の白味をぬりまた葛をあらめにしてふりかけ、こしきに葉をしきその上にならべてむし、ゆがまぬやうに直してぢよたんに入れ、はしやけたれば、實にひぐわしのみどりの如くなるなり、

鯛ちり

鯛の肉を能き程にきり、さいのめ豆腐と盛り合せて、別におろし生姜、焼海苔等を小皿に盛り、また橙酢柚子酢の中一品と、醤油を別々におき、小鍋にだし昆布をしき、湯をいれ、座敷にて火鉢にかけ、

鯛と豆腐と、火の透りたる頃掬ひ出し、酢醤油、やくみにて食するなり、

緋桃煎鮹

新潟鮹の随分よき品をえらみ、常の如くよく洗ひ七輪へ鍋をかけおき、この鍋へ鮹を入れて木杓子にて廻し、焼付かざるやうに暫らく廻せば水出る、その水を捨て、鮹大なれば酒一升入れて、半時ばかり煮て醤油二合ばかり入れ、ゆるき火にて一時間程にて、したじ煮干る前より木杓子にてよく廻し、煎りつくるなり、桃の花色に似たるによりて名づけられたるなり、

鰹の皮の蒲焼

鰹の皮のかばやきは、皮へ少しばかり身をつけ、たうがらし、醤油又は山椒醤油付焼にして用ふるなり、但し鯛、鮭、鱒の類は右の仕方にて宜し、何れも青串にさして用うるなり、

鰹の麴巻

松魚の麴巻は、松魚の新らしきを腸を去り、腹を割り背骨の肉まで刀を入れ、腹より口又皮へも薄鹽をふり、麴と鹽と等分に合せ、腹より口まで塡め、燈心草にて巻き、むしろに包み二三日經ちて、上を下に翻す、鹽よくなれたる時は、味よきものなり、

當座鮎

當座鮎の拵へやうは種々あれども、先づ鰯、青花魚こはだ等の魚類にて卵の花鮎などを拵らへるもよろしかるべし、偖この拵らへやうは、鰯は頭を取り腹を去り開きて、骨類および脊鰭も皮も剝ぎ、鹽水にて能く洗ひ、笊にあげ水を絶ちて又薄鹽をふり、又青花魚は頭を取り、腸及び脊鰭も取り、骨類を悉く去り開きて水にて洗ひ、薄鹽を總身にふりて笊に並べおきて、鹽のきゝたる時皮を剝ぐなり、又こはだは頭尾を去り、腸を取り三枚に卸し、水にて洗ひ薄鹽をふり、笊に並べおき、鹽のきゝたるとき竪に庖丁目を付け骨切りをし、而して右の三魚とも鹽酢にて洗ひ、笊に絞りあげ、別に酢と鹽と味淋の煮切と醤油等にて梅鹽調和して食するなり、



男女交際と食卓

文學博士　井上哲次郎

今日では大分西洋料理で宴會を開くことが多いのでありまして、餘程夫が善くなつて來た、善くなつて來たが、未だ〳〵日本で西洋料理を食べて宴會をする時には西洋のやうにいかぬことが澤山ある、夫は男女交際上大に注意しなければならぬことであると思ふ、西洋料理に依つて宴會を開く時に日本では斯う云ふ弊がある、夫を二三お話して見やう、西洋では習慣として食卓の禮法が出來て居る、日本ではちよつと分らぬが、長く西洋に居ると次第に明かに分つて來る、先づ第一に西洋料理の食卓に着くと、ソップ抔を歠るのに音をさせることはいけない、日本ではチユー〳〵云ふ音をさせる、丁度味噌汁を歠る考へで旨さうな音をさせる、アレは西洋では非常に無禮なことになつて居る、ソップ抔も出來るだけ音のしないやうに歠るのである、過つて少し音のしたのは仕方がない、夫から西洋では男女混合の宴會であると『プントライエ』と云つて、男と女と入れ混ぜて坐わらせることがある。夫が交際の道を助ける所以で、決して日本のやうに女は女、男は男と別の處には居ない、入り雜りである、貴婦人紳士が入り雜つてお互に話の出るやうになつて居る、それで宴會の席で愉快に話が出來る。それで『プントライエ』のやうな方法を用ゆるのも大變善い、夫から食卓に着いた時には、總て不潔なるやうなことは言はない、不浄不潔なることは一切避ける日本では餘りさうい

ふことを構はぬ、平氣でやつて居る、夫はいけない、不淨不潔なことは總て避くるが宜い、夫から食卓の時に大きい聲を出して話をする、他の人の話の出來ぬやうにする人がある、夫はいけない、一坐の話を壟斷すると云ふことは大變いかぬ、大きな聲を出して平氣で外の人には構はぬで傍若無人、自分さへ話が出來れば善いと云ふやうな工合にやつて居る人がある、夫はいかぬ、夫から又女子に對して話して善いことゝ話してならぬことがある、夫を區別しなければならぬ、例へば、女子の年齡を問ふことは、大變無禮である、中には若い顏をして居つて案外年取つて居る人がある、ちよいと二十位に見えて、三十近い人がある、夫故年齡を問ふことは、女子を苦しめるから宜く無い、年齡を問ふことは食卓に限らぬ、然るに食卓に着いて大勢居る前で平氣でやつて居る貴女は幾歳ですかなどゝ怪んで問ふのは、大變宜くない、夫から政治と宗敎の話は食卓では禁じてある、之は通常禁じてある、誰が禁じたと云ふことはない、夫で政治だの宗敎のことを言ふのは宜くない、無頓着に言出すと困ることになる、夫が爲に爭ひを引出す恐れがある、宗旨は殊に依ると違つた宗敎の人が居るか分らぬ、猶太敎の人が居るか、又佛敎の人が居るか分らぬ。だから滅多に宗敎のことを言出すと、同じ基督敎でも種々あるから、宗敎の爭ひをすることがある、政治に於ても種々黨派が分れて居るから爭ひの本になることを避くるやうになつて居る、夫から又斯う云ふことは日本では平氣であつても、向うでは大變無禮に感ずる、夫は熱い物を吹くことです、プーッと吹く「プッデング」などが出た時にどうも熱くして舌を燒きさうであるから、プーッと吹く、夫は無禮である、西洋ではそれが冷る迄待つて居る、話抔をして凡そ食られる時迄待て居るのが通例である、夫から日本で、食物を隣りの方に飛ばすやうなことがある、飛ッ汁を掛ける人がある、牛肉などを切る時に此方の食物が隣の食物の中に行く、さう云ふのは非常な無禮、自分は平氣で自分の食物だ

けに氣が向いて、一生懸命になつて居るから、隣りの食ひ滓などが飛で行く、夫はいけない、夫から臂を張ることはいかぬ、大變にいけない向ふでは成たけ臂をはらぬやうに用心する、隣の人に突當らぬやうに氣を付けて居る、夫から食卓の時には總て不吉不祥なことを言はぬやうにする、病氣を形容して或人は痔で斯う云ふ風になつて居るとか、或人は癰を病んで膿が出て居る、さう云ふ總て汚い面白くないやうなことは避ける、ところがさう云ふことを好んで話をする人がある、大變にいけない、さう云ふことをやる以上は男女の交際はナカ〱出來ぬ、夫から又食事をする時に默つて食ふことはいかぬ、矢鱈に食ふばかりでなく愉快に話をせんければならぬ、話をして笑はぬと矢張消化が惡いから默つて居ることは西洋では非常に無禮なんで、別段手を出して無禮なことをするのぢやないけれども、大勢の中へ這入つて、一の宴會の團體を作つて居り乍ら其中に一人默つて怒つた顏をして居るのは大變惡い、人に非常に不愉快なる感じを與へる、即ち無言の無禮と云ふことになる、決して支那の學者が教へたやうに食ふに語らずと云ふことには及ばぬ、隨分物を言うて善い、無闇に多辯であると云ふ



ことはいけないけれど、或程度迄愉快に話をすると云ふことは、非常に善いことで、面白く話をすれば、お互に消化が能く行はれて善い譯なんです、さうして又話をするのは善いが人が今食掛つて居る時に話をするのはいかぬ、今牛肉を口に入れやうと云ふ時にヒヨッと此方から話をする夫は大變いけない、食はれない、夫をちよつと用心して漸く食終つて又食ふ迄の少し暇を見て話をする、向ふが食ふ時には此方も食ふと云ふやうにしなければならぬ、夫から又食卓に着いた時は食掛けをして中頃でヒヨッと立て何處かに行くことは宜くない、怪しからぬことで、宴會の席ではチャンと食卓に着いたならば病氣でない以上は仕舞迄宴會を全うしなければならぬ、夫を何とも思はず中頃に立て行く人がある、非常に無禮である、さう云ふことが前から分つて居れば缺席して出ない、日本では何とも思はずにやる、夫から仕舞に果物が出て來る、林檎や何か持つて來る、お菓子だの何だの、夫を取るのに、上から取らなければならぬ、夫を撰取りして下の良いのをエグリ取て惡いのを殘して置くと云ふことは、他人に對して禮を失つたことで、況んや貴婦人と一緒に居る時にさう云ふことをやつては非常な無禮、自分の所へは大變良いのが來るけれども、貴婦人の所へは一番カスの蟲の附いた林檎が行く夫はいかぬ、夫から食卓の時に中座にして煙草を吸ふ人がある、卷煙草などを出して宴會の眞中で吸ひ居る非常に無禮なことで、貴婦人に對するのみでなく紳士に對しても無禮である、總てさう云ふやうな禮は向ふでは風俗上定つて居る別段委しく書いた物はないにしても、夫は誰も知て居る、自然に人が守つて居ることである、さう云ふ禮を守らぬ人は貴婦人の出る所へ出られぬやうになつて居る、貴婦人の側ではさう云ふ禮を守らぬ人は出られぬ、元よりさう云ふ禮を守らぬ人は貴婦人でもなければ紳士でもない、貴婦人と云はれ紳士と云はれる人は總てさう云ふ禮を守る人である、夫で今後は西洋風の宴會を開いて成るべく西洋の禮を用ゐ

て、男女交際の圓滿に行はれむことを期せなければならぬ、又立食などへ行て見る、立食は西洋の風であるけれども、日本では立食するとナカ〳〵烈しく突貫して行く、どうもアレはいかぬ、立派な宴會ではなくして少し蠻風を帶びて居る、假令ひ立食をやつても互に相讓つて食べれば立派な宴會であるけれども、日本では烈しい、ナカ〳〵危ないからして危ないと思ふ人は遠慮して後の方に竢つて居るから、後で行くとスッカリ食荒して仕舞つてある、少し遠慮する人は食べることが出來ない、さう云ふ實際の有樣である、夫からして又食卓演說なども初めからやつてはいかぬ、日本では宴會の初めから食卓演說をやる人がある、さうすると段々相續て食卓演說をやるものがあつて遂に祿々食べることが出來ない、夫程演說が澤山あるなら宴會の後でやつて、食卓演說は簡單に食事の終りにやるのが宜い、サラードの出る頃から簡單に面白くやるのが食卓演說の特色である、若しも長々食卓演說をやられると、折角美味い物が出て居るのに皆ジッと待て居らなければならぬ、夫はいけない、さう云ふ弊風をスッカリ除いて仕舞はねといけない、夫が宴會の風を善くする上に必要なることである、夫から宴會の外にモウ一つ日本國民が、之から注意して改良しなければならぬことは、此女子の爲に娛樂の具を段々增加して行くことで、樂みの道具を餘程多くしなければならぬ、段々出來ては來るけれども、今日の處ではまだ〳〵餘程缺乏して居る、例へば、西洋では音樂を耳にする所が彼方此方にある、高尙なる音樂を聞きに行つて樂んで來ることが出來る、貴婦人紳士ともに行けるのである、日本では明治音樂會の演奏でもある時に行く位である、夫から舞蹈と云ふものが西洋では非常に交際の道を助けて居る、大きな舞蹈會ばかりでなく、自分の宅でも舞蹈と云ふものが大變交際を助ける、歐羅巴の北の方であると、冬は寒いから晝は氷滑りのやうな事で運動をやる、夜は貴婦人紳士相集つて家の中で舞蹈をやつて自然に運動をする、

舞踏は非常に愉快でさうして身體の爲にもよい、ところが外交社會を除くの外は、舞踏會など丶云ふた所で日本では急には行かぬ、いかぬが段々は此社會に唱導されて、モウ少し舞踏の出來るやうにしたら宜からうと思ふが、唯家の構造など丶云ふものが西洋のやうに出來て居らないから、夫でどうも急には往かないけれども、女子の娯樂が一躰缺乏せぬやうにしないといかぬ、夫からまた遊戯遊歩など丶云ふも、今では大分出來るやうになつたが、これはます〱獎勵せねばならぬ、遊歩と云ふものは貴婦人紳士で以て、何人か集つて市外などへ出掛ることである、王子であるとか、大森であるとか、景色のよい所へ出掛ける、併ながら夫は親類の者か何か、餘程相互に信用するに足る丈の仲間でなくてはいかぬことは勿論である、

精神病者と家庭

醫學博士　呉　秀　三

男女に關はらず神經質のものであると認めたならば之が豫防法を講じなければならぬ、それは如何云ふ風にすれば宜いかと云ふに、第一に必要なことは子供の時分の注意が大切で小供が神經病質になる或は生れてからの關係から神經病質の者であらうと云ふことを曉つた時には、その敎育の上に氣を付けなければならぬ、それで若し女子であつたならば、其者に智育や躰育をやるに就て最も大切に酌量して行かねばならぬ第一に必要なることは、其子供の天賦の材能と其子供の有つて居る所の傾向それに從つて敎育せねばならぬ、であるからさう云ふ神經病質の子供に色々の學科を他の者と同時に注ぎ込んではいかぬ、同じやうに凡ての點に於て能く進歩させやうと計つてはいかぬ、

尤も神經質にも輕いもの又は强いものもありませ

うが、兎に角さう無暗に外の子供と同じやうに一概に教育することは困難である、それに就ては各個人如何なる所に長處があるかと云ふことを見て、それを教養させるやうにしなければならぬ、小供の感情を抑へることに付て注意せねばならぬのである、さう云ふやうな子供が自分の感情に慣れて色々の事を我儘にすると云ふ事を防ぐやうにしなければならぬさうかと云ふて餘り教育を嚴重にしてはならぬ、所謂寛嚴宜しきを得ると云ふやうにしなければならぬのである、若し餘り嚴しくすると、其爲に神經病質を高める事もあるし、又子供の性質を偏固になさしむるので、子供の天眞爛熳たる愉快の性質を失はしむるやうになるからいけない、さうかと云うて餘り我儘にしてもならぬ、又過失のある場合には、注意して能く癒させるやうにしなければならぬ、それに付ては家族の注意が肝要である、殊に母たる者の注意を要するのである、

私の常に考へるのには、神經病質の子供の出來るのは、その父母たるものは同じやうな性質があるからである、それは祖父母から傳はることもある、父母は子供と同じやうに神經病があるから、殊更に父母が注意して、子供が再び我と同樣に爲らないやうに注意しなければならぬと思ひます、子供の手本としても色々の害毒に浸みたり行儀を惡くしたりせぬやうにしなければならぬ、癇癪を起してはならぬ、嘘を吐いてはいかぬ、自分から善い例を出して惡い例を出さぬやうにしなければならぬ、神經病質のものは感情の爲に動き易いものである、正しい感情を學ばせやうと云ふやうに感情を抑へ能く例を示して行くと云ふことにしなければならぬ、それから子供の時には色々遊戯をすることもあるけれども、其遊は女子と男子とは違ひますから之に制裁を加へなければならぬ、實際は各個人を別々にしなければなるまい、遊戯は殊に男女で違ふであらうから、之には選擇してそれ〳〵の遊をさせる、女に男の遊をさせぬやうに、又男に女の神經質の子と交せて遊ばせぬや

うに注意しなければならぬ

一體女の子が大きくなるに從つて、操行上の感覺が色々の刺戟を受けますから、その刺戟を受けることを早く防がねばならぬ、それには男の子との交際を父母兄弟たる者が撰んでやらねばならぬ譯である殊に神經質の女の子供は、操行上に就ての注意を嚴重にせねばならぬ、

先づ讀物に就て言ひますれば、色々御伽話と云ふやうなものもありますが、あゝ云ふ類も注意して神經質の小供には讀ませないが良い、讀物の中には戀愛に關した事もあるが、あゝ云ふものを子供の中に早く讀ませるは良くない、戀愛小説は多くは男女の關係を主として書てあるから、縱ひ非常に善く書いてあるものにしても餘程考へなければならぬ、

それから子供で一體に神經質の者は榮譽心、虚榮心が盛んであるから、人の子に負けないやうに勉强しやうとか、譽められやうとか云ふ精神があるから左樣いふ事を考へなければならぬ、學問が出來る、

何か出來ると云ふことを以て誇ることの無いやうにしなければならぬ、父母が其弊に陷つてはならぬ、子供が學問が出來ないと親が叱る、出來ると譽めると云ふのは、父母は虚榮心を逞しうして、未だ先きが見えない分らぬものを捕へて、六つや七つの子に、能く出來る、進歩が早いのと云つて、虚榮心を滿足さして、其を增長させる事は大いに愼しまねばならぬ事と思ふ、

又それと同じことには家内に於て、神經質の子供に主位を占めさせると云ふことはいかぬ、それはどう云ふ譯かと云へば、子供の淸書が上手だと云ふてから、元日に祝ひをすると云つて子供を上席に据えとる、子供が字を書く事が上手だと云うて、色々の人を集めてワイ〳〵と言つて子供を煽てる、家の者が遠慮して譽めないでも外の者に賞めさせると云ふやうに、子供を首座に据えて其爲に何か集めて、舞臺が子供のために動いて居るやうなことを示すのは、神經病質の爲に良くないのである、

さういふ子供には成るべく忍耐させるやうにしなければならぬ、色々辛抱するやうに養成しなければならぬ、さういふやうな事の養成如何に依つて、女の子は後になつて些細な躓づきに依つて、自分の希望を抛つて、厭世的の觀念を起して自殺すると云ふやうな事もあるから、物の足りない事に慣れさせてそれに堪へさせると云ふことにしなければならぬ、さう云ふ子供の精神の惡く發達するのを防ぐに（厭世觀になつて自殺をしやうと云ふ詰らぬ感じを起すやうな者に最も助けになるのは）宗教的の教育、道德的教育に依つて、その子供に安心を與へて、其子供の抵抗力を増す譯になる、



それから子供が段々大きくなると、學校に於て種々の教育を授ける、中に於て形而上的の思想を注入することが最も多過ぎはせぬか、哲學上のやうな事を注ぎ込むやうな事は多うすぎはせぬか、此の如き學問の教修も必要ではあるが、教へ方によつては神經質の子供などは空想に傾くやうになりはせぬかと思ふ、是と關聯して注意すべきは民間出版の子供の讀物です、お伽話なども其類である、日本のお伽話は勸善懲惡に當箝つたものが多いけれども、外國のものになると只譯もないもので、

讀んで面白いと云ふものが多い、あゝ云ふ雜誌の讀物で神經質なる少年の精神修養を害することが餘程多くは無いかと思ふのである、それに就て種々のあゝ云ふ小說類のやうなものは廢して貰ひたい、兎に角さういふ風な敎育を廢して貰つて、成るだけ實物に就て敎へるやうな方針にして貰ひたいのである、我田引水のやうだが、格物致知の考を實地に敎へるやうなことにしなければ、厭世的の考を起して華嚴の瀧に陷ち込むとか、又は淺間の噴火口に投ずると云ふやうな傾向が、益婦人青年の間に起るやうになるだらうと思ふのである、

それと同時に社會の人は如何いふ方面に向つて硏究するのが良いかと云へば、矢張り中學生が買つて讀む本の內容如何は、敎育に關係がありますから、さう云ふ事を精撰しなければならぬと思ひます、又一部分に於ては新聞雜誌も青年者の精神に害になることがある、新聞が何も直接に害になると云ふのではないが、藤村操といふ者が華嚴の瀧に飛込んだと

云ふことは、昔なら分らないから左樣いふ病氣が傳染することも無いけれども、新聞と云ふ利器があつたから其事が直ぐ分つて、あの人の書置が名文だ旨いものだとか、非常な考を有つた青年だとか云ふことを以て譽めるものであるから、青年の心を攪亂してしまつて、後繼者が出來るやうになる、此の如きことは學校ばかりでは無い、社會で格物致知を重んじて空想に耽ることのさのみ大した事のやうに思はないやうにしなければならぬと思ひます、

新聞に關聯して思ひ起したが、通俗の衞生本も青年の精神に害があるのである、いろ〳〵通俗衞生に關した本がある、私なども書いて吳れと賴まれて書いたこともありますが、通俗の衞生的の思想を惹起させやうと云ふので、其の事柄は良いのである、けれども世の中の人が理解せずに大雜把の衞生思想を得て、それに依つて間違つた種々の處置をするやうな事がある、大いに衞生の普及の上に良からぬ結果を生ずる事がある又新聞に種々の事が書いてあつて

それが爲に神經病者神經病質の人の病症を惡くすると云ふことがある、どう云ふことが此病氣の徵候である、ヒステリーには痙攣があると云へば、直ちに手が顫へるから痙攣ではないか、顏が痲痺するからヒステリーでないか、さう云ふことを考へるとボーツトとする、それで一晩寢られぬといふやうな事があると、神經衰弱だと云ふやうに考へる、通俗衞生の本とか普通の新聞などに書いて居るやうなことは捷徑であるが、それが爲また混同することもある是の故に神經病質を起し易いから夫を避けさせるやうにしなければならぬ、新聞はさう云ふことを書くなと云ふことは出來ないが、それが爲に大變な惡い影響を爲すことがある、之は各自に注意するより外は無いのである、

それから職業を撰ぶに就ても、神經病質の人は成るべく斯う云ふ種類の職業を撰ばなければならぬと云ふことがある、重に精神を酷く勞しないで身體を勞する方の職業を執る方がよい、又家の内に坐つて種々のことをするよりは、外に出てやるやうにした方が宜い、職業にも神經病者に特に勸める所のものがある、殊に職業の中で睡眠を妨碍するやうな職業は神經病質の人には宜くない、例へば、某所の職工女、あゝ云ふやうなことは、身體を使つたり精神を勞したり、或は夜業をしたりすると云ふやうなことがある、あゝいふやうな業務は神經病質のものに適せぬのみならず、却つて病勢を助長するのであるから避くべきである

孤島の婦人

西田省軒

等しく明治の御代に遇うて、皇恩の德澤に霑へる同胞の中でも、都大路に生れ出でたるが不幸か、又は水や空なる八重の汐路はるけき孤島に棲みて、世の有や無やに羈されぬが幸か、その判斷は兎も角と

して、我日本も狹いやうでなか〳〵廣い、西は九州の、一市鹿兒島から、海上約三百哩を隔りたる所に孤島がある。即ちその名は喜界島と云ふので、往昔鎭西八郎爲朝が大島から此島へ渡つて來て、暫らく逗留して居る中に、妻を娶り、子を上げたと云ふことが物の本にある、その島である、されば今も尚ほ此島に爲朝を祀つた神社がある。この來歷ある島であるから、聊か之を紹介するのも興味があらうと思ふのである。

そこで先づこの島の女子の容貌は如何と云ふに、暖國には不思議なほど肌の色が白い、そして總體に美人が多い方で、髮の毛は漆のやうに黑々として、毛も濃く殊に眉などは描ける如くである、頰はポッと櫻色で、唇は薄くて赤い、手足は雪のやうで、孰れも軀格は健全の方である。

此く標緻は好いが湯といふものには、漸く一年に四度か乃至五度ぐらゐしか入らないので、その湯と云つても、自宅で芋の燒酒を製造する時、それに使

つた湯で全身を洗ふ、固より石鹼などは用ゐない、たゞ手拭で擦るのみである、尤も時としては木の葉で擦ることもある、その他は一月に一度か二月に一度位水浴をする、それも冬期は餘りやらないのである、而して夏期の暑い時になれば、屢々河へ入つて涼を取る、こんな工合で、云はゞ不潔にして居るのであるけれども、內地人よりは比較的に美人の多いのは、實に不思議の現象と云はねばならぬ。

次に性質は溫良で、柔順で、殊に淚もろくて、男子に對して最も親切である、以上の特性を具へて居る此女子にして此病ありで、タッタ一つの瑕がある最も之は此島の女子にのみ限ると云ふのでは無い、女子の通有性とも云ふべき嫉妬の念であるが、比較的この島の女子は、それが烈しいのである、併し之は絕海の孤島で、他との交通が餘り繁くない爲ではあるまいか。

此島の女子は、野蠻的の風俗であるが、さうかと云つて臺灣や南洋諸島のやうに、裸體で居ると云ふ

のではない、が、衣服は悉く稍廣い筒袖であつて、帶は內地の女子のやうに、巾の廣いものはしめない常に細帶一つで前に結ぶだけである、而して何か儀式とか、又は祭日とかでなければ、決して襦袢と云ふものを着ることがない、夏でも冬でも通して素肌である、足には固より履物を穿くと云ふことはなくして、冠婚葬祭の時に限つて、藺緖または棕櫚緖の鼻緖をすげた草履を用ふることに爲つて居る。

頭髮は、內地でいふスキ髮のやうに束ねて、割合に大きな簪を竪に挿して居る、之は階級に因つて異ふので、上流のものは銀を用ふる、けれども下流のものは洋銀か、又は眞鍮のものを挿すのである、而してこの頭髮は前の湯に入らないのとは反比例で、每朝食後に自分で束ねるので、それも鏡など丶云ふものは決して見ない、若しもたま〳〵鏡を持つて居るものが、之を据えて化粧でもする所を見ると、何れも大笑ひをするのである。



已に鏡さえ見ぬ位であるから、無論紅や白粉と云ふやうな化粧品は皆無である、之に就て一つの諺話がある、それは此島から內地へ遊學に來た書生が、或時歸省して、內地の婦人は紅や白粉を用ゐて化粧をすると云ふことを話したら、一人は噓

だと云つて肯かない、他の一人は驚いたと云ふこととである、併し此島の女子でも、流石は頭髮には種油を用ゐるとのことである。

女子の仕事は如何なるものかと云ふに、一體この土地の女子の働くことは、迚も內地人の豫想し得ぬ程で、彼等の仕事にも種々あるが、まづ大別すれば農業と機織との二つに外ならぬのである。

此島の農業と云ふのは、思へば誠に果敢ないもので、米田と云ふものは極めて少なく、畑には葱、大根、蕪、豆類、麥、粟等の類を作るが、分けて此島の重なる作物と云つたならば甘藷と甘蔗である、この中甘藷は何處の畑でも作られぬと云ふ畑はない、と云ふものは、島民は三度の食事、すなはち內地人の米穀と同樣にして居るのである、甘蔗は一月より三四月頃までに苅取り、黑砂糖に製造して樽に詰めさうして鹿兒島へ積出すのである、斯ういふ譯であるから、他の作物は不出來であつても、この二つは到る處に繁茂するのである。

即ち女子は此の砂糖製造の業に從ふので、之が製造の期節になれば、朝は四時頃から起きて砂糖を苅る鎌を磨き、藁繩を携へ、馬を牽て甘蔗苅に出て行く者もあれば、或は製造小屋へ行く者もある、いつも彼等の習慣として、例の筒袖を着て、素足のまゝに地を蹈立て〳〵、冴えた聲で、哀れに懷かしい俗謠を高らかに唄ひつゝ出掛けるのである。

製造小屋の方では甘蔗の實をむしるのが、女子の役目となつて居るので、むしり終れば煎じるのであるが、それには大きな三ッ車があつて、この車の先を馬にひかせ、その車の兩方に坐つて、馬が廻るにつれて車が廻る、その間々に實を投げ込むので、この時もまた聲をそろへて、馬を勵ます種々なる謠を唄ふので、その調子は長く引いた、睡いやうな悲いやうなので、一種の詩趣を帶びて居る。

かやうに終日働いて、汁になつた砂糖を煎じ終ると大抵夜の十一時頃になる、それから甘蔗殼の松火を點してそれ〳〵我家をさして歸るのである、近來

は此の松火を附けることを其筋より禁じられたので油提燈を點けることになつたとの事である。

近來内地で非常に流行する大島紬は、此島から西方へ五十海里ほど離れた大島固有の名產であることは云ふまでもないが、此島でも中等以上の女子は、みな紬織りに從事するので、近年はその產出高もめつきり增加して、砂糖に次ぐ所の產物となつたのである。

紬の原料は眞綿で、成るべく薄く剝で、板の上に釘をうつたものへ、眞綿を引かけて、手で紬ぎ出すのであるが、これが紬の緯とも經ともなるもので、一反の原料には、眞綿百目を要するのである、それから紬いだ眞綿を糊固めにして、十の字なり、龜甲なり、好な飛白になるやうに勘定して、芭蕉の纖維で之を括り、それから染め上るのである。

その染め方は、初めは泥土で染めて、次には内地には無いが、テイキと稱する一種の赤い皮のある樹木の皮を大鍋にて煎じて、之で染めあげるのであるが、かくする事が何百回繰返さるゝか知れぬのである、何と貴重のものではあるまいか。

機織の器械は舊式の地機で、十中の八九までは之に慣れて居るとて使用するが、中には地機では織上りたる上に於て、品位を損すると且つ長日月を要すると云ふので、高機を用うるのもあるが、それは至つて少數である。

女子が此機を織る間は、奥深く立て籠つて居て、少しも他人に見せぬやうにする、若し來客があつても、之が款待は亭主たるものがして、妻は只今不在でありますと云ふ有樣である。

一たび機が織り上ると評判が大變で、何處の誰は十の字の百節を織つたとか、龜甲の七十五節を織つたとか、染め上りが良いとか惡いとか、幾何に賣るとか、實にその評判は非常なものである。

故にこの紬の織上りの出來の善惡は、直ちに女子の名譽に關するので、それが結婚の條件にもなるのである。

女子の仕事はそれ位として、女子と男子との關係を述べて見やう、此島は思ひもよらぬ男尊女卑の習俗があつて、實に此島の女子ほど世に氣の毒なものは無からうと思ふのである、それは上中下を通じて男子は樂の多い方で、勞働をせぬと云ふでは無いがつまり厭な勞働は女子にのみさせると云ふ風が行はれて居るのである、故に女子は恰も奴隸のやうなもので、神を禮拜しても汚れると云うて、此島の女子が神社へ參詣することは見ることが出來ぬ、この一つを見ても、他は推して知るべきである。

例へば、男子は朝起きると秣を苅りに行き、程なく皈つて來て、繩なひをするか、又は庭の掃除をするか、馬の道具を扱ふか、それ〳〵時候に應じてするので、左程苦しい勞働はない、之に反して女子は中々辛い、東が白むか白まぬかに起き上つて、秣も苅りに出掛けるが、皈つて來てから食事のこともする、それから前にも云へる如く野面稼ぎもする、若も子供のあるものなれば、脊に負ふか又は馬の脊に載せて出掛けるのである。

そして最早夕陽が西の水平線に沒する頃になれば彼等は哀れな調子で、清い冴えた細々とした、聞く者をして思はず膓を斷しむるやうな聲で、島語で長く感情的に唄ひながら家に皈るのである。

サテ家に皈つてからと云ふて、靜坐としては居られない、イヤ、さして置かぬので、それから晩食の仕度をするのである、その準備が出來て家族團欒して食事をなすのであるが、勿論膳と云ふ物もない、タヾ板敷の上に坐つて、その板敷の上へ茶碗や皿を置いて食するので、之が終つて僅かに肩を休める位である。

之に依つて見るときは、人と云ふものは、出來ないと云つて退嬰思案に屈托して居れば何事も出來ないものであるが、サテ一つ自から奮發して遣つて除けやうと思へば、隨分如何やうにも遣れるものである、即ち以上掲げ來りし孤島の女子の生活狀態を見ても知らるゝのである、然らば縱ひ孤島の女子程

でなくとも、精神の旺盛なることは彼女のやうにありたいものである、殊に今や我國は一等の班に列なつて、名譽ある月桂冠を戴いたのであるから、之れをして倍々光輝あらしむるは諸姉の任務ではあるまいか。

女子と生産

大崎又一郎

國家の盛衰と云ふものは、國民の勤惰如何に在るものである、言を換へて云へば、生産的の人民が多ければ其國は榮えるものであるが、之に反して不生産的すなはち何事もしないで坐食して居る者が澤山であれば次第に其國は衰ふる譯である。

然らば生産的の人民とは如何なる者を指すかと云ふに、即ち一つの職務を有つて居て、日々間斷なく働いて居るもので、その結果の大小は、早晩兎に角一つの事業をして進捗せしめつゝあるもので、上は國務大臣を初めとして、興業家、商業家等より、下は車夫走卒の徒に至るまでを云ふのである、之に反して、是ぞと云ふ定まれる職業もなくして坐食し、縱ひ自己の職務があつても、其を抛つて盡さないものは不生産的の人民と名づけねばならぬのである。

之に由つて見るときは、まだ獨立の生業を營むことの出來ない女兒や小童は、矢張り不生産的の人民と云はなければならぬ、けれども是は全く坐食の不生産的の人民と見做すことは出來ないので、此く見るのは見るもの丶見當違ひと云はねばならぬ、何せなれば、是等は他日我等國民の後繼者として、この國家を經營して行くもので、將來に向つて大責任を有して居るものである。

されば此の小さき國民は、最も良好なる方法によりて保育生育せしめねばならぬので、之をして將來國家に有爲の大國民となすも、或は無用の長物たらしむるも、その責任は現代の父たり母たる人々の双

肩にかゝつて居るのであれば、今は一時不生産的の狀態にあつたからとても、一面より見るときは隱然將來に向つて發展すべき大生産力を養成しつゝある者なれば、强ちに之を不生産的であると云つて斥けることが出來ないのみならず、寧ろ生産的として見るのが至當と思ふのである。

然らば彼の老人は如何と云ふに、是こそ全く不生産的坐食の民と云ふべきかも知れん、何故かと云ふに、老人は年を重ぬれば重ぬる程、ます／＼老憊して行くばかりで、再び起つて事を爲さうとする元氣を挽回すると云ふ望みは無いのであるから、まづ絶對的に不生産的の人民と云はねばならぬのである、されど年老者は、是より以前に於て大いに活動して國家の動力となつた者なれば、目下は老衰して事に堪へないからとしても、既にその義務を卒へたる國家の功勞者として優遇すべき筈のものである。

幼者や老者を不生産的であると云つて議すべき要のない事は前陳の如くである、されば唯不生産的の

人民として絶對的に極力排斥すべき者は何かと云ふに、即ち年齒はまだ壯んで、躰力と云ひ腦力と云ひ共によく生産の勞に堪へ得るものでありながら、日々爲す事もなく碌々として坐食して居るものがある是等の徒は所謂獅子身中の蟲で、國家の害毒にこそなれ、決して裨益になるもので無いから、容赦なく驅除してしまはなければならぬのである、と云ふて等しく臣民であつて見れば、まさか國外に放逐することも出來まいから、如何にもして其惰性を矯めて生産的の民と化することを講じなければならぬのである、けれども之は問題外である。

乃で取り分けて一人前の女子たるもの丶生産力とは如何なるものであるかと云ふに、女子が最も重んずべき第一の任務と云つたならば、その兒女を敎養して、將來この大帝國の維持者として、はた又經營者として、最も適良有用の材となすの一事である事は、誰しも首肯する所であらうと思ふ、是は實に女子たる者が最大至當の任務であつて、女子自らは直

接に生産と云ふ事を認めないが、つら〱眼を注ぐときは、實に他日大いに發顯すべき大生産力を間接に作りつゝあるものである、して見れば誰か又女子を不生産的坐食の民と云ふものがあらうや。

元來女子には女子天賦の任務がある、而して兒女の教養は至く母その人のみに依つて成るものでは無い、父たるものも亦其半ばを負うて居るのである、さうして見れで、女子の生産的事業は尙ほ兒女の保育以外に之を求め、且つ之に就くの必要は無いのであらうか、兎に角一考を要すべき問題である。



それ男子は外に在りて職を執るものであれば、之が妻女たるものは家に止まりて專ら家政を整理し、未だ何事をも辨へざる兒女の保育と監督の任に當らなければならぬのであるから、また何の閑があつて生産の事に從ふことが出來やうや、まして朝は夙く起きて夜半に寢ね、その間には炊事、裁縫、洒掃、洗濯、應接等を掌るのであれば、中々他の事には手出しが出來ないのである、と云へば云ふもの〻、一たび眼を中流以下に注で見たならば何うであらうか彼等は乳兒を脊負うて勞働に從事して居るではないか、未だ曾て炊事や裁縫や洗濯が忙しいからと云つて生産的の勞力を惜まぬので

ある。

現時世上を通視する所に依れば、中流以上の家庭で、朝より暮に至るまでサウ家事にばかり追はれて居るものは無い、寧ろその多くは閑散に苦しんで居ると云つても過言ではあるまいと思ふ、何故なれば大抵中流以上の家庭には、少なくとも一人、多きは數人の婢僕を雇入れてある、この婢僕をして毎朝の炊事および洒掃等の事を委ねてあつて、尚ほ且つ其間に裁縫洗濯までも爲せるのである、尤も家族が多く、家事の繁き家庭では餘儀ないのであるが、否らざる家では寧ろ之を廢して妻女自らが之を作すが可いたとひ夫等の事を爲したからとて、尚ほ優に若干時の閑はある、まして自ら之を爲さゞる妻女は、より以上の閑時間があるのである。

然らばその多くの閑時間は果して如何に之を利用せらるゝかと云ふに、間々例外もあるが、多くは新聞雜誌小説等を耽讀して空費するに過ぎないのである、何と惜しい事ではあるまいか、世には此の金にも換へ難き時間を徒費して居る家庭が多數に存在して居る事は蔽ふべからざる事實である。

故に若し克く世の妻女たるものが、自己の地位、任務等を自覺して此若干時を利用したならば、只に一家庭の祝福であるのみでは無くして、廣き意味に於て國家の慶幸と云ふべきである。

右に就ては、果して如何なる事業が女子に適するやと云ふに、近時女子教育の勃興と共に、頻りに手藝のことなども奬勵せらるゝが、是等の撰擇に付ては各自の嗜好もあらう、また種々家庭上の都合等もあらうから、豫め之が宜いと杓子定規に極めると云ふことは出來ない、縦ひ定めたからとて前陳の次第であるから行なはるべき筈のものでも無い、左ればこれが撰定は各自の意嚮に任すとして、女子も亦男子と等しく國民の半面を領有して居る者なれば、努めて生産的の事に從はれんとを切望するのである、

○文藝

女子と美術思想

寺崎廣業

現代の婦人は、之を往時の德川時代の婦人に比すれば、服裝殊に衣服の模樣および色の配合等の點に於て劣つて居る、言ひ換ふれば美術思想が乏しいやうに自分は考へるのである。

尤も現代の婦人は、學校に於て美術等の敎育を受けて居るから、或點に於ては多少美術思想も發達して居ることは認めないでは無い、けれども之が趣味とも云ふべき點に至つては、徒らに流行を趁ふに過ぎないのである、その一例は、彼の元祿模樣が流行すると云へば、若いも年老もお構ひなく同一なる色彩や模樣を付けた物を用ひて得々として居る、實に服裝等の下手な事は言語に絶えて居る。

之と云ふも畢竟は美術思想に乏しいから、從つて之に對する趣味の程度が察せらるゝので、此點は大いに現代の婦人は往時の婦人に對比して顏色なしと云はなければならぬのである。

前にも云へる如く、現代の婦人は流行を趁ひ廻るのであるが、往時の婦人は之を作つたのである、と云ふのは、往時の婦人は、克く自己の顏面を初めとして、身長、肥瘠等から割出して、此の色彩は宜い此の模樣は似合はぬと云ふ風に、一々自己に照して撰擇し工夫し創作するのであるから、實に克く其人物に應當するのである、けれども現代の婦人は委細構はず流行を追ふのであるから、少しも其人物に似合はない。

是の故に現今の婦人の服装では吾人が描くに堪へぬのである、のみならず描いて見た所が眞の美術眼より見るときは繪畫には爲らないのである、それには尤も仕立方等も良くないのである。

實に往時の天平式または藤原式など、あの邊の物を見ると、實に綺麗で模樣も好し、そして種類も多くして目の覺るやうな心地がするのである、之に就て常に思ふことに、當時流行の海老茶袴を一層進歩させたら、嘸よく婦人に似合ふであらうと考へるのは、彼の天平および藤原時代の裳、尤もその時代の裳はたけが長いものであるが、何もその長いまゝに用ゐよと云ふのでは無い、丁度この裳といふものは當今の西洋の婦人の服装の下部のやうなもので襞もあり中々格恰の好いものであるから、之を折衷したら良からうと思ふ、尚ほ約めて云へば、吾人は天平式を折衷採用せんことを望むのである。

先年友人の梶田半古君が工夫せられた改良服は、天平式藤原式および朝鮮服等を取捨折衷して造られたもので、至極吾人も同感で結構なもので、如何かあれを流行させたいと思ふが、世間は之を歡迎しないのみか、之を決行する人が少ないのは遺憾である此頃モデルのために美術學校で天平式の服を作つて之を某婦人に着せしめて見たが、實に得も云はれぬ趣味がある、いや感じたのである。

是に由りて吾人は益々今日の海老茶袴を廢し、否改良して此の裳に則りて、色は白か何かにして裾模樣を附けると云ふやうになし、袖は小さくすると云ふ風にしたならば、どれ位現代の婦人に似付くか知れまいと思ふのである、尤も袴の長短や色彩又は模樣等は各自の好みに任すが可い。

兎に角今日のやうに、ソレ流行だと云つて自己と云ふものゝ研究をさておいて、突飛に廂髪に結つたり又は海老茶袴を穿くと云ふことは褒めた話では無いのみか、却つて醜いのである、けれども當人は少しも之を見惡いとも感ぜざるのみかよく、流行に副ふたるものとして得色が見えるのである、之が則ち

美術に趣味が薄い、否、寧ろ缺けて居ると云ふことを表白して居る、之が缺けて居るから、從つて之を作り出すなどゝ云ふ事は猶ほ更出來ないのである。

それに我國人の服裝は、男子も左樣であるが、殊に婦人の服裝は區々で、所謂千態萬狀なるに就ては彼の西洋人の眼から見たならばさぞかし奇異の感をなして居るだらうと思ふ、而しそれは孰れにしても、最早我國も維新の當時とは違



つて、諸事日本式と云ふべきものを一定しなければならない時代に到達して居るのであるから、如何か服裝等も一日も速く改め定めたいものである

次に我國の婦人は衣服の外に種々なる裝飾品を用うるが、之は何も用うるのが惡いと云ふのでは無い、今日尚ほ西洋人も支那人も印度人も皆用うるから、我國人も亦よろしく之を用うるが良い、殊に往昔天平時代

には我國では種々なるものを用ゐた事が知られて居る、尤も近頃は首から時計の鎖を下げるものなどを往々見受けるが、その服装の外に用うる装飾品も大いに撰擇を要することゝ思はるゝのである、それに髮の結ひ方も亂雜で、廂髮や夜會結び等は洋服を着けた時は良いが、和服の時には感心しない、矢張り和服の時には文金の高髷か何かゞ相應いのである。併し以上述べ來つた所の改善に付ては、婦人自らが之を工夫しなければならぬは勿論であるが　廣く世間の他の方面からも、之を唱へ之を考へて鼓舞して貰ひたいのである。

チヨイト婦人が着物を着けても、若しその色の配合や模樣の巧拙等に由りては、最早一見したばかりでも吾人は惡感を催すのである、少し例には不適當か知らんが、何も彼等の商賣に重きを置くのでは無いから差支へはあるまい、と云ふのは彼の藝妓である、流石に彼等は商賣柄とは云ひながら、衣服の色彩又は模樣等の見立は上手で、よく各自に其人物と服装とが調和して居る、尤も彼等は其ツクリが一の呼物である、而して我國今時の流行は、概ね此の如き下流の社會から起つて來るのであるが、之は實に不可思議の現象であると思ふ。

昔時の流行と云ふものは、重に中流以上の社會に創つて、それから漸次に下流社會へ及ぼしたもので此事は德川時代の或る小部分を調べても直ぐに分るのであるが、今は殆んど顚倒して上下各々位置を異にして居るとは實に不思議と云はねばならぬのである。

次に彼等商買人は、衣服の配色および模樣等の見立が上手ばかりでは無く、或一部を除くの外は、衣服の着コナシが巧みである、然るに彼等を除きて普通世間の素人と云ふ側の婦人を見るに、是また着飾が下手で、實に盛装しても格好が惡くて見るに忍びないのがある、所謂狼が衣を着たやうなのもあれば、貧乏人が借着をしたやうなのもあれば、甚だしきに至りては古諺の沐猴にして冠すと云つたやうな

のがある、それでは折角大金を掛けた甲斐が無い譯ではあるまいか。

右に就ては、少なくとも中流以上の婦人たるものは、率先して將來に向つて是等の事を研究して貰ひたいのである、一體我國の婦人は、盛裝するに付けても兎角質素を貴ぶの風習があるが、之は寧ろ打破すべきものであると思ふ、尤も吾人とても贅澤を鼓吹するものでは無いが、今日の如く只管に質素の一方に傾くと云ふ事は決して嘉すべき事とは云はれぬのであるから、すべて調和を標準として照應の良いやうに工夫せられたいのである。

白粉もつけるが好い、けれども青白い顔面等に白色の白粉をつけたとても、少しも冴えないのみでは無い、却つて吾人に一種厭忌な念を生ぜしむるに過ぎないのである、最早今日では白粉と云つても、單に白色のものばかりでは無くして、肉色の他のものが澤山にある、是等を用ゐて粉裝を施して自己の天眞美を發揮するやうに努むるが良い、縱ひ自ら爲さゞるまでも、その心得位はありたいものだ。

以上を概括すれば、現代の婦人は往時の者に比すれば美術思想が缺乏して居て、自ら創作するの識が無い、即ち往時の上流の婦人は自ら流行を作るに自己を本位となせしも、現時の婦人は徒らに流行を趁ふに止まるのであるが、之は詰る處美術思想が乏しいので、從つて之に對する趣味も薄いのであるから宜しく婦人は美術思想の養成が必要であると云ふのである。

向陵集を讀みて

佐々木信綱

歌は人の心を種として萬に咲きいづる花なれば、その詠める人と人となり、心ばへをあらはす事、たとへば濁れる井よりいづる水の濁り、すめる井より出づる水の清きが如くなるべきものから、よの事わざ、人の心のはたらきなど複雜になりもてゆくに

つれて、歌よむ事もまた一つのことなりたる業となり、殊更に學び習ふすべさへ出できぬれば、あるはその心ばへ優しくして強くをゝしき歌よみいで、あるは又くだれる世にありてひたすらに上つ世の事などうたふもありけり、これらみな技術としてはまことに進步の結果として喜ぶべく、觀照の上よりいふも、おのがじゝさる方に趣あるものなれど、その弊として歌のさま殊更めきて、彼の造り花の、生氣なきが如きにいたりたらむには、中々に厭はしかるべし、題詠といふ事專らになりてしよりこの方、ことにわが國の歌のおしなべての弊は、まことにこれにはあらじか、さるをその歌のいづれにも、作者の眞心あらはれ、作者の性情境遇などの相映りて、夕暮の水の夕日の光をおびて流れゆく如くなるを見るぞもとも感深かりける、況してや其歌人の性情、その閲歷、よのつねならぬきはなるをや、この向陵集の歌人、わが野村望東尼の如きは、誠にこの類にして、近世稀に見る所なりけり、

望東尼は筑前福岡の人、文化二年浦野氏の三女として生る、同藩の士野村氏に嫁ぎ、よく家を治め、先妻の子なりける三人をおほしたて、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ、夫妻ともにかねて勤王の志深かりければ、幕府の專橫甚しく、時勢の日に非なるを見るにつけても、たへがたく、ひそかに同志の士を語らひて、計る所などありき、後、平尾村のほとり、靜かなる境に世をさけしに、安政の四年といふに夫世をさりぬ、望東尼、時に五十四、薙髮して佛の道に入りぬ、されどなほ素志をかへず、交を志士に結びあるはその山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひぬ、平野國臣、僧月照、高杉晋作の如き、皆こゝに集ひぬ、後、ために捕はれて、浪風あらき絶海の孤島に囚へられしこと一年、幸に高杉晋作に救はれしも、老軀長くたふるを得ず、勤王の大業成るを見ずして、病の爲にむなしくなりぬ、女ながらも、皇國のおん爲大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵し、あるは同志

の間に入りて互に志を通せしめしなど、その心づかひなみ〳〵ならず、まことにその一家の良妻賢母なりしが如く、隱に維新大業の良妻にしてまた賢母の一人なりき、その一生の閲歷かくの如く、さながら一篇の詩なり、しかも忠誠もゆるが如き眞心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、すぐれたる技をもてこの間に織りなしたる歌文の錦いかで世の常なるべき、



向陵集一篇は、やがてこの色彩美しく、模樣さま〳〵なる錦なり、見よ、かしこに悲憤慷慨、句々皆血淚のほとばしるが如きあれば、こゝには、優麗閑雅、やさしさ鶯の初聲をきくが如きなり、しかもこの兩面を相向へて見て、初めて其すぐれたる人となりをも知り、その歌のまことの趣をも解しつべく、たけくを丶しきが中にも、さすがに弱き女心のあるあ

り、あはれに優なる中にもなよ竹のたわみながらに強さところあるを知りえつべし、かつや其歌の調の淸新なる、その觀察の奇警なる、又よみざまの巧妙にして手のきゝたる、その師大隈言道を思ひうかばしむるものあり、もとより生具の天才ならむも、又よく師を學びて堂奧に達せしものにあらざらむや以て其修養の淺からざりしを知りぬべし、これを近世の女歌人として世に知られたる太田垣蓮月と比べみるに、その歌のいづれも眞心より流れいでたる調にして、輕くうきたる風なきは相似たるべく、かつ其趣を異にせる所、やがてその性情と境遇との異なる所にして、彼は單純にして、たとへば淸き里川の水の、野末を靜かにますぐに流れゆくにも似、これは複雜にしてみ山のはざまを行く谷川の、時には岩にせかれてはげしき響をなし、時には木かげにたゆたひてさびしき音をたつるにも似たらむか、

向陵集一篇は、明らかに望東尼が女歌人として、また優に近世の第一流に位すべく、古來の歌人の中に於てたしかに一異彩を放つべきを證して餘あり、なほ其著には、上京日記、姫島日記などあり、いづれも歌文ともにあはれ深し、殊に姫島日記は、その姫島の牢獄にありしほどのにて、一讀人をしてまことにその節操をたゝふるの念と、その苦をあはれむの情とにたへざらしむ、歌も亦すぐれたるが多かり。

秋の空

東久世通禧

初雁

ひとりねの寢覺さびしく聞ゆなり
　夜さむをつぐるはつ雁のこゑ

朝秋風

あさ露のうちみだれつゝわが庭の
　小はぎが枝にあき風ぞふく

秋田風

千町田の稻葉をわたるあきかぜの
　はげしき音もきかぬとしかな

水上月

すみ田川みちくる汐にさすつきの
　たゝよふ影のさやかなるかな

月下薄

宵々につきてそやとれふるさとの
　ひとむらすゝきほに出しより

秋草

鈴木其星

秋草の花のいろ／＼閼伽桶に、さして經よむうばそくの君、
黒木うる小原乙女の今日もまた、おきて行きたり秋草の花、
朝庭の露にそぼちてわきもこの、切りぞわづらふ秋草の花、
月かげは小草のうれにうつろひて、露の花さく原まちの庭、
ひろき／＼庭をもたらば秋草を、心ゆくまでうゑてみましを、
あれや何これや何そと幼兒の、とひにくるしむ秋草のはな、
水引をとりてわがねてかざしたる、面色やさしきめのわらはかな、
巖かげにひとりさびしく咲く蘭を、來ては寫せる若き畫工、
ほころべるすがたもなくて小庭邊の、一本菊は花さきにけり、
人こそはすさめざりけり蝶々の、來てはあそべる白菊の花、

秋の自然

昇曙夢

日脚が漸う／＼短くなるに連れて、陽氣も次第に薄れ行く調子・神さびた林は淡く夢のやうな音を名殘に、澤々しい夏の衣を脱いで、骨ばんだ幹には一

種異樣な悲哀の痕が深く〳〵刻みつけられたやう、是を自然の哀史として見るべきものなら、抑も〳〵誰の手に成つたのであらうか、針のやうな梢が、長く、短く、虚空を限つて眞一文字に走つて行くあたりは、早や秋のメローディイを耳にするやうで、其れが、又朧ろに波打つ心の調子に反響するので、今迄物足りなかつた感情が急に充實されたやうな心地がするで、何とはなく哀れッぽいうちにも温かな生命の籠つてるのが秋の自然であらう、と、私は斯う思つた。

何時しか空も夢心地に打霞んで、夕榮の柔かい茜色が、ほんのりと天末を染めたかと思ふと、田畠には早や勞働の聲も沈んで、暮の鴉が秋を枯木の末に綴つて居た、四邊は森として前にも後にも人影がなく唯折々落葉の心細い音がハラ〳〵と此の幽寂の天地に、更に一種の哀れッぽい調子を加へる、此の殿そかに深默の中をカラ〳〵と荷車の音が虚空に響き渡つて、既て絶入るやうに遠く消へてしまふ、――森も林も一叢ごとに黒くなつて、跡は風のみ夕暮の野を我物がほに吹去り吹來るのであつた、――吁？寒い！と云ふ聲が何所からとなく　偶然と傳はつて來たかと思つたら――鎌のやうな新月が今にも風に吹落されさうに、霜枯の梢の間合で、寒い寒い光を放つて居たので……、吁、懷かしい新月？想へば三年前、私が再度の歸國の時であつた、故郷は古仁屋灣頭、將に纜を解いて出ようとする不老丸の甲板の上で、今や亡き數に入ッた我が家兄と最後の手を握つて共に眺めた最後の月も恰度斯樣月であつた、

二

秋の自然に目を驚かす程の色彩はなくとも、心を引きつけるやうに、えも言はれぬ妙趣は確かに含まれて居る、遠くは地平線の上に夢のやうな白雲と黒い鳥の影、近くは遂に眼の前で龍田姫の手招か何かのやうに白い尾花が點頭いて居る、右は萱原で、左は太根畑、遂ひ背後の林で小心な落葉があわたゞしく私語いたかと思ふと、向ふの林に小鳥の群がサッと

散らばる、斯んな所を、一種の空想に耽けりながら一人何心なく彷徨ひ歩くほど心地能いものが又とあらうか、路は落葉に埋もれて、其上を歩むのが早や一種の愉快だのに、一歩々々と零れ行く落葉の音を聞いては、更に一層の趣味を感ぜざるを得ない、斯く歩行いて居るうちには、唯ある林の蔭の水溜りで村の女房が赤ちやけた下卷の裾を遠慮なく見せながら、それは〳〵眞白い、直くにも嚙り付きたいやうな、眞白い大根を洗つて居る所へ偶然と出合すことがある、又は散り敷く落葉の底に、少女の初戀を偲はすやうに、いさゝ小川の囁きを聞くこともある、時としては新婦の『里戻』でもあらうか、四十恰好の婆やが年頃の娘を連れて忍び足で通り行くのを、此方から突然驚かすやうなこともある、それに時々小氣味よい微風が野路行く乙女子の袖に戲れて居るあたりは畫も及ばぬ風致で胸廣い天地の呼吸は斯んな所にも偲ばるゝのであつた、

田園の世界は何時でも生活の源泉で、殊に秋の田園を見ると、今迄嫌つて居た生活も急に慕はしくなるやうな心地がする、樹々の撓わな枝は赤く熟した果實の重みに顫へて、充實せる生活の鼓動を傳へて居る、人の胴よりも高い晩稻の穗が頭を地板に觸れながら微睡して居るところは主人の胸に溢るゝ感謝の情を表はす意味でもあらうか、其上を秋風がそつと渡つて、黃金色の波がサッと零れると、先刻から向ふの畦で夫を打目守つて居た百姓の眼はチラと輝いて其の黑い頰の上には早や玉のやうな雫が轉がつて居る、吁、此の一瞬の光輝と一痕の雫と、其のうちには彼が無限の喜悅と慰藉と感謝とを永に語り盡して居るではないか、豐かに波打つて居る彼の廣い胸には此時微塵の慾も畫かれなかつた、都人の頻りに思ひ煩へる諸々のよしなし事は充實せる彼の心にブラクト程の場所すら發見することが出來なかつたであらう。

野邊の秋草

高橋五子

萌えいづるも枯るゝもおなじ野邊の草
　いづれか秋にあはではつべき

これ昔妓王が、寵衰へて、發心せしとき、閨房の障子にかき遺したる一篇にして、人口に膾炙すること久し、その人生の無常を觀ずるの聲哀しきを以て誦する毎に感慨措く能はず、況んや草木黄落し、山川寂寥として、百憂心を感ずる肅殺の秋に於てをや。

つら〳〵此の歌意を案ずるに、妓王一生の性行と渠が斥逐せられたる以後の生活如何とは、皆此の詞中に於て、明らかに觀るを得べし、即ち此の一篇は自ら、妓王自身が一世の榮枯盛衰を特書する、自家の詩史とも見るべし、

妓王は、本これ洛陽の歌妓にて平相國清盛の嬖妾となりたるなれば、渠が初めの世渡りは、言ふ迄もなく、忌はしき業なりしに相違なきも、その全生涯を通觀して、最終の成果に重きをおかんには、發心前の醜業は、左迄渠が一身を輕重せざるを知るべし、故に此の一事を以て渠を指摘することを得ず、

初め渠が全盛の頃は、如何なる絶美も、如何なる珠麗も、奪ふ能はざるばかりの鍾愛を獲たりしなり其容貌の艶麗なるを以て、當時白拍子ともてはやされし佛にすら、一回の面謁も、許されざる程なりしを、此の動かすべからざる鍾愛の漸く衰へて、此の悲哀なる和歌を詠ずべき境遇に陷りしは、それはた何等の原因によれる。

おもふに妓王は、汚穢なる娼家に生れたるにも似ず、克く邪推と嫉妬とを去りて、更に慈悲と剛忍とを心に蓄へゐたり、然ればにや、佛の相國に容れざるを見ては、極めて可憐の情を起し、自ら中保の勢を迄取りて、毫も疑惑嫉妬の念なく、遂に佛の心を滿足せしめしなるを、人情の反覆は常なき者にて、多年の寵榮漸くに佛に移り、妓王は却りて、反對の位置に立たざるを得ざるに至れり、これぞも發心の

大日本淑女學會

第五回新學期開始

此際入會者に限り**入會金全免**すべし！

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありません。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ヶ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卄家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉詳はしい**規則書**は申越次第差上げます

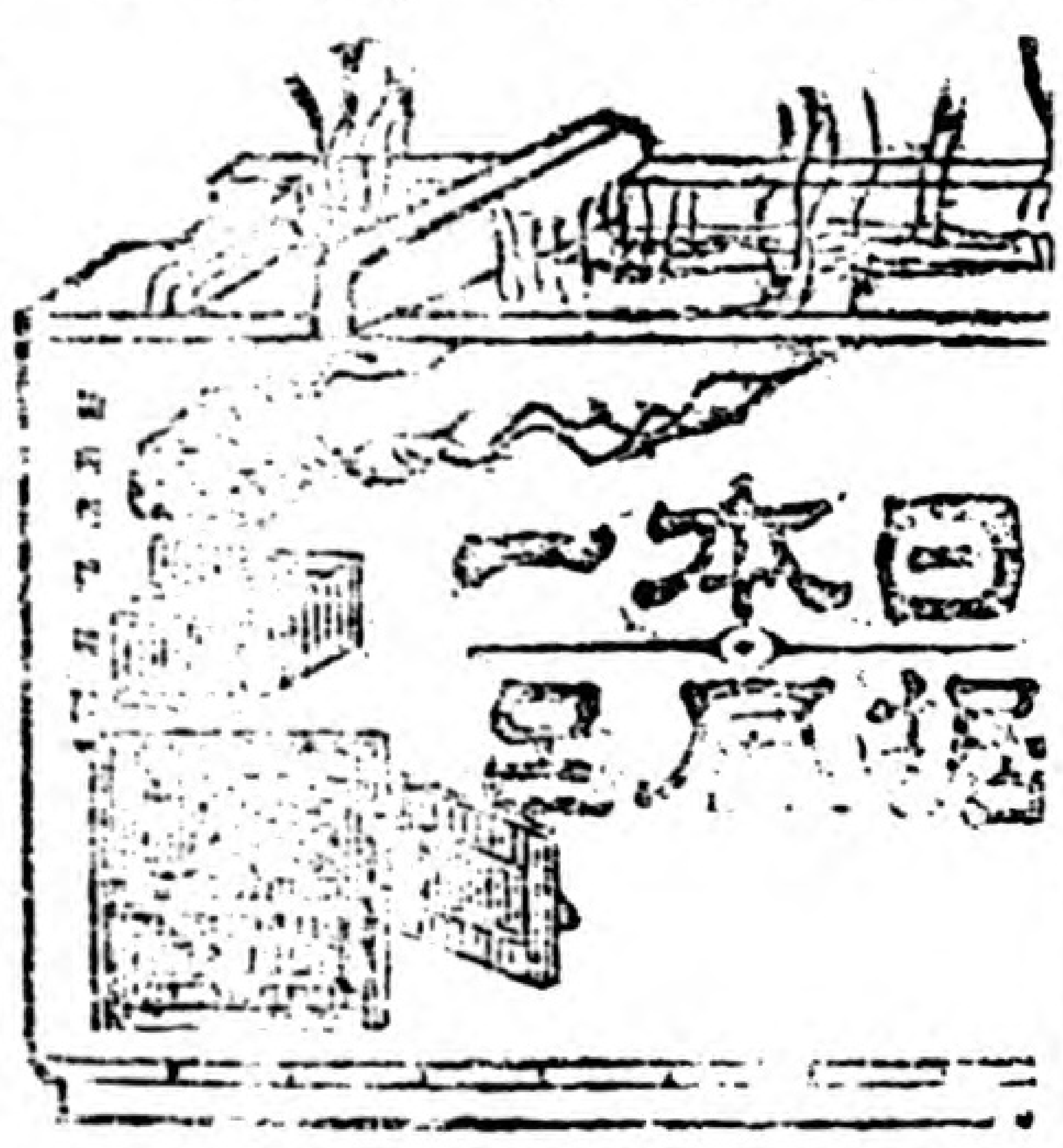
◉東京神田駿河臺（電話本局三千四百番）**大日本淑女學會**



妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子

陸海軍御用

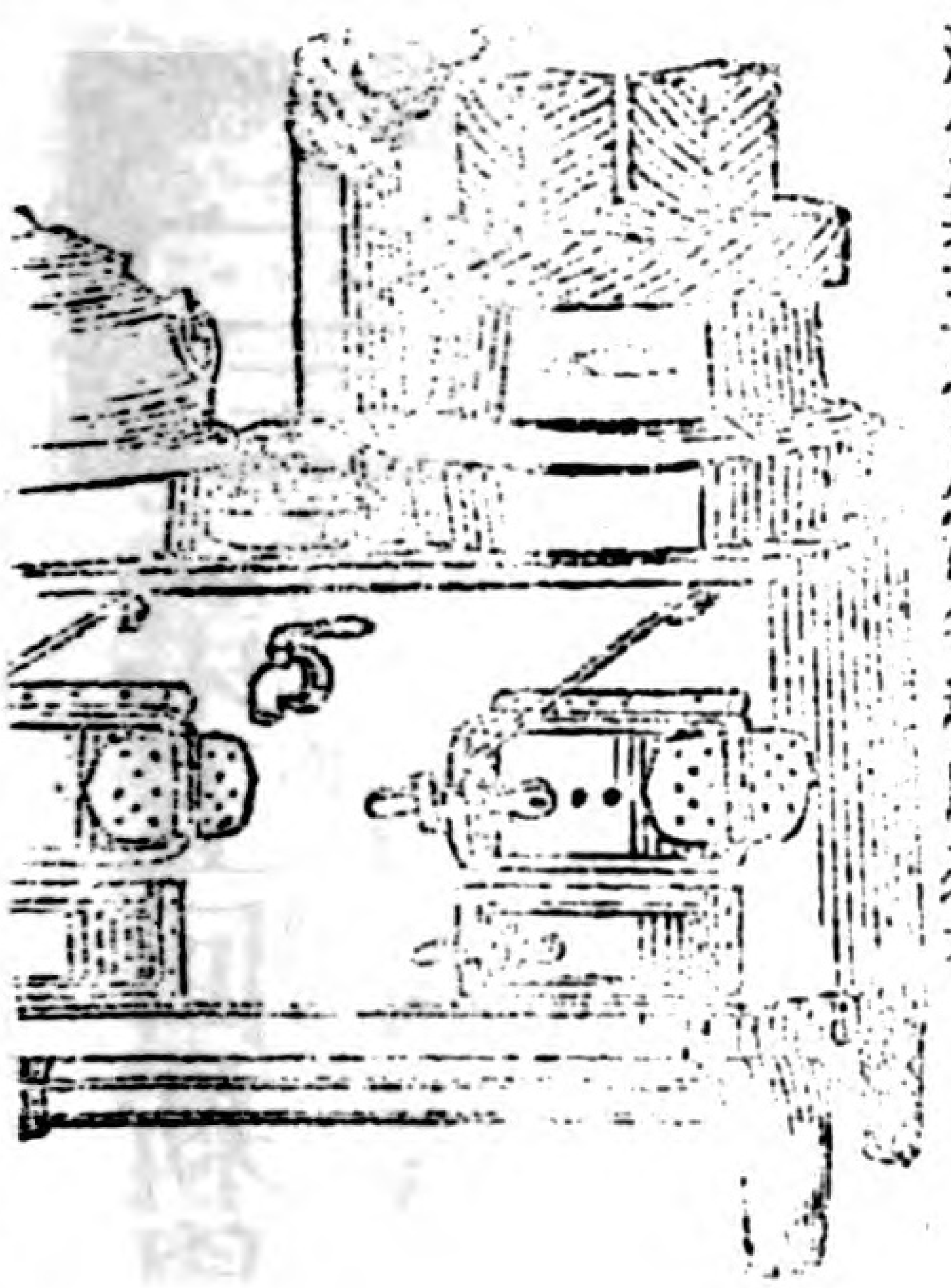


實用輕便鐵[illegible]臺にして[illegible]に仕込あれば取はづし自在なり

總桶木製並二人入銅製改良新石炭燃早沸釜付上り湯付種々其他何人入にても出來合之有又補[illegible]呂もおと改良早沸炊交にても風價に所[illegible]仕候



定價一組　一圓卅錢



總銅製石[illegible]用[illegible]各種[illegible]來有

（定價表郵[illegible]二[illegible]送れ附す）

元祖製造販賣所　[illegible]

原因にて、辭に顯はれしは、則ち此の篇なり、試みに妓王を凡婦たらしめなば、如何で此くの如き憂を招くわらんや、その佛の中保を爲すなどは、おもひもよらぬことなるを、さはなくて、己れ不幸の運に陷りながらも、怨み嫉みなく、聊かの未練も遺さずして、屑く平館を去りしは自詠に耻ぢざるふるまひと云ふべし、されば歌も亦人生の賴みなきを歎きて、現世を觀ずる潔白なる胸



裏より拈出せしなれば、其韻自ら高く、其趣味自ら深く、聞く者をして感慨止む能はざらしむ、其人も亦、歌の如くなれば、逐はれたる後は、復前の生活をおはで、如何に洛陽の群才子が、屢良媒を通じて艷簡を傳へて覦縷の情を伸るも、聊か顧眄するの意なかりしのみならず、幾もなく、佛の微行して、其柴門を訪ふに至りしも、此の歌によりて、感化せられし

なり。

妓王の境遇は、一時不幸可憐の位置に陷りしと雖も、これが爲に、渠の性行は愈進化し、渠が義勇貞烈の德は、世の醜穢破廉耻なる懦婦をして、自然愧死せしむるに至りたれば、渠は、醜を捨てゝ美を取り、穢を除きて潔を受け、疎を離れて密に入りしと謂ふべし、故に妓王は、才德兼備の白拍子なり、節操凛乎たる烈婦なり、しかのみならず、渠は又、孝順比ひなき婦人なりき、試みに思へ、斥逐後に於ける彼が心中は、如何なる悲境にさまよひしか、渠も亦、木石ならねば、必ずしも憤懣の情なきにあらずさるも渠が、涙を飮んで西八條に趣きたるは、これ單へに慈母の悲歎を慰むるが爲なりしなり。

噫西八條の妓王の歌舞は、堂上の士も、堂下の衆も、袖絞らぬは無かりしならん、そは今日の歌舞は昔日の歌舞にあらず、彼處には、輕軀婆娑として、唯に相國を悅ばしむるに止まりしも、此處には、高尙なる趣味を具へて、專ら其中情を訴ふる者の如し故に相國と雖も、其妙技を稱せり、殊に簾中なる佛の心情、思ひ測るに足る、

これに依りてこれを觀れば、渠が斥逐後の艱苦、いふ迄もなければ　渠は能くこれを忍びて、母の意旨を成就せしに、遂に身を殺しても、其耻を雪がんとせり、故に妓王の涙は、外面の涙にあらず、即ちその心の底より流れ出づる、血の涙なりき、世の人妓王を小量なりと尤むる勿れ、その、節義を重んじ貞潔を尙び、生を捨てゝ、死を畏れざること、今人のたやすく學び得べきにあらず、但し其期する所、貞操を全うするにあれば、一旦自殺を企てしも、若し是に超ゆる謀あれば、其心を飜さゞるにもあらず其薙髮して、嵯峨の山林に身を潜めたるは、克く其終りを完うせし者といふべし。

渠は、其身否運に會ふと雖も、其心は如何ばかりか易かりしならん、凡そ人の心は、限りなく進み得るものなれば、始めは、良からぬ心あるも、良き道跡ねて止まざれば、遂には全道を盡すに至るべし、

妓王の如きは、克く道を盡したりといふべき乎。故に、渠が一首の歌までが、今に至るまで稱賛せられて、幾多の人に感慨を與ふるも、偶然にあらざるなり。

富士の高根

石榑千亦

吉野山のさくらいとめでたけれど、なほ十日をまたず、鴨川の納涼いとなつかしけれど、秋風ふかばいかにせむ、龍田山の紅葉も川水の錦にて終り、更科の月もかくる間ぞ多き、四の時かれを愛でこれを愛づとて日も足らぬやうなれど、大かたはその時過ぎざれば、盛りをめで散るを惜みし心なく、風をまち、水をむすびし心はたあらず、錦の水も海までと思ひし人をきかず、闇より月にあくがれたる人、はたきゝたることなし、これそのもの、うつり替るによりて、見る人の心もうつりかはればなり、見る人の心のあしきにはあらざらむ、さては常へにかはることなく、動くことなきよきものあらんには、人のこゝろもとこしなへにかはることなく、動くことなからむ、さはれ果してさるものありやいかに、あらでやは、日の本の中に、否この世界にたゞ一つこそあれ、富士の高嶺なる、けだかきさま、うるはしき姿、塵ばかりもあしといふところなきは、こをおきて何をか求めむ、霞がくれに匂ふさまは花におくれず、三伏にもなほ消えぬ雪を見れば、心おのづからすゞしく、空澄わたりたる秋の空には、白妙の絹を冠りたらむさまして、名殘なく見渡さるゝには、風のふきあらさむ憂もなく、闇にさへそれとしるき心地せらるゝをや、さては春秋いづれの折もそむかるゝ事なし、たゞ雨の日、雲のおほひたゝむのみに惜しき心地せらるれど、花紅葉にも風の障あり、月にも雲のきらひあるにあらずや、それも暫しの間のみいつまでも雨雲のあるべきにはあらずかし、まして空のどかに晴わたれる、君が大時代はかく動きまさ

ざれといのり、わが代もかくうつることなかれとねがひて、いはひて仰ぎ見れば、珠などかさねあげて君に奉らむと身をさゝげたるものゝ如く、立てし志はかく動かされ、事あらばこの雪の如く潔く消えてよき名をとゞめよと、戒むるところもあるが如し、あはれ四の時につけつゝ、よき見物もあれど、如何で斯ばかりのものあるべしや、げに見れどあかぬは富士の高嶺、あはれ日の本の鎮とます富士の神山あはれ。

氣象の變化と詩趣

竹内蘆笛

春はあけぼの、秋は夕ぐれと、とり／＼に床しい感興を吾々の胸に起さしめるのも、つまり四季の氣象の變化が、あづかつて力ある事だと思ひます、詩歌なるものは此等の感興を文字にあらはしたので、して、俳句等では明かにこの季と言事が唯一の條件になつて居るやうでございます、

實際吾々が自然景を寫すの時も到底氣象の風致を添へないでは美事なものが出來ません、尤もこれは一度詩歌を作つた人の熟知する處で、今更自分たちの言ふ迄もない事ですが、夫れからしても、この外界の季節氣象は、如何に吾人の詩興をたすけるか到底はかり得る事も出來ないでしよう、

考へて見ますと、季節氣象は自然を蓋ふた衣であります、これに依つてこの自然界は毎は變化して行くのであります。

同じ野原でも、春と秋とでちがひます、又朝と晩とでも非常に感じが相違します、春は蒲公英、木筆紫雲草等の美しい野花に胡蝶等の戯れて居つたのが秋になるとすつかり變つて、風にそよぐ枯尾花や、薊、桔梗が僅に名殘を止めて居つて、其の間の淋しげな鶉等が漸く動いて居ると言うやうな有様で、無論一寸考へては、左程な感じも致しませんが、さてつら／＼と思へば思ふ程、如何に氣象が直接間接其

の中に關係して居るかゞお分りになるでありませう
　今も申す通り春先になると、俗に見ふ花曇りで、草や木の若芽の萠え出づると共に、空の日和はどんよりとなつて、所謂春霞の曇り勝ちであります、おちこちの山々を見渡しても、秋冬には見る事の出來ない位、ほんのり紫がゝつて峯に咲いた櫻の花も、斯う言ふ長閑な時に咲かなかつたら、又美しい感興は起さしめないであらうと思ふ位です、
　雨の如きは中々深い感情を與へるものです、殊に春の宵等しと〳〵とふる雨の音を聞いたならば、果してどんな心地がするでしようか？
　御存知の通り、降雨はこの東海地方では五六月、即ち梅雨の頃が一番長いやうでございます、恰ど春から夏に入らうとする時でありまして、春先に咲いた櫻桃の如きは皆悉く散り失せて、瑞枝色よく生ひ繁つた中にあやめ、菖蒲が咲き亂れて居ります、素よりこれ等の植物は水中に生じる特性を有して居るもので、從つてこの雨期に際してもふさはしい風致をつくつて居ります、猶竹籔や芭蕉の葉に雨のふりかゝる音も又これ迄の詩歌には、大分唱はれて居つたやうに思ひます、音といへば草木が風を受けて、一種の美音を發するの等は忘れ得ぬ程うれしいものでございます
　湖邊や川岸で荻、蘆、等のそよぐ聲、磯馴松の梢を拂ふ風の聲等、殺風景な風も時には好詩材を得さすものでございます、
　雲に就いては自分は殊に非常な趣味を持つて居りまして、又雲と言ふもの程雄大なものはないと思つて居ります、實に初夏七月の頃、波の音靜かな湖畔等で、近くに緑りの森を控へてもや〳〵と大きな雲を遠く遙かに望んだならば、おそらく如何なる人と言へ、豪然たる心の振ひ起らざるものはありますまい、
　夕日の雲、秋の岡の雲、枯野の白雲、さては夏の眞晝の雲の峰等しく雲と言へば何れを捕へ來ても、剛健雄大の思想が腦裡に浮んで參ります、一體御承

知の通り雲と言ふものは、四ッの種類に分けてあります、即ち巻雲、積雲、層雲、雨雲の四ッでありまして、各々形が異なつて居ります、

でつまり其の中で積雲と言ふのが、よく夏の眞晝等に見る、所謂雲の峯と言はるゝので、まるで綿でも積み重ねたかのやうな形をして居ります、層雲と言ふのは餘程これは澄み渡つた晴天の日でなければ見る事が出來ません、幾ッにも横に層をなして段々に重なつて居ります、透き通つて一番淸やかな姿です、巻雲も空の晴れた春秋の日等には、常に見る雲であります、これはおそらく天の高い處で凝結をなして氷狀をなして居るのだらうと言ふ話です、一寸見ると鳥の羽毛の様な形や又纖維狀をして、一番高くに居りますから、他のやうに動く事がございません、之等と丸で反對で一番たちの惡いのは雨雲であります、これがつまり雨水を含んで居りますので、此の種の雲は往々雷電等を起すに至ります、つまり空氣が飽和點以上に達しますと、それ以外の水蒸氣は集まつて高く行けば雲となり、低く走れば霧となるのであります、

秋風漸く身に泌みて栗の木の實の熟する頃、朝早く起きて見ると山にも森にも一面に朝霧の立ちこめて、得も言はれぬ趣きを覺へるのは、よく山家の生活をなすつた人々の見る處であります、概して霧は高原に多く、又秋より夏の方が繁いやうに思ひますで同じ平原にある時でも、霞は床しく美しく麗らかな感想がありますが、霧は淸らかな、寧ろ雄大な景色のやうな感じが致します、

思へば秋は萬物の實の熟する時でございます、森に林に到る處靜かに匂ふ落葉と共に、美しい果實は秋の自然を飾つて居ります、而かも空はと見れば淸らかに落ち付いて、夕暮の大氣は、天の涯の涯までも見え透くやう、而して我々が窓前燈下に於て作り出さるゝ詩歌も、又美しい淸かな思想に相違ないと思ひます、しかしながらよく古歌等を散見しますと古來國民の詩想が概して春を樂み、秋を悲むと言ふ

様な傾きが、殆んど人の至情のやうにまで顯はれて居りましたが、しかし自分は決してこれは當然な詩想ではないと思ひます、前に述べた通り詩歌は各人の感状を忌憚なく吐露したものである事は云ふまでもなく、喜怒愛樂の情が折にふれ時にふれて自然景を唱ふ詩歌にまで、自己の情を移したので、唯春には概して自分に喜しい事が多く、秋は概して自分に悲しい事が多いとて、初歩の歌人



が始めからなんでもそれで押し通さうとするは、又大いなる過ちであらうと思ひます、

畢竟春の樂みは、いはゞ外面ばかりの樂みですが、秋は自然自づからが眞底深い詩趣を吾々に與へるやう、又深い樂みが滿ち〳〵て居るやうにも思はれます、つまり今迄かう言ふやうな頃向の流れて來たのは、我が國の思想が一般に幼稚であつたせいか知れ

ません、
冬の中にあつては、雪と霜とは殊に珍らし、又美いものでございます、
雪は古來から、雪月花の首位にもある位で、其の詩歌も中々多いやうであります、雪は降つて居るさまも面白いし、止んで居る景色も美事であります、殊に夜の雪等は實に美しい詩材であるにも拘はらず今迄の和歌にはあまり唱はれてなかつたやうです、
自分は今こゝでお話し致しますのは、題目にもあるとほり詩想より見たる、氣象の變化美觀を其儘排列したにすぎないのですが、なるべく詩歌を作る人は新詩境に接して、自分の詩想に寫つた丈けの完全な感興を其儘あらはして貰ひたい、
で現今の新派歌人の中には、あまりに複雜した新詩想を唱はんとして反つて失敗したやうな作物も大分見受けます、であるから詩歌を作るにも出來るだけ、自分にも分り又他人にも明了に解せらるゝやうに心掛けて頂きたいと思ふのであります、

今井の月

遠山稲子

九月某の日、南鄕栁子君の許より文來る、披き見るに、兼ねて契り置きまゐらせつる月もさやかに成りぬ、垣根の眞萩もほころび初めたり、虫の音は只ならぬを、鈴木小舟君をも誘ひたまひて、必ずものしたまへ、今宵をなすごし給ひぞ、とあるに、心そゞろに浮き立ちて、使して其よし小舟主がり言ひ遣りつ、午後の四時頃より、車連ねて麻布今井町なる君が家に到る、
やがて到り着きて、請ぜらるゝまゝに、奥に打ち通れば、そこには、最と淸らなる絨氈もておほはれたる大きやかなる一脚の机の上に、料紙、短冊、將た硯箱など序正しく備へられたり、
又何をか責め給はんとすらん、今宵は月を見、虫を聞かんとて、參りつるものをと思へど、今更にえ逃げもあへずなん、

座に着きて茶など啜るほど、耳元近く混々と流るゝ水の音に心づきて、不圖庭の面を眺むれば、軒近くしつらへられたるふり面白き石の井より、絶えず溢れ出る水の細き流れとなりて、植込のひまを彼方此方くねりつゝ行くさまの、云ひしらずをかしきに折柄落ちかゝる夕日を浴びて、只油などを流したらんが如く、きらめき渡る上を、水すましとか云ふ虫の絶えず飛びちがふも所がらいとつき／＼しうて打ちまもる程、少女が洗ひ髪なして、水の面に末打ひたせる、しだれ柳の風にゆらぎて折々時ならぬ雨を降らすなど、只々見る目珍らしう、何時もまゝのぼる御館なれども、まゐるごとに其さまのかはりて見ゆるに、先づ主人の君の此の道にも長け給ふ程もおしはかられて、只何となう物なつかしう、我を忘れて打守るほど、柳子の君早くも料紙とり出づゝ、月の昇らんまでは未だ程もあらんを、徒らに過さんことのあたらしければ、同じくはかたみに待つ心にても詠み侍らんは如何にと言ふ

主人の君の勸め給ふまゝに、今や筆を措きて箸執らんとするをりしも田中瀧子君在せり、今日は君の見え給はぬを人々さう／＼しう思ひ居つる折からなれば、誰も／＼悦ぶこと限りなし、やがて四人卓打かこみて、語りつ詠みつ、將た食うべつする程、家のうちもやう／＼闇く成り行くに、不圖庭の方をかへりみれば、月はいつしか植込の松々離れて空高う澄み登りたり、

わだのはらみたさん物とあさる間に
みそらの海は月に成りけり

と書きて人々の前に出せば皆笑ふこと限りなし、主人の君、風呂に入り給へと云はる、湯の辭儀は何とやらんといへれば、さらばとて、小舟君もろともにものす、風呂は先つ程、あるじの君の數寄を凝らしてしつらへられたるものなれば、萬づ最と淸らかに新らしう心地よき事譬へんやうもなし、あむる程玻璃の窓より、まどか月のさしいりければ、

湯あみする室にも月のさしいりて
ものはずづしき心地こそすれ

湯あみをはれば今度は高殿にといざなはる、昇りて見渡せば、名を聞くだに涼やかなる氷川の御社に隣れる、最と清らかなる廣き邸にて、加ふるに四面皆老杉古松もて打ちかこはれたれば西を望むも、東を眺むるも、前を見るも、はた、後ろをかへりみるも只鬱蒼たる木立の茂るのみにて、塵ばかりも都の塵にけがれたる跡見えず、宛然深山の奥に遊ぶが如くなるに、仰ぎて見れば、光り皎々たる、輪の明月中天に掛りて、恰かも鏡を磨き出でたるが如く、一伏して見れば、水満々たる池水に浮びて豊かに鰭振る緋鯉は更なり、底に沈める眞砂の數も讀み盡すを得べく、此絶景、此佳境、拙き言の葉には寫し得べくもあらず、況いて才短かき已れが筆にはいかでか、いつしか魂もこの身を離れて、遊く月の都に天かけらんとす、

初秋月

はしゐして月見る袖の常よりも
露けかりけり秋やたつらん

●女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、毎月十日締切り翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により爾後締切を掲載前々月末日迄とす

兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人或はそれ以上の名を並べるとなき樣に願ひたし

用紙は半紙半裁又は端書に限り、短冊形等のものは無効とす

兼題和歌、雜題和歌、俳句は各、天地人、及秀逸を拔き天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す

短文、新體詩は、天地人及秀逸を拔き天賞二圓、地賞一圓人賞五十錢を呈す

賞金は當選者の望みにより現金又は價格相當の物品を送る、又秀逸の人には繪葉書を送る

歸省雜記

中川愛氷

兵粮責

汽車は金谷を發した、軌道を刻む音の聞ゆる限りは、刻一刻郷里に近づくので、まづ心も落着き、窓の中に眺める身になれば、今の今まで怨みたる雨の降るさへ憎からず、靜枝を相手に、送迎する山また川、田また畑の景色作物などを說聞かせつゝ、濱松驛に着するのを待詫びた、靜枝は見るもの每に珍らしく感じて、あれは何、これは何と說明を求めて居たが、フト思出したやうに、辨當は何處で賣つて居るの、といふ質問が出た、濱松の待たるゝはその事也、前日の午餐後食事の機會を失したれば、もはや菓子などでは間に合はず、兎角する程に濱松に着した、然るに生憎の事にて、辨當も鮓も、牛乳さへ賣切になつたとのことである、昨夜來の雨ざらしは左まで苦にもせざりし靜枝の、身體健かなるだけに、食慾もまたすゝむに、これまでは神妙に待ちしが、次は豐橋まで來ねばなし、不通承知とは捺印してあれど、大阪迄の急行劵を賣付られて、しかも乘替へたこの汽車は最大緩行である、いかなる小驛にても汽車の停るに、こゝにも辨當はないの、と千松になれるを、漸くすかして豐橋に來れど、こゝにもなし岡崎にもなし、大府にもなし、熱田にもなし、午後三時半名古屋に着し、漸く辨當を買當て、汽車の動くを待ちて箸を執初めた、折のあしきこと哉、何時つくりし辨當か、飯は堅くなりて箸も立たぬ有樣なるに、すきたる腹にはなか〳〵納まらんやうもない漸く岐阜にて名物の鮓を買ふことを得て、生命には別狀のなき事となつた、その間の男政岡、此方の裏のチサの木を歌うたのではすまない、さても雨の祟のはげしきことかな。

意外の停車

米原より雨は晴れ、夕陽に磨出された湖畔の眺望は、幼兒も其景の美に見惚れ、逢阪山より大津の市

街を見返つた時は、身は恰もこの闇中より脱出でたるやうに感じた。日は此關を限りに暮れ、京都も夕闇の中に送り、九時をいさゝか過ぎて大阪に着いた午後三時前後に大阪を發する便船を借らんとしたるに時刻に外れたれば、尾の道まで乘越す方時間の經濟になればと、更に切符を買ひ、程なく神戸に着したるが、この汽車は關西直行とのことに、足掻は遲くとも乘替のなきをせめてもの便利とした。須磨明石の絶景も夜汽車の中にては何の興もなく、たゞ靜枝と父君の無事を祈りつゝ、十二時頃姫路に着した思ひ掛なくも、姫路はこの汽車の終點であつた。三十分ばかり前まで話相手となりし靜枝の、いつとはなく我膝によりかゝるよと思ふうちに、恰も投付けたる如く眠りて、夢路を遠くたどりゆく態である、不憫とは思ひたれど詮方なくゆり起した。子供心にも旅にある身の覺悟はあるものと見えて、直ちに目を覺し、車外へ出た。雨はまたいつの間にか降り出して、夜色いよ／＼深く、物のあはれを感ずること夥しく、靜枝はさも心配氣に、また汽車が停つたの

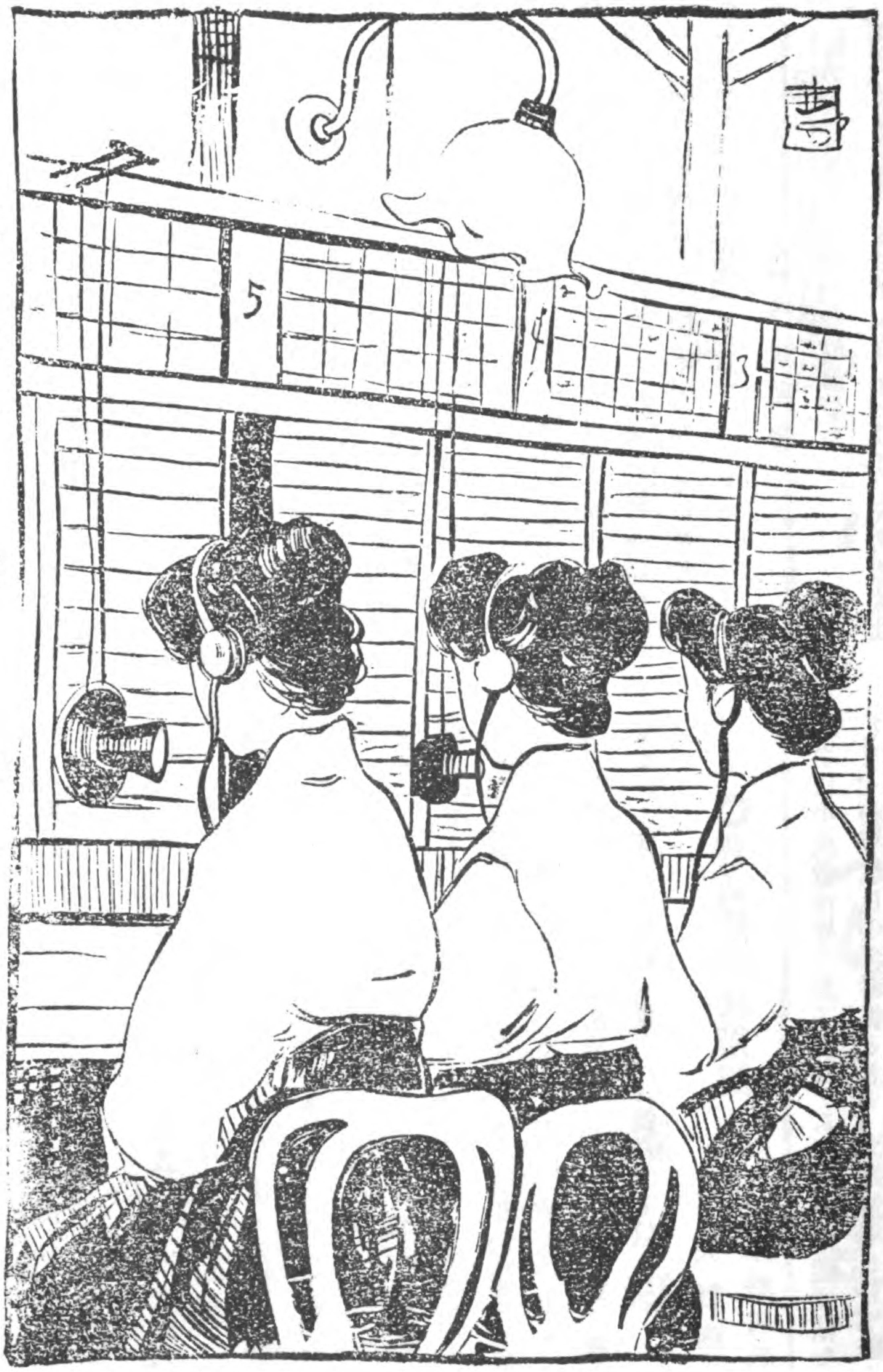
無用の心配

もはや西行の汽車もあるまい、姫路にて一泊する程ならば、第二の故鄕なる大阪には友人もあり、心のまゝに休息せらるゝを、幼兒には難事なる遠乘をして、今一睡の覺めぬ程に、この汽車の道は終るべきを、姫路城いかに莊麗なるも、かゝる旅にありては、一日を見て暮さんこと中々に心苦しい、去ながら今はせんなしと覺悟しながら、もしやといふ心も起りて、旅宿へと志したる道を立戻りて、今夜西行はないか、と聞けば、意外にもあります、といふ返辭の下より、汽笛の聲は聞えた、これぞ煎豆に花の咲いたる思ひをして、匆々その汽車に乘つた、朝七時尾の道に着いた時には得も云はれぬ愉快を感じた

故鄕へ半里

尾の道發の汽船東豫丸に、僅に五分にて間に合ひ風すさみ波あるゝにあらざる限りは、幾度かの汽車發着に狂ひを生じたれど、豫算の時間内には歸省せ

らるゝ譯である、この日歸省すべき電報は疾くに着したる筈なれば、一時一刻を急ぐ予等にまして、父君は如何に待詫びて居たまふことであらう、母君も予等の噂にて持切たまふことであらう、去ながら其の父君未だ御別狀なきか、心にかゝるはその事である、汽船は壬生川へ着いた、この艀は三十分を要するので、岸より繩を引きたい感がするのであつた、



壬生川より一里半、飛ばさんとする腕車、沙利路の雨後宛いざるが如く動くのである、この道すがら、幼那染の久米鯉東宗匠に逢ひ、父君の病を見舞はれたるに、さればまだ別狀はなきかと問へば、宗匠は勢をつけて、そんな事はなしと云ふに、嬉しさ譬へんに物なく、靜枝を顧みて、お祖父さんは御元氣だよといへば、靜枝も喜んで、マアよかつた。

新刊紹介

○婦女の心得

細川潤次郎著
明治書院發行

久しく華族女學校の校長として、女子教育に盡瘁せられたるが、今また婦女の心得べき諸ヶ條を親切に說かれ、世に公にせられたるもの即ち本書なり、幼時より進んで少時、婚嫁の前後に至るまでの間におけろ神佛、交際、衣服、住居、衞生、育兒、雇人に關する心得その他種々の境遇に關する心得、姑、母の心得等あり、本書の意のある所を了得せば、最も缺點のなき婦人となることを得べし（定價廿八錢）

○摘要理科圖說

理科學會編
水野書店發行

其第一編出づ、第一編は動物界にて、動物に就ての智識が容易に了解し得らるゝやう、器用に圖說したるものなり、その目次は第一脊推動物、節足動物、軟體動物、蠕形動物、棘皮動物、腔腸動物、海綿動物原形動物の八門に分つ、動物研究流行の折柄、本書などその需用に應ずるに足るべき好著たるを失はず（定價二十錢）

○歸郷記

堀內新泉著
成功雜誌社發行

宮崎湖處子の歸省の如きものかと、先づ第一頁を開けば、成功雜誌社の發行だけありて、成功といふ文字早くも眼に映じ來る、精讀するの暇なけれど、其目次を見ていかに仕組まれたる小說たるかを知るを得べし、分量澤山にて故鄕、零落、離緣情の戰など三十五項目ありて最後が歸鄕となるなり、家庭の讀物として歡迎せらるゝものなるべし（定價四十五錢）

○小なるハート

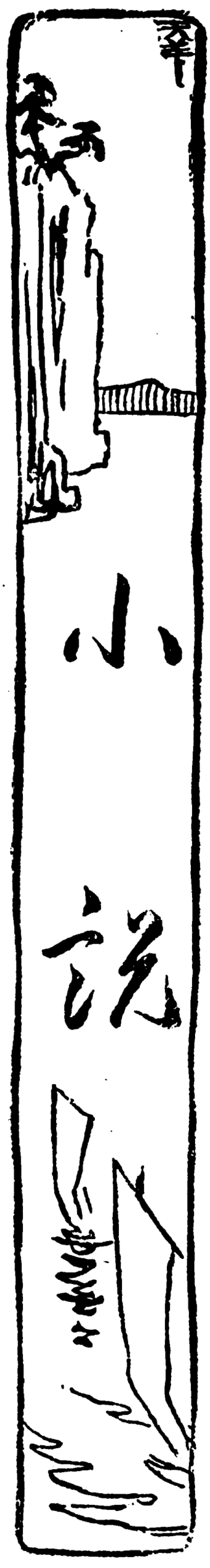
樋口龍林著
水野書店發行

少年少女間にも讀まるべき家庭小說にして、佛國人ペロンネー夫人の作『小さな心』を譯したるものなり、趣向も文章もおもしろし、併し著者が日本には家庭の讀物にて善い物が皆無なるが故に、本書を出せり、といへるが如き程有難きものに非ず、殊に可笑しきはその皆無の中にあるべき作者の福田琴月森雅子などの助力によつて著述し得たと云ふに至つて、前の見識とこの不見識の權衡とれざるべし、その助力したといふ先生は夜中の星ほど多く家庭用の讀本を出したるなり、その善惡はこゝにいふ必要なし、夜半の星ほど惡書（著者の皆無といふより打算せば）をつくれる人に、曉天の星といふべき良書譯述の助力を頼みたりといふ矛盾をいぶかるのみ、殊に家庭の讀物にハートなどいふ題名は感服せず（定價六十五錢）

○普通體操法解說

矢野能友著
水野書店發行

本書は中央敎育界に於て研究したる、普通體操法を解說したるものにして、小學敎員の參考書として、又講習用として極めて簡便に目つ重寶なる良書なり、國光社にて發行せる『體育の理論及實際』を讀みて本書を讀まば更に大に得る所あるべし（定價二十錢）



わくら葉

須藤南翠

二

空はどんよりと曇つて來た、雨が近いのか、冷やりと羅衣をかすめた風が、路傍の小草に戰ぎを見せて小さな螽を一匹飛した。

出格子を拭込んだ門番所の時計が、今五時を報じたのに、内職の竹楊枝は、まだ半分も仕上げにならぬ門番の爺さんが怨めしさうに時計を仰視ると、小砂利に喰ひ入る轍の響きが聞えて、玄關を離れた馬車はもう門にまで近いて來る、爺さんは眼鏡越しに、其方を睨んだまゝ、忙がしさうに木賊をかけ始めた。

二頭式の割幌の、幌は後に疊んだまゝで、白露列ぬく蜘蛛の圍とあやまたるゝ夏肩衽に、白綾に同色刺繡のある日傘を挿した、品の好い年若な夫人と、元服をした至つて弱輩な侍女とが、何か低聲で話しながら、今出放れた華崗石の門柱を、只だちよいと回顧つた。同時に、馭者が宙で回はしてぱちんと鳴らす鞭風に、蟬の羽のやうになつた櫻の葉が力なく虚空をさまよつて、頓て弱々しく夫人の膝に落ちて來た。

たら〳〵と坂を下り切つた馬車は、右に開けた廣い道へは前まないで、其の斜め左の狹い小路へ馬首を轉じる、この小路をもう一つ曲ると、其處が有名な鮫河橋谷町の別天地なので。

角を曲ると往來が急に狹くなつて、町は却つて非常に賑はしくなつたので、馬車は勢ひ徐行を餘義なくされるのである。馬丁は馬の先頭に立つて、人を拂ひ、馭者は一心に轡を控へて、只顧馬の跑さを制するのであるが、ともすれば、店を覆へし、廂を破りさうなので、馭者はびつしよりと汗になつた。

馭者の苦心も無理はない、巷は啻に狹溢いばかりでなく、兩方から挾さんで壓するやうに、簷の低い、窓の小さい、二階家がひし〳〵と建て續いて居て、凡そ十四五間毎に、細長い井戸側と、水道の共用栓とが、路の四分の一を占めて居る、其の上にまた、纔かに肌を掩つたばかりの兒童等の、巷一杯に塡充つて居たのが、物珍らしい馬車の姿を見ると等しく、皆一聲に萬歲を叫んで、浮塵子の如く遠寄せに周圍を包繞くのであつた。

馬は駭いて鬣を振つた、夫人の眸には一片哀憐の光が閃めいて包繞んだ兒童等の面を目成るのである男も女も、骨格だけは可なり健かに見えるが、肉着と血色とは孰れも之に伴つて發達したものとは見えぬ、中には狡猾な眼光を輝かして、猜疑の視線を放つのもあるが、多くは一種沈鬱な眼を瞠つて、動作の慓悍なのに關らず、何處やら怯れたやうに、兢々として目送つて居る。他の巷で見るやうな、無邪氣で、活潑で、生々とした笑面を持つて居るのは、是丈の人員の中から、先づ幾人か發見することが能やう？

活氣の乏しいのは、獨り兒童等ばかりではない、家の小さく、ひくいためか、家の內は薄暗くして、陰鬱な氣が戸外にまで溢れて來るのに、店舗と店舗との間には、庇合間のやうな裏長屋があつて、僅か一條の溷板を往還に、左右の簷が接して居る、往來の土までが眞黑に汚れて居て、井戸に、水道に、汲み上げる水が絕えぬので、いつもしつとり濕りを帶び、常に一種異樣の蒸發氣が騰つて居て、白日の下にも曾て爽快な觀といふものがない、斯ういふ間で人となるものが、何で快濶な活氣が備はらうぞ？

夫人の眸には、いつしか涙が泛んだ。

巷を飾る店舗を見ると、一戸の典舗と、一戸の大米屋の外には、二三の荒物屋があるばかりで、多くは口腹を養ふ料を賣る家である。中にも青物屋が半以上を占めて居て、魚屋、煮賣屋、酒屋、駄菓子屋の類が、其間を點綴して居る。殘飯屋はまだ時間が早いと見えて、店はひつそり閑として居るが、青物屋、魚屋、煮賣屋は、晩餐の膳を賑はすべく、盛んに店頭を飾つて居る、

この賣物を觀れば、則ち其の生活狀態は略推察さるゝのである、夫人は仔細に賣品と定價と熟視するのであつた。

青物は皆山に盛りて、一錢二錢の札が附けてある。魚屋は刺肉を皿に盛り、切身を鉢に入れ、唯だ箸さへ下せば可いやうにして、夫れで一錢から五錢を越える物はない、煮賣屋はそれ以上の便利を計つて、汁一杯、漬物一碟を、五厘三厘で賣つて居る、これに要るだけの殘飯をさへ購へば、手も濡らさずに晩餐を果すことが能きる、この點から見ると、貴人と貧民とは、庖厨を遠からる點に於て、能く一致して居る

兒童の中から急に高く叫ぶ聲がして、俄かに四五人疾走するものがある、夫人は浪の如く上下する頭を逐つて其方を見ると、其の對面から一個の婦人が歸つて來た、新らしくもない菅笠を被つて、手甲脚袢に身を固めて居るのは、此の夫人の邸にも時として出入する草取の婆なので、夫人も彼が一日の勞働を終つて、僅少ばかりの汗の價を懷にしながら、今その休養の宿に還つて來たのであることを、直ちに覺り得ることが能た。

四五人の子は一齊に圍繞んで、手に縋り、肩に飛び着き、腰に纏ひ、脚に絡んで、一日相見ぬ懷しさを流露するのだ、其中で大きいのは、被つた笠を脫つて擔ぐ、瀧のやうに流るゝ額の汗を拭く間もなく、よ

ろ〳〵歩きの小さいのは、もう抱き上げられて懐を捜つて居る、母は一向煩さゝうな顔もしないで、彼等に優しい語を送つて居る。

『ヤア爺も歸つて來た』母を歡迎した彼等は、それより勝して歡呼しながら趨つてそこに赴くのである



紺が淺黄に褪せた腹掛は白が鼠に汚れたシャツの上を裝つて、泥塗れの股引に踵の破れた草鞋穿、半纏もなけれぱ笠もなく、醬油で煮染たやうな手拭で、黑く光つた額際を拭きながら、爺は氣味の惡いほど皎い齒を露した。兒童等は滿面の喜色を投げかけて、汗臭い爺に犇々と絡み着いた。



斯くして夫婦相顧みて温かき手を握り交し、活々として喜び踊る吾が兒を愛撫しつゝ彼等は馬車の人にも目を觸らず、踏み破られた溷板を跳り越して、炭團屋と番太郎の庇間を歸り行く、

馬車は急に後退りして、鐵砲阪を右に登り、仲之町を堀端へと疾驅するのであつた。

（二）

『母ちやま、彼の電車は何處行くの？』

雪を欺むくラミーの洋服を肌裕かに一着した三歳ばかりの男の兒が、大黒帽のリボンを風になぶらせて靑氈を延べた堤の小草に足ふみ伸ばし、往さ來るさの電車を餘念なく眺めて居る。

『坊やに言つても知らない事よ、下のはね、お茶の水から中野といふ處へ行くの』

『うゝむ、爾ぢやないの。彼れ、彼れ、彼の電車だよ』

『おほゝほゝ、彼れは外濠だよ。坊やいつもお祖父樣の處へ行く時、乘るぢやないかね。坊や、もう忘れたの！』

『うゝむ。いつ御祖父樣行くの？今つから行くの？』

『今日ぢやないのよ。今度ね、今度また行きませうね』と、帽子の歪をちよいと正して、其の手を輕く脊後に宛て、密と顏を覗き込むと、苹果のやうな頰に凹を入れて、笑ひながら首肯くのである。

母ちやまも零るゝばかりの笑顏になつた。

坊やに酷く肖た切長の重瞼に、無量の愛を籠て視るのが、さも〳〵情に厚い趣きが溢れて居る。まだ廂髮の相應はしい年齡で、二十を出たところで一か、二か、三とは慥かに出ては居ない、葡萄鼠の伊勢崎絣をひつ詰め衿に着て、桔梗色に秋草を染拔た絽の丸帶の、帶揚を今少し厚くしたいほど、美くしい、若

やかな母ちやまで。

喰違ひの堤を飾る老松には、夕風涼しく音づれて、濠の汀にさゞ波に寄するのが、またなく熱を洗ひ去る、曇つた天はまだ晴れず、濕つた土には砂さへも颺らぬのである、坊やの運動に適當なのは言ふまでもなく、お守をする母ちやまにも樂で涼しい。

東宮御所の屋上には、金色の鳳凰が翼を張つて居る、網をかけたやうな足場に職人の上つて居るのが、恰是燕のやうに見える。母ちやまは夫れを指さして坊やに注意を促がさうとした。

『母ちやま、何？』

無心に指頭を辿らうとする時、御所前の方から二頭式の馬車が來た。堤にぴつたり身をすり寄せて、この馬車を遣り過さうとすると、車上の人は急に會釋して、

『おや？ 秋田さん』と、聲をかけた。

見ると、學校を出てこゝ四年、互ひに消息を斷つて居た、荻野露子であつたので、

『まア、荻野さんぢやなくつて？』

『やつぱり秋田さんでしたね、』と、直ちに馬車を駐めさせて、露子は車を下りやうとする、

『其のまゝで在らつしやいな。貴女が水谷川家へ大歸になつた事は聞きましたがね、私も其の時分春山といふ裁判官に嫁したものですから、存じながら御無沙汰をしましたの』

『存じて居ますよ。直と熊本の方へ御轉任遊ばしたつてね。――其の坊ちやん、貴女の？』と、露子は到頭馬車を下りた。

『悉皆お婆さんになりましたの、此んな者が生ちやもうおしまひですわ』

『いゝえ結搆よ。お幾歳？』
坊ちやんは透さず指三本つき出した。
『おや、お怜悧です事ね、お三歳ですつて？お名前は？』
『坊やは何といふ名だつけね』と、母ちやまが問題を補足する。
『坊やはね、春川榮ての！』
『榮さん、好いお名ですね、お馬車に乘りませんか』
『うむ』と言つて母の顔色を診つて居る、
『菊枝さん』と、露子は母ちやまの方に向つて『貴女、久々ですから少しお話しは伺はれませんか』
『私、是非お話しを伺ひたいと思ふんですが、貴女御迷惑で在らつしやいませうね』
『お差支へがなくつて？ぢやア御迷惑でもこの馬車に乘つて下さいな』
『お馬車にですか』と菊枝は了得に羞澁んで、此んな服裝で失禮ですわ、』
『お厭なら幌をかけますわ』と、露子は榮を抱いて、再び馬車に上つた。
菊枝も今は否みもかねて、下された幌の中に、兢々として潜むのである、

（三）

清水谷公園の茶亭の奥庭敷に相對したのは、疎かりし四年の交はりを溫むべく、今しも馬車を倶にした露子と菊枝とである。
『私、些とも御疎遠する意はないんだけれど、貴女は伯爵家の夫人だし、私は高が地方裁判の判事の家内ですからね、無禮に手紙なんか差上ても何うかと思ひまして』と、菊枝は務めて身の怠りを謝て居る。

『ぢやア私が尊大つて居るんだわ』と、露子の寂しい面には、始めて過去の血が環つて來た。
『あら、爾いふ理ぢやないのよ』
『私だつて爾うぢやなくつてよ、同級生だつて幾多あつたけど、眞から氣が合つたのは、貴女一人だわ、お世辭ぢやないのよ』
『眞個ですはねえ』と、菊枝は懵乎として、心に過去の姿を描きながら『貴女は元々子爵家の姫樣だし、私は高が平民の娘なんだから、全然合ひさうにもないのに、何ういふものだか善く意氣が投合たのねえ』
『貴女は善く優秀なすつたから、私何れだけ助けて戴いたか知れなかつたわ。菊枝さん、貴女は理想通りに家庭をお作んなすつたでせう？』
『いゝえ、彼んな事は學生時代の夢ですよ。併しね、露子さん、私の良人は比較的に澹泊な氣ですからね家庭の事は私に委せつ切で、些とも干渉しませんの』
『好いわねえ。貴女は幸福よ。だから彼んな可愛い坊ちやんが生たのね』
『おほゝゝゝ、何んな事ですか、一寸先は黒暗ですわ』
『で、あの、餘り立ち入つた事を伺ふやうですかね』と、露子は眞赤になつて『旦那樣はお交際やなんかで、定めてお遊びなさる事がありませうね』
『いゝえ、判判官ですからね、其邊は大層謹直ですの、』
『まあ！』
露子は羨ましさに堪へぬやうに、ほつと息を吐いて『ぢやア、お宅にもお樂しみがあるんですか、』
『樂しみと申しますと、碁とか、謠とかの、樂しみですか』

『いゝえ、あの婦人の――』
『露子は眞赤になつた面を、深く〳〵落して了つた。
『おほゝゝゝ、其んな事を致しましたら、私だつて默つちやア居りませんわ。良人だつて一通りの學問はして來たのですから、まさか不道德な事をして、百年の悔を貽すやうな、愚な事も致しますまいし、私にしても其んな不德義な人に、好んで弄ばれては居られません。實際ですよ』と、快濶に笑つて居る
露子の色は漸次に蒼くなつて、眸からほろ〳〵と淚を落して居る。
『華族方には昔しからの作法がございますから、お家の憲法で物が極つて居ませうが、何うせ私達の生活と申しますと、書生が新に世帶持ちになつたまゝですから、多少道樂をして見たくつても、爲れば後に拘はつて參るので、據處なしの方正かも知れませんの』
『いゝえ、其んな事はありますまい、互ひに温かな愛があつて、意志が疏通じてさへ居ますれば、何んな家でも圓滿に參る筈ですよ、菊枝さん、貴女、旦那樣を大切にしてお上げなさいよ』
『は、多謝う。此んな事を言ふと、私が生意氣に亭主を敷きでもするやうに聞えますがね、私決して其んな氣はないのですよ。露子さん、何卒御安心なすつて下さいな』
『眞個に貴君は羨ましいわ』
露子は帶の間を搜つて、刺繡のある白帕を採出し、密と面に掩つたのである、
『あら、可厭ですわ。私また貴女がお羨ましいと思つてますの』
『おや、誰から其んな事をお聞きなすツて？』
『だつて、水谷川伯爵の事は、誰でも評判するぢやありませんか。新聞にだつて、鐵中の錚々だとか、華

族中の俊髦だとか、必然お名前の上には、冠詞を着けるでせう、非常な才子で、非常な精神家だつて言つてますよ、

『私は其の評判に結婚したのですがね』と、忍びやかに洟を啜つて其のまゝ後の句が出ないのである、

『評判に結婚したなんつて、好い事を被仰るわね、今に何でも公使におなんなさるといふぢやありませんか』

『夫れが貴女、羨ましいの？』

『羨んだところで何うなるものではないのですが、私全く貴女の爲に懌ぶんです』

『もう澤山？』と、露子はくるりと脊後を見せて、身柱の脱髪をそよ風に動かして居る、

他に羨まれた項毛は、白い頸項に判明と三脚を曳いて居る。細い頸、滑らかな肩、美人の生命をこの二つに備へて居る露子の、思ひ做しだか太く痩細りて、頸は愈長くなり、肩は愈窄まりて、美といふよりは貧相に近くなつた、菊枝はかくと見て一時に胸が塞つて來る。

『露子さん、水谷川伯爵は貴女をお愛しなさらないのですか』

『何故？』

『何故つていふ事はないんですがね、貴女は大變御心配がおあんなさるやうですから』

『私其んな風に見えますの？』

『だつて荻野さんはもつと快濶な方でしたわ』と、故意と笑ひ聲をして、沈と其の動作を瞶めて居る。

『其んなに陰氣になりましたかねえ、考へ込んでばかり居るもんだから』と、露子は堪へ難て兩手で手帕を面に宛てる、

『貴女、もう私親友とは思召さなくつて？』

『何故其んな事、被仰るの？秋田さん』

『ぢやァ貴女被仰つて下さいな、貴女の苦勞なら分けてしやうぢやありませんか』と、怨みでもするかのやうに、つんとして下目に見る。

『貴女はいつまでも優しいのねえ』と、露子は、遂に嗚咽つて、菊枝の膝に泣き臥したのである。

琴瑟相和せずして、家庭に一種の暗流があることは、菊枝も推測を下しえたので、露子に對する同情は一層深く動いて來る、才を抱いて才を衒はず、婉雅に貞淑に、毎に級友の儀表となつた露子を、此のまゝ陰鬱に沈湎めて、不治のヒステリーにして了ふのは、所詮菊枝の忍び得る所でないので、種々な方面から問を設けて、其の原因を質すのであつたが、露子も遂に親友の厚情に動かされて、生家の母にも秘めて語らなかつた中冓の眞相を、惴る惴る語つたのである、

併し、夫婦の意義を根本的に誤つた華族の家庭としては、水谷川家の後園も別に奇とするに足らぬであらう、要するに、夫婦の間には眞の愛がなく、唯だ外形の樣式だけを備へて居るに過ぬ、伯爵は同族中に於て、輿望を荷つた人で、新教育もあり、大理想もあり、抱負もあり、經倫もあるが、一歩後園に足を投れるとも尋常の華族となつて、露子を娶る前より蓄つて居る愛妾と戯るゝばかりでない、花卉を交換ると等しく、眉目淸き處女を弄そんで、靦として恥る色がなく、外にも一二の藝妓に關係を有て居る、それがために露子は虛禮の上に空しく威嚴を與へらるゝばかりで、曾て一日の安心を得たことはない、加之晩近新たに寵を傾けて居る妾には、初て男子が出生した。それを世子に立んために、官を僞つて露子の嫡出として戸籍に登錄したのである、理想のある露子には、いかにも周圍の壓迫に堪へられぬといふ、私はも

う精神的に墓の人となつたと云つて居る。菊枝もともに泣くより外はない。

『露子さん、貴女も御不幸ですけれど、水谷川さんは大變に御不幸ですわ』

『何故水谷川が不幸でせう、何でも自分の思ひ通りにして居ますもの』

『だから御不幸ですわ。貴女のやうな秀才の夫人がありながら、其れに頼つて清い御家庭をお作りになる事が出來ないで、生涯人間の眞意義を知らずにおしまひなさるのですからねえ。是れほど不幸な事はございませんわ』と、菊枝は莞爾と笑つた、

其の笑ひに腹の底を攪亂されるやうに感じて、露子は太い息を吐く、

『ぢやア一般に舊華族が不幸でせう?』

『廣義く解れば爾もなりますね、貴女にはお氣の毒樣ですけれど、——』

『全くですわねえ。私、一家の收入を妻が知らないやうな家庭には、必然眞の夫婦はないだらうと思ひますわ、』

『おほゝほゝ。して見ますと、足るの足ないのと、毎月押問答をする私どもの方が、風向が佳くなるのですね』

『貴女、四谷の鮫河橋御存じ?』

『鮫河橋ですつて?』と、菊枝は意外な話題に驚いて二の句は繼げなかつた。

『私今も視て來ましたの。夫婦親子の眞情といふものは、人生第一の光明ですわねえ。菊枝さん、私何にも望まないわ、一日でも彼わいふ處へ住んで、蜜のやうな夫婦の情が嘗めて見たいの』と、懵乎として夢路を辿るらしい、寂しい脣邊に微かながら笑ひが見えた。榮は侍女に手を牽かれて、勢ひよく入つて來た突如母の膝にかゐぐ上つて、手を懷にさし入れるのであつた。



理想と妄想

法學博士　松崎藏之助

當時は何につけても理想と云ふことが流行語となつて、例へば、理想の社會とか又は理想の家庭とか若くは理想の生活とか、その他萬般の事に就て此語が流用せらるゝのみならず、甚だしきに至りては男子は理想の妻を娶らんと夢み、女子は理想の夫を迎へんと期して居るが、是等はみな空中の蜃氣樓と云ふべきもので、約言すれば妄想である、決して理想など云ふ結構の名稱を冠すべきものでは無いのである、これは理想なる語の濫用に過ぎぬのである、

一體理想と謂ふものは實現せらるべき筈のものでは無い、然るに之を實現しやうとするのは根本的に理想を誤解して居るのである、何故なれば、現今我國に於ける女子一般の胸裏に描いて居る理想（もし云ひ得るとすれば）なるものを通觀するに、間々一二の例外はあるが、それは姑らく置いて先づ世間普通に於ける女子の心裡を洞察すれば、既婚者と未婚者とを問はず、總て自己の要求する所のものは不服なくして唯々諾々するやうな男子を以て理想の夫として居るやうであるが、之は決して理想の實現と云ふことは出來ぬのである、若しも是を以て已れが理想の實現とすれば男子は甚だ迷惑の位置に立たねばならぬのみならず、餘裕のないものは夫が爲に家産を傾けねばならぬ事となるのである、

言ふまでも無く男子といふものは、常に外に出て働くもので、女子は内に在りて家政を整理して小兒

を育てたり下婢を監督したりなどして内助に力を致すべきが本意である、故に若しも夫が假りに月給取であるとすれば、その收入より打算して支出を節すべきは勿論、必ず此中より幾分の貯蓄をなして不時の所要に備へておくやうにせなければならぬのである、然るに世の中には皆といふではないが、往々收入にはお關ひなく無暗に自己の欲する所のものを購めてしまつて、月の半ばにならないのに最早家計にも差支へを生ずると云ふことに立ち至り、此の場合に差し迫ると夫に説いて借財せしめる、この借財と云ふことは最も人生の愧づべきことである、併し先頃の洪水のやうな不時の天災や地變のために家財を亡失したとか、或は火災のために一朝資產を烏有に歸したと云ふやうな場合は兎も角として、平生それ相應に收入のあるにも拘はらず、毎時も借金政略で家計を處理すると云ふは、畢竟するに主婦たるべき者の不注意に歸因するので、平たく云へば遣繰が惡い、身上廻しが下手なので、即ち理想が低いと云はねばならぬのである、

即ち理想といふことは、今チヨツト適當の語を見出さないが、古書に、その志を高尙にして王侯に仕へずと云ふ語がある、まだ此語は十分理想の意義を發揮するに足りないが、較それに近いのである、且らく之を標準として前例を照し來るときは、實にその隔りは千里萬里でないことが明らかに分るのであるそれは何が爲であるかと云ふに、前にも述べたる如く妄想であるからである、

假りに理想を實現し得るものとして、前の家政の遣方を見れば、何れの點が理想であるか、若しも借財をしても其日々々を過しさへすれば宜いかと云ふに左樣でない、何ぜなれば、自己の慾望を充しさへすれば家計の不如意には關はぬ、足らぬ所は借財すれば用が足りると云ふやうな理想は無い筈である、况して借財と云ふものは人間の尤も耻づべきものである、此の耻を愧とも思はぬやうでは人間の價値は零であると云はなければならぬ、と云ふものは妄想

の雲を以て理想の月を蔽ひ隠して居ながら、尚も其を理想と誤認して居るからである、

前陳の如く理想は決して實現すべきものでは無いのにも拘はらず、強て之を實現しやうとして益々妄想を逞うするものから、歩々實務に遠ざかるのみならず、知らず〳〵横道に迷ひこみ、果ては日本女子特有の美徳までも滅却してしまふ事になるのであるから、宜しく之を取違はぬやうにせねばならぬ、

可愛い子には旅をさせ

伯爵　松平直之

この夏は、濱名湖畔へ子供等を避暑せしめた、その歸りが例の大水で、三保の松原へ山の如く材木が漂流して來る、鐵道は破壊して、小山山北邊も風景どころの沙汰でない、そこへ來ると、奴婢を連れない旅中のことであるから、大きいのは小さいのを負ふのもあり、又手をひくのもあり、小さいのは大きいのに便つて、互ひに助け互に便るといふ、兄弟間に美事が演じられる、家庭にあつても、常にその心があつたならば、誠に美しい事であるが、さてさうは行かない、難儀をしてから起つた賜物であるから時々子供等に旅をさせて、艱難の味を嘗めさせ、この間に起る美しい心を養成したいものである、この旅をさせるには、奴婢を伴はせては、家庭にをるも同じことであるから、兄弟姉妹か同族か、同じ資格のものに限る、

而して得る利益は、自然宿屋に泊ることになる、隣座敷は何處の誰とも知らない人が居るのであるから、所持品を盗られるやうなことがあつてはと、戸締りにも注意する、着物なども脫放しにせず、それ〳〵疊んで戸棚の中へ入れるとか、行李へ仕舞ふとかして、相當の注意を拂ふ、これがもし家庭であつたならば、戸締りの心配もなければ、着たものは脫放しで、さうさせまいと思うても、奴婢がついて居れば、手を束ねて見ても居られぬ、またそれを干渉

しさせるやうでは面白くない、旅にあれば自然にこの注意が拂はるゝのであるから、旅中に於てこれ等の注意心を養成するやうにしたい、その上に至る所の地理、人情、風俗等を見聞して、大に知見を廣くすることが出來る、而して予の子供等に旅をさせたいのは、後者の知見を廣くする爲より、前者によつて得る、第一友愛の情を深くすること、第二他人に對する注意、第三事物整理の念、これを旅中に求得られるゝ爲である、旅戻りの他愛もなく、よく眠られると見ても、旅中に於いて、如何に氣を遣ひたるかを知られて、可愛い子に旅の難儀を試みさすることの、有益なるを感ずるのである（三分間茶談）

しのぶ草

小川直子

其四　軒の紅梅

斯くても猶幸三はつれ〴〵なる庵の中に日を送り秋去り、冬たつ頃とも成りぬれば、いとゞ淋しき山里は、窓うつ時雨の音ならで、ことゝふ人もなき宿に、あるかなきかの窓の中より、うつろひ行く梢を見ては、人の心の染み易きを想ひ、老木の松の霜に堪へたる緑を見ては、此操こそ武士の鏡とすべき物なりけれと、見るもの聞くものにつけつゝ、感ずる事のみ多かりけり、かくて月日の重り行くまゝに、謹む心もおのづからゆるびやしけむ、ある夜例の近きあたりの親しめるどち問ひ來し折、月あきらかに霜さえ渡りて、心ゆくまゝに、夜も更けわたり、はたあたり靜けき山里なれば、うしろの山にのぼりて遊びつゝ、唐歌うたひなどしけりとかや、此事誰がいふともなけれど、壁に耳あり、石の物いふ習ひにて、上へきこえければ、重ねて御しかりを蒙り、父一方も締方不行屆の廉をもて、徘徊止とぞなりにける、此時一方たはぶれに、

　御咎はみな一方へかたまりて
　　やがて五箇から呼びに幸三

など（五箇とは配所なり）口ずさびつゝ打笑ひて、親子諸共かきこもり、桐火桶手ならすより外のわざこそなかりけれ、斯くても新玉の年のみは立ちかへり來て、文久三年亥正月ともなりにけり、あはれ春を迎へけれど、親子もろとも咎の身にしあれば、みしめ繩引はへむわざもなし、心ばかりに酒汲みかはしければ、幸三、

孤窓座識惟新旦　身自幽囚已二年
頼任慈親玉膝下　心猶萬里不繫船

と口ずさびて、父も心安らかに暮しけるが、八日午過ぐるころ、隣なる瀬尾劍北とふらひ來り、これはたすぎつる月夜諸共に遊びける友人にて、共に御咎を蒙りし人なり、此人の語るには、我等は去年の暮御ゆるしを蒙りたりといへば、悦ひを述べたり、此時一方紅梅のゑみ初めて、匂ひやかなると、五葉松のみどりうるはしき盆栽をもていでゝ、例のたはふれに、

紅梅のはなも一輪咲きいでゝ
親子ゆるしの御用まつかな

これを聞きて、劍北も打ちよろこび、例の數盃をかたぶけ居る所へ、村方役場より、一方儀御用有之とて呼びたてられたり、何事ならむと急ぎ出行きたりしに、是迄の徘徊止を指許され、はた悴幸三儀、明九日御郡役所へ御用有之候旨申來れりとの申渡しありけるまゝに、御請をして立歸り、幸三に斯くと告げゝれば、幸三いふやう、御咎めを蒙りてより百日目になりぬと、劍北も共に喜ぶ事なゝめならず、猶美肴などまかなひて、打さうどきつゝ、數献に及び、はた鶉籠の掃除よ、何くれといそしみあへり、妹のすみ子などもいたう喜び、あくるも遲しと待ち居たり、さてあくれば疾く起きいでゝ、乘輿にて御役所へ行たりけるに、

鶴來村醫師小川一方悴
幸　三

右幸三、御樣子有之、不締無之樣申付置候得共、今般指宥候、就ては幸三御國恩の程を存じ、上書仕

義に付、今後御用の趣被仰候哉も難計、依て遠路
徘徊等、猥りに不仕、身體不愼無之様申渡、請書
取立可指出候、以上

亥正月八日　本多播磨守印

津田太郎兵衛

斯く御ゆるしのありければ、幸三は所々方々へ御禮廻し、夫より金澤表の知己をも尋ねて歸宅せしに、一方は親心に嬉しさのいはむ方なくて、近き渡りの友人ども招き、例の盃とりいでゝ、心のどかに祝ふ折しも、御郡役塲より、御指紙到來、打開き見れば、

其方儀御用有之候條此手紙着次第役所へ可
罷出候、以上

亥正月十日　津田太郎兵衛印

小川幸三殿

但し上下並に大小共用意可罷出候事

とありければ、十日朝とく役所へ出頭せしに

鶴來村儒醫
小川幸三

御切米
一參拾五俵
但し五斗俵

右幸三儀定番並に被召抱、御宛行如斯下贈
候段、御家老今枝内記殿より被仰候也

亥正月十日　津田太郎兵衛印

小川幸三殿

かゝれば父一方は夢かとばかりに打ち喜び、酒宴の用意をとゝのへむといそしむ所へ、はや其よしをきゝつけて友人達、我も〳〵と問ひ來つゝ、賑はしくぞなりにける、普爲聽紙面も皆々にて認め、二百四十通差出したりとぞ、これより住居は金澤城下馬喰町の横に定めて有けるなり、此後九月廿三日に妻（此時に妻とあるは、おのれの事にて、當事名は昌といへり）を迎へけるが、替りたる性質の男なりければ、里開きとかいふ時などにも、土産物には諸葛亮の出師の表の掛物一幅、並に酒一樽もたらして行けり、

其五　雁の音づれ

文久三年亥二月十一日、中納言の君御上洛わらせ給ふとて、幸三も供奉の中に數まへられけるが、先づ行きて彼地の事情をもさぐり見よとて、改方足輕十五人隨はせ給ひければ、かしこみつゝ此人々に引具して、六日朝まだき出立つに、親しき友どち、我もくとうまのはなむけせむとて來り、そが中には邊見文九郎、村山三郎兵衞、櫻井太郎二などもわりて、雲霞のごとわまた送られけり、斯くて中納言の君は、十一日金澤の御城いでたゝせ給ひ、幾日目の事にて有けむ、近江の堅田に御泊りわり、此時幸三御旅館迄御迎へがてらに來て、此程よりさぐり出でたる京師の形勢つばらに聞えわげ、頓て京師に立歸り、何くれと勤めたり、中納言の君京師にとゞまらせ給ふほどは、西に東に諸藩の間をはせわりき、萬聞きいでたる事どもは殘らず聞えわげ、二月晦日には御參內と定まり、まうのぼり給ひけるに、天顏を拜し、御盃を賜はりたまひて、萬に御首尾能くすませ給ひ、幾程もなく御暇賜はり歸らせ給ふ、此時幸三には、猶殘り居て時の勢ひ如何成り行くにか、能くく見定めて後歸國せよとのたまひければ、幸三は京に殘り居けるに、三月十日に又立ち歸れと仰わりて歸りぬ、其後にも萬にいそしみつゝ日を送りけり、此頃に至りて、福岡惣助、野口之布等ますく勤王のわげつらひを稱ふ、されば永原恒太郎、不破富太郎、大野木克敏、同仲三郎、高木有制、はた廣瀨政敏、青木新三郎、福岡文平、石黑桂三郎、岡野外繼四郎なども其中に加はり來て、一群の黨をなせり、されば夜ひるのわかちもなく、彼方此方に集ひつゝ、世のため藩のためにと心を盡して謀りけり、かゝる折しも、將軍遂に東に歸り給ひて、諸國侯伯の君達を召しわつめむとし給ひける時、世嗣の君をめして總裁職とし給はむと、ひそかに其意を通じ給ひけり、藩士は素より佐幕の人々多かりければ、其意を奉じ、世子の君を東にゆかしめ奉らむとひしめきつゝ、內意も大に定まりぬ、爰に不破富太郎は世嗣附の大小姓なりければ、大にこれを憂ひ、天のし

たの大事、はた藩のためいみじき大事なりと、同志のともがら語らひ合せて、心をつくす事大方ならず、さるからに各上書して至らざる所なかりしとぞ、これによりて世嗣の君の東に趣き給ふ事は止みぬ、これより後勤王佐幕とて、藩のあげつらひふたつに別れて、常に軋りあひたるを、世嗣の君には常に同志の者共のいふ所をうべなりときこしめして、不破富太郎、永原、堀などの策を用ひ給ひければ、同志の者もいみじう喜びて、心をつくす程に其の冬に至りて、世嗣の君朝廷の命に應じ給ひ、京師にのぼり、弘く天の下のため力を盡し給はむと、其意をのたまひ出たるは、長州侯の寃を解き給はむとなりけり、されば其事ねぎ給ふべき建議書を幕府に上り、京師にのぼり給はむとありけれど、勢ひを得たる高貴の藩士達、例の佐幕方多ければ、拒む人のみ多くて、いと難かりけれど、同志の人びとの協力強くて、遂にこれのみは遂げたりき、此事不破の傳につばらかなれば、爰には省きつ、其またの年朝廷しば〳〵命を下し給ひ、兩君を召しけれど、皆病をもて辭し給ふ事重りぬ、されど九月にまた命ありければ、世嗣の君ふるひて京師にのぼるべしと、いといたう勵みのたまひつれど、老臣だちの拒むに、御心のまゝならず、此黨人等慷慨する事大方ならずしていへるやう、天下斯くのごときには、假令朝廷より召さるゝことなくとも、我より進みて朝廷の御ためには、御身をも惜まずつくし給ふべきに、しば〳〵の御召さへあり、これ千歳の一遇なれば、空しく過し給ふべき折かはとて、おの〳〵上書を奉り、はた御近習頭などにつきて、此事聞えあげ、千秋藤馬といふも、亦尊王の大義を聞えあげゝれば、世嗣の君には素よりさる御志も深うおはしませば、いよ〳〵益々勤め勵まむとおぼしたちて、あまたの封書ども認め給ひ、大野木克正にもたらし、京師にのぼせ給ふ、此時猶も京師の事情をさぐれよとて、幸三、高木有制、福岡文平を先づゆかしめ給ひければ、三人の者共は諸藩の有志らに交りあまねく、朝野の事情を探り、い

たう勤めたり、よりて京師に在りし駒井忠勝も、常に其中に加はり、くさ〳〵の事情もあきらかなりければ、三人の者ども復命して聞えあげゝるは、方今天皇安き御心にもおはしまさで、よるひるおぼしなやませ給ふことしるければ、いかで知らず顔にて居給ふべきと、至らぬ隈なう聞えあげゝれば、漸々世嗣の君の京師にのぼり給ふ事定りて、四月十八日金澤を立出で給ふ、供奉には奥村榮通（伊豫守）、横山隆淑（外記）、側用人山森權太郎、近習頭堀政材、千秋藤馬などのともがらなりき、勤王同志の者とては僅に不破富太郎、青木新三郎の二人のみにて、其外は皆國に殘りければ、心ゆかぬさまなりき、かゝりければ世嗣の君にも萬御心にまかせぬ事どもおはしつらん、これのみは千歳のうらみ、いかゞはせむ、されどこれはた世の習ひにてすべなければ、幸三等は金澤に殘り居て、供奉せし同志の人々とは、鴈の玉づさのみはしば〳〵音づれ、志を通じ、鋭氣を傳へて居たりけり、其頃永原恒太郎君は、慷慨の餘り

にや血を吐きて遂に黃泉の客となり給へり、幸三の愁傷一方ならず、されど高木野口などは朝に夕に問ひみとはれみ、京師の形勢を覺束ながりて、日を經る折しも京師より知らせに、長州藩の人々恐多くも蛤御門に發砲せり、はた世嗣の君には京師を出でゝ近江まで引取り給へりとあり、幸三これをきゝて、何か仔細のある事ならむ、されどもし事の過ちもやいで來らむ、憂ふべきわざなりと、一書を藩衙に投げいれ置きて、京師に趣き、萬に謀らむとぞしたりける、折ふし高木野口を始めとして、石黑圭三郎、谷村直なども來あひて、何くれと語らふほどに、歸山梅太といふ人も音づれて、諸共に盃をめぐらし、時をうつすに、幸三今日の事、天下の大事なれば、いかで束の間もいたづらに過すべきとて、出でたゝむとせしかば、石黑、谷村、歸山のみたりも諸共にとて打連出づ、此時幸三のうたひしは、

夢駭二秋風一眠不レ成　酒邊拂レ袂狂書生
義膽一片未二全盡一　獨負月光鳴劍行

かゝるに歸山は頓て道より歸り來て、其後は問ひ來し事もなかりけり、誰が戯にいひ出たりけむ、

ふら〳〵とひとり道より歸山

梅太ともいふにげたともいふ

おのれは其折ひとり庵の中に留守をして、世にいひあへる事ども傳へきゝつゝ、案じ暮しけるが、高木野口のふたりは、常に何くれと力を添へて居られたり、ひと夜伏戸に入りて枕につけども夢も結ばて、兎や角と思ひわづらう程に、夜半すぐる頃ほと〳〵と柴の戸たゝく音のしげければ、立ち出で、誰ぞやと問ふに、谷村なりと答ふ、如何なる御用ありてかゝる深更に來給ひけむと問へば、懷よりひとひらの玉章をとり出されける、開き見るに高木野口へ宛たる幸三のふみなりけり、種々細やかなる中に、此金子君方にて至急間にあはずば妻に傳へてよとありければ、谷村を庵の中にいざなひ入れ、おのれは姉なる啓子刀自の方に行き、しか〳〵の事なん侍る、黄金少し貸してたびてむやといひけり、姉君も幸三の國の爲めにつくす心の中を知れる事にしあれば、頓て黄金若干をとりいでゝ與へ給へり、歸り來て谷村に渡し、酒などもていでゝねぎらひければ、谷村は急の事なればとて、其まゝ立戻りに出でゆきけり、かゝれど姉君とても、其背の君の江戸に在る留守なれば、おのれはつとめて衣服など賣拂ひて、其黄金は返しぬ、少しとこそいへ、其頃にてはやゝ大金なりけり、

難問題に處するの法

橘　終子

何人か世の平和を求めざるものあらん、平和は人の天性にして順當なる天理なり、故に三歲の童子といへども、平和にして樂しき時は相喜び、不和爭論を生ずれば必泣く、老少男女を問はず、皆平和を得んことを望み、父子兄弟は平和に相樂しみ知己親友は平和に相親しみ、社會の交際より外國他鄉人間の

交際に至るまで、皆平和を望み、不和を避けんとするは人の常情なり。然るに天に疾風暴雨の定なきが如く、人間相互の間にも、何時如何なる困難苦痛の問題を生ずるかを期すべからず。平和を好み平和の生活に馴れたるものは、此の僅なる出來事に對して多くは之を解決せんとの勇氣なく、只いかなる方法を以てか之を避け之を逃れんとのみ慮り、之が爲に其言を左右にし、其節義を變じ其禍を人に嫁して、己れ一指をも之に染めざらんと謀るもの、滔々として皆是なり、あゝいかに片腹痛きふるまひに非ずや、かくの如くにして己れ一人禍を逃れたりと思へど、これが爲に猶數倍の禍を人に與へて、其出來事を大にし、己れは僅に積極的の禍を逃れしても尙數倍の消極的禍を招き、名譽を損じ、道德を傷ひ、吾が人格に對して缺ぐべからざる信用を失ひ、到底公人として人と交る價値なきものとせらるゝなり、故に余は衆人が平和を願ふ希望を可とすると同時に、難問題に處する決心を平生平和の裡に養成せんことを切望するなり。

小事に於て吾が責任を思はざる者は必大事に於ても其責任の何たるかを知らずして、人の嘲りを貽すものなり、平和の問題を處するに親切ならざるものは、必困難の問題を恐れて禍を人に嫁するものなり吾等はつとめて平生よりかゝる不親切不信義の人を避けて、之と共に事を謀るなからんと思へど、先づ吾が一身にふりかゝり來る困難を解決する丈の思慮と知識と責任と信義とを知るものにあらずんば共に語るに足らざるなり。

見よ、小人のいかに禍を人に嫁する事の巧なるかを、我が行ひし處置に對して、一人が之を憤ると聞くや、忽ち言を設けて我はさる事をなさず、吾は固より之を望まざりしも某がかくせしめたり、其發頭人は誰彼なりと、其席にあらぬ人に罪を嫁して、己れ一人よき顏を作り、甚しきは其席上にある人にすら無き罪を被らせて耻づることを知らぬ輕薄なる輩あり、正義の士よりこれを見れば、實に人間として

視る能はざるふるまひなり、若し此の時此の人が其咎を己れに引きて、吾が處置の誤れるを謝し、直に一良法を設けて、善しこれに處せば、事一身に留りて、よく禍を轉じて福となすを得べし、さるを計此に出でず、智慧此に及ばず、信義此に無くして其己れに引くべき事を、轉じて他に開かんとするが故に、禍は益大となり、且其累を人に及ぼすに至る。

又見よ、己れ之を知らざるに、意外の重大なる出來事、我が一身に關する事あり、此の時若し己れ之を知らず、己れ之に與らずといひて、之を避けんとせば、或は之を逃るゝを得べし、されど必他人は之が爲に苦しみ、不信不義の人として、交りを絶つに至らん。されば、たとひ已れは之を知らざりしにもせよ、其事己れに關係ある以上は、必ず一時の困難を忍びて、いかなる方法もて此の問題を處置すべきか、いかなる方法を用ゐて此の問題を解決し、人をも傷つけず、吾が名譽と信義をも失はずして、巧に禍を福に轉ずべき善後策を講ずべきかを熟考して其責任を全うするは、個人としても、はた公人としても盡すべき義務なるべし、智慧此に專にして計畫其よろしきに適はず、未だ手を下し難きほどの艱難てふものあるべきいはれなきを、智を用ゐること淺く、信義を重んせず、責任を思はずして、只無雜作に己れ一人この禍を逃れんとするが故に、事豫期に反して却りて混沌たる破裂を見るに至るなり、

故に平和は人の望む所たりといへども。難問題を處する注意と、よく之を解決する丈の技倆とは、平常事なき間より必養成すべきを忘るべからず、これなくして世に立つは、戸に樞機なくして盗人の害にあひ易きが如し、只其出來事に至りては千種百態、固より一々其方法を講ずる能はざれども、畢竟確乎たる信念を養成するに外ならず、信念にして動搖せずんば、恰も根底深き大樹が一陣の强風に吹きあらされても、只其枝葉を動すにすぎずして、風治まればまた雲霄に聳ゆるが如く、常にさま〴〵の出來事をよく解決するに足るなり、故に信念は、其此に至

る經綸を作る基礎たるべきものなれど、若し只これのみにて事を處すれば、恰も鋭刀兩斷のすさまじき手腕を見るのみにして、温き恩愛は未だ之を見る能はず、世上の出來事は皆其關係を他人に及ぼすものなれば、我一人手脚をふるうて事を解決すと雖も、他人之を悅服せずばいかで吾心を安んずるに足らん故に信念はいづくまでも堅固なるべく、情愛はいづくまでも温にして、事每に正義に向ひて進むべきことを忘れずんば、いかなる難問題も意外に解決し易く、其結果意外に良好となりて、よく人を悅服せしむるを得べし、一歩ふみ過てば險難危惧の地に陷らんとする場合にも、よく禍を轉じて福となすは只其方法の如何にあるのみ。

◎今秋流行の袷

暑さ寒さの堺目の彼岸も過て漸かに朝夕は肌寒く、袷が要り綿入の欲しくなる時も近づいたので此秋から冬にかけての流行の衣裳類を紹介しよう。

●色氣● 從來持合せた方は、兎に角、將來拵らへ樣と云ふ方は甚麼しても藍氣がかつたもので、同じ藍氣でも、若向は紫含んだもの若夫人は準お納戸、それ以上は鐵か鼠を加味した物に、一般の嗜好が向いて居る。

●模樣● は又も裾模樣に後戻りの姿で、江戶裾でも一兩年來流行した、一二種の花卉類を洒然と染上げたものよりも、彩色も濃く、模樣も大きくなつて居るが、之は一時全盛を極めた元祿や桃山の影響であるが、さりとて、彩色が多く且つ濃くなつたと云つても、濃厚染は流行らぬ濃厚にならぬ迄の何方かと云へば、洒然したものに限る所で差當つて實際の需要はと云へば、裾模樣五六分殘りが江戶褄と云ふ所であらう。

●紋● は一時一寸位のも用ゐられたが、今は八分乃至八分五厘九分と云へば、少し大き過ぎる位に思はれて居る。

●地質● は何時も變らぬ縮緬であるが、普通の縮緬も面白くないと云ふ向には、鶉縮緬、橘立縮緬抔と云ふ、山繭の糸をあしらつたもの、鶉羽二重抔と云ふ好みもある。

●縞物● は矢張お召で、縞柄は規則正しい格子抔はすたれ氣味で格子でも大小取交ぜざろもなくは堅縞に絣を加味つたもの、堅縞でも大名や千筋より撚がらみを加へたもの〻樣に井然としたものより何方かと云へば、朧氣のものが流行する、何にせよ流行の柄合と云へば、糸織でも、銘仙でも、其外總てがお召に依つて支配される程の大勢力がある丈に、柄も中々凝つたものが多い。

●お召のいろ〳〵●●●●●● お召の內でも、紋お召は令孃向獨占の姿で其他は縞も使へぬ、紋附でもないと云ふ場合に多少用ゐられる位であるが、お召にも橫に紡績を入た紡績入お召は、烏渡實物と見擬ばかりて、値段も眞物より五六圓安く、十二三圓乃至十五圓位で手に入るので、中流には最も多く之が賣行く、さうだが綾お召井筒お召壁糸織抔之に次で流行する。

●下着● は二枚袷の對下着といふのが、流行の骨項であるが、柄行染模樣に依つては、配合上地質は同じで變つたものも用ゐられる尤も令孃向の絣の下着は、友禪か華美な更紗に限られる。

昆虫の話

深井龍蛹

蠶　鱗翅目　蛾類

皇太子妃殿下御歌

限りなき御國の富やこもるらむ
賤が飼ふ蠶の繭の中にも

九重の雲上より下は荒村の賤に至るまで、すべて女性により親しまれて居る蠶は、米國人が「綿絲は王なり絹絲は女王なり」と云へる如くであります、世界中で此養蠶をする國は、西洋では法郎西、伊太利、東洋では支那、日本ですが、我が日本では毎年八千萬圓位の生産を致し、國庫歳入の大部をなして居ります、

蠶は保食神の死體に生れたと云ふ説は、古來より日本にありますが、實は太古支那から渡來したのです、西洋へは西紀五百五十五年、ローマ帝ジヤスチニアン治世に、二人の傳道師が内空の杖の内へ匿してコンスタンチノープルに支那から持ち歸つたのが初めの樣に思はれます、支那では四千年も以前から飼育して居たと云ふ事ですが、その原産地は南方アジアであると云ふ説です、現今では多少なりとも世界諸國に無い處はないのであります、

蠶には春蠶、夏蠶、秋蠶其他ありまして種類には赤熟、小石丸、白玉など頗る多いのであります、春蠶と申すは最も普通に飼はれるので、五月上旬に發生致しまして六月上旬には繭となるのであります、丁度桑の葉が燕口に開きます頃、蠶は卵から生れまして桑の葉を食べて生長します、一週間も過ぎると俗に眠ると申し、食物を取らないで靜止しまして皮を脱ぐのであります、斯く四回も脱皮を致しますと、此度は繭を營むやうに爲つて、長さ二寸許で肥つた體となりまして桑の葉なども隨分多く食べ、農家などでは此時に大食坊などゝ申すのでございます、それで約そ一週間も過ぎますると簇と申し藁や竹などで作つた巣へ入れて仕舞ふのですが、左樣し

てから三日か四日過ぎると美事な繭を造ります、尤も之は四眠蠶と申して最も普通な種ですけれども、支那などには三眠蠶と云つて、三回眠つて直ぐ繭を作る種もあります、

春蠶は、普通二十五日位で繭を作りますが、溫度を高くして九十度位で飼ひますれば、十五日位でも繭を作るのであります、

蠶兒の食物としては桑を主とします、「絹絲は桑の化身なりとは、全くなのですが、また、桑の他に柘、楮、萵苣、サルシフイー等の植物を食べます、

皎々雪を欺くばかりの繭は誰やらの
繰りいだす一縷の糸の光かな
月日の眼くらむばかりに

の絹絲を製する原料なので、すべて貴公子の衣服、ハンカチーフより、下民の珍とする品々は、此絹絲から織らるゝのであります、然るに近頃獨乙あたりでは、木質から人造絹絲を造ります、で我國へも輸入して居まして、ネキタイやリボンなどには隨分この人造絹絲があるのです、ですから充分注意せねばなりません、

繭は二週間許りの中に殺蛹所で蒸殺しないと、内から蛾が繭を破つて出ます、この蛾が卵を産みまして、蠶種紙を製すので、上州、信州ではなか〳〵隆んに行つて居ます、

女子と昆虫學

婦人と昆虫學などは、一寸何等の交渉もない樣であります、けれども之を知ると知らぬでは、家政の處理上自づから徑庭あるは、余を以ての論ではないのであります、米國などでは家庭昆虫と申して衛生や、厨房、盆栽などの害虫や益虫の說を、最も面白く書いた書物がいくらもある、また、コルネル大學のカムストック先生や、アムハースト農學校のフエルナルド翁などが、夫人や助手と夏期などに婦人昆蟲講習會などを開いて、家庭に關係ある昆蟲の事を說話する、概して男子の腦髓は概括的でありますけれども女子は部分的であるので、科學的研究には

適して居るが・從來は主に文學とか美術とかの方面にのみ趣かれ隨分成功した人もあつた、處が近頃は稍女子が科學的な研究をやつて來て、立派な科學者になつた者も少なくない、また、名は知れぬが、人の妻として夫を助けた者も少くないのである、「種の起原」と云ふ進化の論を以て有名なダーウキン氏は、平常妻君の實驗と草稿との内助によつて千古の大眞理を文字を以て公にした、獨乙の動物學者で遺傳論で有名なヴイズマン氏も、亦平生妻君の實驗調査に益されたと云ふ、前記のカムストック先生の著昆蟲全書の圖版は、すべて夫人の彫刻に成つたのである、此書が昆蟲研究家の無二の寶典たる亦所以なきにあらずです、



先頃ある新聞で「女醫は患者の衣服や風采などに注意するから、婦人は餘り好んで診察して貰ひに行かぬ云々」の文字を見たが、實際懸賞的にでも研究さして見れば、

必ず女子の研究者が緻密で正確な結果を得る、であるから女子とて此後、科學の方面で成功する事は、決して難くは無いのであります、

スタンホード大學やコロンビヤ大學など、米國諸大學では男子も女子も皆同じに教授するが、女子が男子と同樣に實驗もすれば、調査も採集もする、それで何事も所謂米國婦人的なるには驚かざるを得ぬのである、而して負ける嫌ひでアッソシエーションなどで討論もすれば演說もする、音樂も奏すれば舞蹈もする、で、面白く愉快の中に智識の交換をするのであります、日本の人は兎角理科思想に乏しいが、それでは迚も世界に雄飛する事は出來ぬのは、歷史を見ても知れるのでありますから、此際、女子たりとも充分理科思想を涵養して欲いのであります、で、すべての理科の中でも、昆蟲學などは最も適したものでは無いかと存じます、

奴隷を使役する蟻　膜翅目

古代の羅馬法に、奴隷は物件であるとしてありますが、現今では人類界に奴隷の存在を許さぬが、そこが昆蟲界だけに仕方がない、フォルミカ、ルフェスセンスと云ふ蟻は奴隷を使ふのである、それで奴隷が居らねば直ちに餓死して仕舞ふ、ヒユベルと云ふ人は、此蟻を三十疋許り集め、食物を充分にして奴隷なしに飼ひ、且つ蟻を働かせる爲に蛹や幼蟲を側に置いたが、遂に食物すら食べられないで餓死して仕まつた、そこでフスカと云ふ奴隷蟻を入れたが、フスカは直ぐ生殘者を養つて、食物を食べさせて蘇生せしめ、また、室を作つて幼蟲を養つたと云ふ事です、であるから女王（雌）王（雄）は少しも働かないで、たゞ働蟻（不完雌）が一生懸命に奴隷を捕へて、奴隷に食物を食べさせて貰ふことから、働かして貰ふことから、家を造ることから、すべて奴隷に一任して置くのであります、ですから一旦奴隷が無くなると、をめ〳〵餓死して仕まふと云ふ、誠に意氣地の無い死方をするものであります、

染色の話

島田琴糸

一口に染色と云つても、木に染めるのか紙に染めるのか、又は布帛の類に染めるのか漠然として分らない、が、今こゝにはその中の布帛に染色する事に就て述べるのである。

そこで布帛と云つても、是また木綿もあれば絹もあり、或は絹と木綿と交つた織物もあれば、毛織と稱するもの等の差別があるのである、けれども此には是等を總括して云ふものと心得て居れば良い、尤も中へ行つて區分してあるから、さう六ケ敷考へるにも及ぶまい。

染色のことを話すに就ては、まづ色の原素に如何なる種類があるかと云ふことは初めに知らなければならぬ、即ち之には鹽基性色素、酸生色素、媒染色素、木綿色素と大別されてあつて、是等を總稱して人造色素と云ふのである。

この人造色素の中で、マヂエン赤、サフラニン紅、アウラミン黄色は鹽基性色素に屬するもので、エオシン桃色、フロキシン桃色、インヂユリン鼠色、メタニルエロー黄色、ピクリック酸黄色等は酸性色素の部類に入るのである、而して木綿色素では、コンゴーレッド赤、コットンエロー黄、ダイアミンヴアイオレット紫、コンゴーコリンツ海老茶色等であつて、この色素に屬するものは、近年殊に發明されるから、その數も年々に殖えて來るのである。

何が爲に右のやうに區分するのであるかと云ふに同じ赤でも黄でも、その色素の成分に由つて多少染方に相違があるからである、即ち鹽基性色素および酸性色素に屬するものは、是を以つて直ちに木綿を染めることは出來ないので、如何しても媒染劑すなはち下染めをするものが要るのであるが、木綿色素は其名の示すが如く、元より木綿を染める目的で造られたものであるから、この場合には別に媒染劑の必要はありません、けれども直ちに其の溶液で染め

ると云ふやうな簡單な譯には行かないのである、乃ち之には染め付きを良くする爲め助劑と云ふものが必要である、その助劑には如何なる藥品を用うるかと云ふに、炭酸曹達、硫酸曹達、食鹽、硫酸亞鉛等の類であつて、之を色素の溶液の中に混ぜて用うるときは、木綿は是等の藥品の力に依つて十分に色素を吸ひこむことが出來るのである、併しながら、絹や羊毛等が、自分の力で吸收するやうに十分な譯には行かないのである、と云ふものは、即ち染め上げたる後までも、木綿の場合には未だ染めた液の中に濃い色が殘つて居るのでも分る、是といふは木綿が十分に色素を吸收することが出來ない結果であつて決して色素が粗惡なるための結果ではない、それ故に木綿の染色をする時は、差支へのない限り、染液を濃厚に造る必要がある、何故なれば、若しも稀薄の染液を用うる時は、必ず染液を浪費にする患ひがある。

染色に用うる助劑の分量は、色素の性質と染色の色合とに由つて樣々であるから、中々一言で盡すことは出來ないが、假りにダイレクトチーブブラックを用ゐて木綿の黒染めを行ふ場合には、生地の重量の一割、例へば、木綿一反の目方二百目とすれば、之が一割すなはち二十匁だけに相當する食鹽を、色素と共に溶解して用うるのである、又ジエーナスダークブルーを用ゐて、木綿の紺染めを行ふ場合にも亦前と同樣で宜いのである。

倘ほ染色に用うる分量に就て一二を示せば、コンゴーレッドで、木綿の赤染めをなす場合には、生地の分量の百分の五に相當する所の染粉を用うれば、必らず濃厚なる赤色が得られます、又コットンエルロー百分の五も濃厚なる黄色を染め出すもので、コンゴーコリンツも百分の三用うれば、美はしき海老茶色を現はすものである。

右の染色には、色素の溶液に百分の十の硫酸曹達と百分の五の炭酸曹達とを助劑として混じ、兼て精練して置いた木綿の生地を浸けて、大約一時間ばか

り煮てから後、之を取り出して絞り、再び稀薄なる炭酸曹達の溶液にて洗ひ、最後に淸水にてよく濯ぎ絞りて後乾かすのである。

全體木綿色素の多くは、餘り丈夫なものではない即ち此色素で染めたものは日光にも弱く、又酸やアルカリにも弱く、石鹼にも十分堪へぬものである、それ故に木綿織物の中には、往々甚しく變色するものがある。

鹽基性の色素で木綿を染めるには、前述の如く媒染劑が要るので、それには先づタンニンの稀薄なる溶液を造つて置て、その中に木地を浸し、およそ一夜間そのまゝとなしおき、翌朝に至りて十分によく絞り、更に別の器に溶きたる吐酒石の液に浸して、纎維すなはち糸筋の中に、不溶解性のタンニン酸アンチモンを作るので、之が即ち一種の媒染であつて此のタンニン酸アンチモンの力に依つて、木綿が能く色素を吸收して染まるのである、但し色の濃淡はタンニンの分量と、其中に浸けおく時間の長短とに依つて加減が出來るのである。

すべて染め上るには、先づ適量の染料を濃く水に溶かして置て（物によりては熱湯にて溶解することもあり）一部分づゝ順次に染浴（染浴とは、鍋又は釜の中に淸水を沸したるたるものを云ふ）の中に加へて徐々に染め上げるのが肝要である、若しも一時に染料を加へる時は、木綿は絹と異つて色素の吸收が速かであるから、染色に斑が出來る恐れがある。

媒染色素は、甚だ堅牢な色素であつて、盛んに木綿の染色に用ゐらるゝが、その染め方が少しく繁雜であるけれども、之を用うると否とは染め上りに大層の相違があることを忘れてはならぬ。

次は絹であるが、この絹糸は繭より得るものであることは、更めて云ふまでもないが、我國では此養蠶をするのは甚だ古代よりの事で、奧州地方は夙に養蠶を以て世に知られて居たが、今に至るも其名は甚だ高い、そして信州上州等と共に我邦第一等の養蠶地である、殊に近年に至りては、養蠶業は全國に

擴まつて、各縣共に養蠶せぬ所は無い、故に每年我邦の農家が之が爲に穫る所の繭は夥しいもので、常に三百萬石を上下して居るのである。

　この蠶には、野蠶と家蠶の區別がある、野蠶と云ふは、山野に自生して繭を作るもので、天蠶柞蠶の類を云ふのである、勿論是等とても產業の目的で飼育する事は出來るが、家蠶とは事變りて原野に放つて飼養せなければならぬのみならず、其食料も桑を用ゐずして柏、櫟、柞等の葉を與へなければならぬのである。

　家蠶と云ふは、農家が桑葉を與へて屋内に飼養する蠶を指すのである、之も元は山野に自生したもの即ち野蠶であつたと云ふことである、家蠶の繭は色が殆んど黃と白との二種に限られて居る、而して肉は厚くして野蠶に比すれは多量の糸を引出すことが出來る、之は農家が長き歲月の間、研究を積み改良を加へた結果であらうと思はれる、尙ほ家蠶と野蠶の相違の點は多いが、茲には必要を認めないから略して置く。

　絹糸は蠶の軀中にある間は、水飴のやうにドロドロしたものであるが、蠶の口より體外に出で、空氣に觸れて凝固したもので、元來二筋が合して、一筋となつたものであるから、今一筋の絹糸の斷面を顯微鏡に照して撿れば、紡錘形をなして居て、中央の接合した部分を明らかに認むることが出來るのである、又絹糸は如何なる成分より成るかと云ふに、糸素ゴム質、蛋白質、臘質、樹脂および脂肪質などより成つて居るのである。

　凡て濃厚なる硫酸、硝酸、鹽酸は忽ち絹糸を溶解するものである、けれども極めて稀薄なるものは、敢て損傷するの虞れはない、又亞硫酸は絹糸を晒すに用うるものであるが、之と同じく醋酸や酒石酸のやうな有機酸も、極めて濃厚なるものゝ外は絹糸を害せない。

　此絹糸を染める場合に、色素を吸收するのは固より外部よりするものであつて、色素の性質、染色す

る時間の長短、染浴の温度の高低等に由りて濃淡を生ずるものである、即ち若しも色素の溶解性が少なく、染色の時間が短かく、染浴の温度が低い時にはその外圍ばかりが染色せられて、中心には少しも浸みこまぬものである、されば今これを横に斷ちて檢ぶれば着色の輪を見ることが出來るのである、之に反して染色の時間が長く、温度が高く、加ふるに色素の性が溶解し易ければ、必ず



絹糸は外部より中心まで染色せらるゝものである。

元來絹糸は云ふまでもなく、動物性のものであつて、彼の木綿の如く植物性のものではない、而して木綿には種々の雜りものがあるから、從つて夫等を除かなければならぬのみならず前陳の如く媒染をしなければならぬが、絹糸は其所へ行くと手數を要せぬのであるが、併し染色の前に精練即ちネルと云ふことが必要であるが、この練り方

の出來の善いのと惡いのとに依つて、自然染色して後の光澤に影響があるので、若し練が惡ければ光澤も冴えないので之と反對で練りが良ければ光澤も鮮明に行くのである。

之を練るには稻の藁灰を用ゐてするのであるが、之は初歩の方には少しく困難の事であるから、何れ後日を期してお話しすることゝして、玆には其練れの善いのはキユー〳〵と云ふ音を發することゝ、染色には媒染劑を要しない事とに止めておく。

馬追蟲

今西桃里

『馬追虫つて云へば全體が草色で、薄い四枚の翅がある。それは〳〵やさしい女性的の虫であるが、でも頸の處は赤銅色の紋を戴いて二本の細い長い觸髯は何んとなう威厳がある、さて四本の前脚は短うて後脚の二本は長い、一寸見たところで螽蟖の小さい

やうなのであるが其鳴き聲と云つたら多く虫の中でも一番可愛らしいのである、まづスイー〳〵と二言三言歌ひ初めて、それからスイーチヨン〳〵と曲節正しう例へば龍田姫が錦織るてふ梭の音もかくやと覺える、一度この小歌を耳にすれば、僕には例へば夏の旅して岡の邊に思はぬ清水を掬飮んだ時のやうに骨にも通るやうな感じがする、何んでも彼の靜ちやんの居る東京ではこの虫をスイトと云ふとか、けれども僕は今も猶此虫の名をシイーチヤンと呼ぶのだ、スイトはまだしもだが馬追とは可愛想であると思ふ、何故つて靜ちやんは決して馬追の娘ぢやない、靜ちやんは僕のお隣の酒屋のお孃さんだもの、でも今は東京に居る、あゝ東京に居るのだ――けども今は僕には音信がない…………』

こゝら田舍に近き町端づれの小店の今年十四歳になる美少年、彼れは我が家の裏口の戸口の側に悄然として佇みながらありし昔にあくがれてゐるのである前の草原では蟋蟀がヒヨロ〳〵と鳴く、月はまだ出

ないが洋燈の光を慕ひ來る小虫が障子に衝突つて雨でも降つて來たかのやうにポチン〳〵と鳴る、ツマグロヨコバヒが洋燈の笠に止まる、それが二匹となり三匹と增しさては互に追ひ〳〵して居る、追想の彼れは今少しの處で洋燈を轉倒するのであつたが、やう〳〵側の小箱に支へられた、ツマグロヨコバヒは吃驚りしてつと障子に移轉る、彼れは投げるが如く腰を据えてまたも追想の世界に遊ばんとする。

『でも僕と靜ちやんとはあれ程中が好かつたゞのに何故返事も來こさなくなつたのだらうか？だけど僕だけは今頃になると——馬追虫が鳴き出すと僕は如何しても昔を思はずには居られぬのだ、ソラ思うたッて仕方はないさ、それでも僕は此樣に昔のことを思ふのが何んだか嬉しいんだもの——僕は十三歲で靜ちやんは十二歲、其時は僕は高等小學校の一年生靜ちやんは尋常校の四年生だつた、昔ッて今から僅か二年前ではないか、今僕が坐つて居る、さうぢや其時はまだ如斯んなに疊が破れちやゐなかつたが、丁度今破れてるあたりに靜ちやんが坐つて、僕は今僕が坐つて居るところに居て二人が唱歌を歌つて居た時に此所の』

と彼れはフト障子に眼を移すと障子にはツマグロヨコバヒの一群が數匹の蚊を包圍しつゝある、團々たる月は早や山の端にかゝる。

『此障子にスイーチヨ〳〵と鳴くんだもの、だから僕らが唱歌はモー全然馬追虫に移つてしまつた、其時靜ちやんは口で鳴くと云ふし僕はさうでないと云ふ。『靜ちやんはまだ知らないんだよ、馬追は口で鳴くんぢやない、翅で鳴くんだよ』、と靜ちやんの不思議想な眉を僕は可笑しく思ひながら、其前の翅に透明な圓い形の發音鏡といふ發聲機があつて、それを兩翅で摩擦れ合ふとそこで音が發することや、それから松虫、鈴虫、轡虫、蟋蟀、螽蟖などの鳴くのも同じであること、茶柱虫が大腮で障子の紙なんかを擦つて鳴くことまで、學校でお敎はつたまゝを全然靜ちやんに話してやつたので、實に其時僕は大の得

意で、靜ちやんも頻と感心して聞いてくれたのであつた、………處が靜ちやんは僕に『馬追の聲が好きなの』と問ふから僕は靜ちやんを笑はすつもりで『大好きだとも、何故つてそれシイーチヤン／＼ツて鳴くもの』と云ふとその時靜ちやんはお顏をポット赤うして――やつぱり笑つた、その可愛らしい顏が今も猶忘られぬ………。

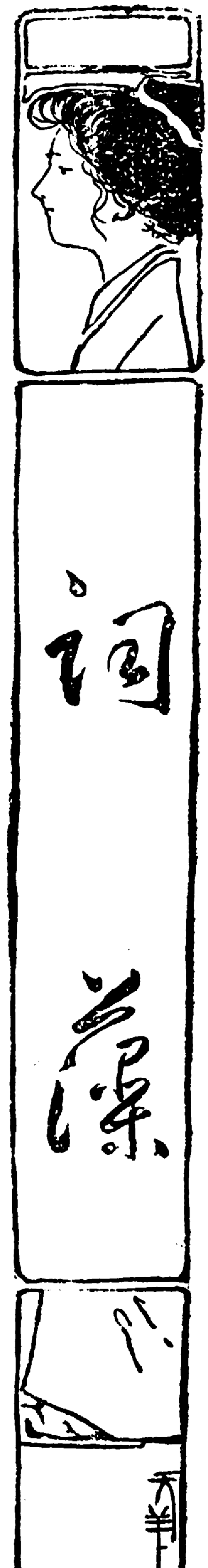
僕は今も猶靜ちやんを忘れはせぬ、さりながら／＼靜ちやんは決して僕を思ふては居ぬ、靜ちやんは尋常科を卒業して東京の學校へ入學した時に僕は手紙を出した、けども返事はくれなかつた、呉れた呉れた、けどもそれは一二度であつた、それはモー僕と靜ちやんとの境遇は比較にならぬので、靜ちやんはこの地の豪商のお孃さんだし、僕はこんな駄菓子屋の……けれどもそれはあんまりだと思ふ――思へば靜ちやんが年々成長くなるにつれて、僕とのなかゝだん／＼薄らいで今は靜ちやんの心の中には僕といふものは少しもないのである。――これは靜ちやんがだん／＼成長くなつて智識といふものが廣くなつて、富とか位置とか云ふことを知るにつれて僕といふものがだん／＼靜ちやんの胸から遠ざかつたのであると思ふ、それに決つて居る、何にも僕と靜ちやんとの間に一度も喧嘩したと云ふのでも何んでもないんだから、で僕はかう思ふのである、『若しも世の中に無慾の愛！眞の愛！といふものがあるならば、それは子供の時代である!!と。

彼れの空想はかくの如く結論して忙然たる樣である月は山の端から三間ばかりはなれて油染みた洋燈の臺にツマグロヨコバヒが數匹溺死して居る。

× × × × ×　× × × × ×

靜ちやんはこの夏を鎌倉で避暑して居るのだが八月の末には一度古鄕に歸るとか。(終)

因に記すこの馬追虫のことを余が地方（大和五條）ではシーチョンと云ふ、また三重地方ではチョンズイといふ



佐々木信綱先生選

和歌兼題 海上雁

天

舟は今錨をまきて浪きりて
行方に雁のなく音はおちぬ

飛騨 南みね子

評 さらでしもさまぐ\の物思ひ繁かるべき船出の折に鳴渡るらむ雁の聲哀いかに深からむと。

地

かへりにし常世もうしと雁かねは
海原とほく渡りきぬらむ

山口村 上操子

評 心ふかく、すぐれたる歌。

人

波千里身はさすらへの舟の旅
雁ゆく方になみたてほる、

伯耆 錦織よし子

評 遠つ島にさすらへ行く人の心た、よくも寫しいでられたり。

秀逸

かりかねの夕日にむる、はなれ島
鐘も音せぬ汐ぐもりかな

越後 岩本芳子

おばしまに袖打ちかさね見し雁は
君住む島の方にとびゆく

東京 秀島けい子

外國のわがせのたよりいかならん
波路はるかに雁は來にけり

名古屋 山根しげ子

神戸　井口その子

仇の艦うち沈めたる後の夜の
月あきらかに雁渡るみゆ

岩代　岸野常子

朝霧はやゝにうすれて與謝の海
みち潮たかく雁なきわたる

神戸　足立あさ子

芦の葉に小雨降る夜の難波潟
雁なきわたる聲のさびしさ

東京　山本しづ子

燈臺の火かげも淡きあかつきに
海原さむく雁なきわたる

東京　西村直子

こぎのぼるもろこし舟の梶のおとに
こゑうちそへてわたる雁かね

東京　益子逸子

とこよ出て波のちさとやわけつらむ
ねむろの海をわたるかりかね

東京　吉岡龜子

常世いでゝ幾かへぬらむ駒のつめ
つかるのうみをわたるかりかね

名古屋　中村浪子

夜あみひく海士はかへりて島みえて
月の海原かりなきわたる

東京　林艶子

海原をはなるゝつきにひとつらの
雁はうつりぬ繪のまゝにして

伯耆　錦織さち子

空や水島かと思ふ雲間より
一つら高く雁なきわたる

東京　臼井春子

いそさきにおちくる雁のかすみえて
月になりゆく波の上かな

東京　高野元子

大海のやへをる波のしほけふり
わけてやきぬるあまつかりかね

下野　井上侗子

風なぎて月さゆる夜を島かげの
しら帆斜に雁なき渡る
〇　二三句原作月さえし夜を岩かげの

甲

〇　長野　北澤千枝子
沖とほくくれゆくそらにかげ見えて浪路のすゑにおつるかりがね
〇　宮城　大槻慶子
松浦がたなみぢの末のこゑ落ちてくも間にかゝるころもかりがね
〇　播磨　田淵ふじ子
いと深き思ひを月に語り居れば雁なき渡る住吉の濱
〇　東京　土田八重子
波のよる入江のあしにかりがねの月よりおちて月に入るかな
〇　松山　田村多豆子
雁がねはつばさ一つをたのみにて千里のうみもわたりきぬらむ
〇　伊賀　佐々木いすゞ子
甲板に月見るこよひ一つらの浪に消へ行く初雁の聲
〇　備後　角倉茂子
雁かれに月かけさへて舟唄たえておもひにふけし浦の夜半哉
〇　東京　服部綱惠子
故郷にかれもゆくらんなつかしや青海原のかりのひとむれ
〇　東京　服部元子
とつくにへ渡るふな路のともとせんわかゆく方に雁かれのこゑ
〇　東京　牛山棠子

はてしなき海にたゞよふ船の上を古郷さしてかりなき渡る
〇　和歌山　植木撫子
今宵またわきて身にしむ泊かななみの上渡る雁のなくれに
〇　奈良　栗山たか子
清水かたなみのうき霧末はれて明行そらにかりそなくなる
〇　福岡　島村作子
朝霧に沖つ島山よこぎりておもかけおつる雁の聲々
〇　神戸　足立ゑい子
沖津風つばさにうけしかりかれは舟よりはやき追手なるらむ
〇　横須賀　渡邊比佐子
短夜の舟に明くれは海女か屋の煙りに高く雁ぞ鳴くなる
〇　千葉　海上蔦子
たがためのつかひなるらむわたつみの八重の汐路を渡るかりかれ
〇　兵庫　梶原京子
見渡せは月に翼をかへしつゝ浪路はろけく雁なきわたる
〇　甲府　風間千代子
なみ風のあらきも知らて海の上を心地よけにも渡る雁かれ
〇　東京　青木たま子
海原やつばさの風にうきゝりをはらひてわたる天つかりかれ
〇　廣島　平城淳子
我かせにこの舟はかへらす雁かれのみたれてつゝく天草のなだ
〇　常陸　岡田まん子
海原や三十五反の帆をあげてはしる波路に雁鳴きわたる
〇　常陸　岡田萬子
夢の花咲ける磯邊に日は落ちて波路なゝめに雁の一つら
〇　横須賀　高橋つれ子
網舟の篝は消えて沖遠く雁なき渡るあかつきの空
〇　東京　渡邊花柳子
我はしも學の海の捨子舟現心に雁の聲きく

○　神奈川　鈴木まつ子
和田の原なみにも秋のいろみえてはつ雁かれの渡り來にけり

○　韓國　原野みき子
ほの白う月かけ見ゆる海原を雁の一群なき渡るかな

○　東京　神谷てる子
波の音のたえま〳〵にきこゆなりつきをよこきる初雁のこゑ

○　東京　河合清子
みつぎ舟しみゝにうかふうな原の波をわけてもわたるかりかれ

○　東京　小島榮子
細たての波路はるかにうちむれてあけぬとわたるあまつ雁かれ

○　東京　渡邊花子
やす〳〵と海原遠く行く雁にせめて一言信りしたしや

○　長野　關谷巳子
世を渡る雁のおとづれ待ち詫びて大海原にふるさとおもふ

○　清國　宮成梓子
大島のけふりのひまにかず見へてかりなきわたる伊豆の海はら

○　肥後　友水常子
こゑはまた波にまきれてきこえねと沖に見えたり雁のひとむら

○　陸前　前田河千年子
浪の上月のこゝかとおもふまてさえ渡りゆく初かりのむれ
評　二句おもしろけれど四句いかゞ

○　土佐　秋月廣江子
汝が戀ふる國は何處ぞ海のあなたかけを亂して雁なき渡る
評　三四句いまだし

○　肥後　友永章子
朝ぼらけ波のうき霧はれそめてかりなき渡る秋のうなはら

○　美濃　芳翠敏子
燈臺の灯かげうすれてかりかれの鳴くねさびしき紀伊の海原

○　美濃　傍島みゆき子
海空を一群れかへる雁かれのゆくへさびしきうす月夜かな

○　伯耆　錦織とみ子
かりかれの翼も波のかげとともにさきりになりぬ俤なきの灘

○　伯耆　錦織賜子
甲板の月おもしろく夜は深けてゆくへもしらぬ雁の一つら

○　備前　武村留意子
浦波に夕ひにほへるおきつすになきておちくるあまつかりかれ

○　東京　五十嵐清子
ま梶こぐ舟にてきけはまつらかたおきのこしまにわたる雁かれ

○　伯耆　錦織千代子
晴れそむるさ霧に波の末なきて長打十里かり高く鳴く

○　神奈川　中島光子
稻妻にたよりまかせて雁かれのたまつさかけて　わたるやしほ路

○　越後　松永しげ子
蝦夷か島渡るしほ路もつゝかなし空行く雁に言づてやせむ

○　備後　杉原衣子
つれをなみ海路こえ來る初雁は己か影をや友と見るらん

○　東京　林環子
故郷の船は來なくに初雁は海をこえても訪つれにけり

○　東京　佐々木壽子
わたの原八重の汐路にてる月に名のりて渡る雁の幾行

○　下總　高木美代子
青海原つき明かに飛ふ雁の八十島かけて雲に入りぬる

○　東京　平塚白百合子
うき波を雁の一つらこえくなりたゞよふ雲もなき月の夜に

○　東京　原田まつ子
鏡なす海原てらすありあけの月になきよる初かりの聲

○　東京　檜皮興志子
はる〳〵と潮の八百路を渡り來し雁のたよりの聞かまほしけれ

○ふるさとを忍ぶデッキに月さえて雁かれかなし遠洋の空　千葉　中川千鶴子

乙

○　甲府　名取正代子
沖遠き船のはたかと見しほとに
やかておちゆく雁のつら

○　名古屋　浅野　米子
折からを故郷の方へ渡り行く
雁の文字讀む甲板の上

○　東京　松原　岑子
沖つしまさ霧は晴れててる月に
浪路を渡る雁のひとつら

○　廣島　鈴森きみ子
海原を渡るかりかれ父君の
軍艦の行方を知らせてよとや

○　神戸　今西　操子
來る雁の聲はま近くきこゆなり
夕霧とさす須磨の浦なみ

○　神戸　すい子
新潮の波たつ空に影とめて落ち
來る雁そ眺めなりける

○　東京　よし子
海やそら空や海なる大空にほの
かにみゆる雁の一つら

○　東京　渡部　芳子



○　前田河みさを子
待ち詫ひて東雲遠くなかむれは潮路楽しく渡る雁かれ

○　宮城　三浦ゑん子
はる／＼と浪路こかれてくる雁は一夜を月のやとにかるらん

○　東京　中村千代子
さゑ渡る月のかなたにこゑするは浪の上ゆくかりの一つら

讀み越えし八重の汐路の月影に高くもかゝれる初雁の聲
東京　岩谷透子

○
楫枕なみの音よりしらぬ身の夢おどろかす秋の初雁
奈良　栗山俊子

○
月くらき海原遠くきこゆなりはつかりかれや今わたるらし
旭川　佐ク藤央子

○
あひきするこゑかときけは明石かたくれゆく空に雁かれのなく
秋田　細矢はる子

○
ふるさとをはなれ潮路を行く雁は花にかへるとちきりおきけん
東京　木下元子

○
夕やけを波間にうけしさゝ舟を雁の一群賑はしにけり
名古屋　不破きみ子

○
渡し守雁のゆくへをなかむれは沖のしら帆に夕日かゝりて
越後　水野やすゑ子

○
からふゝ心我が背を偲ふ夕渚空に連なる雁の一文字
神奈川　吉田はな子

○
波の上清く涼しき月かけにひとこゑ高し雁のひとむれ
東京　堤いく子

○
あかしかた出しほの月の影さむみ今宵を秋とかりなき渡る
磐城　木幡きよ子

○
行末を思へば戀し雁かれのほのかに見ゆる沖合のそら
東京　川合りく子

○
海の面に月かけ清くさゆる夜にそらなきわたるかりの玉章
埼玉　濱野秀子

○
わたつみの八重の汐路の荒磯になき行く雁の涙こほれぬ
東京　川合しほ子

○
いさり火の影さへくらき海の上に夕へ淋しくかりそなくなる
宮城　大槻初音子

○
秋かぜも身にすみのゑの浦つたひとまやにかゝるこゝろもかりかれ

○
うらぶれてたらちれ戀ふるこの夕雲井はるかに雁なきかへる
東京　奈良八重子

○
きりはれて靜けき海に日はてりて船はたなびき雁群れわたる
美濃　長濱照子

○
鐘しはし空にいさよう須磨の夕浜間に消ゆる雁の一列
千葉　吉松龜子

○
こく舟と見まかう沖のあなたより三つよつふたつわたる雁がれ
東京　小林芳子

○
聲をほにあけて雁かれわたるなりちふれもゝふれよろうな原に
東京　原三幸子

○
からろおす聲にまかひていくつらを波ちはるかにわたる雁かれ
東京　松本まつ子

○
空や海すみわたりたる秋の日をなく聲遠し雁のひとつら
岩代　菅野和子

○
しもなめて花を忌みてかゆくかりは海原とほくかけなうかへて
群馬　吉田きく子

和歌兼題　女子讀書

天

睦じう向ひ合ひたる姉妹
机へだてゝ書をよむかな
横須賀　渡邊比佐子

地

常陸　岡田萬子

朝顔の露より先におき出でゝ
文ひもとけり窓の少女子

人

肥後 友永常子

うなゐらが衣ぬひをへてをた巻の
糸くりかへし文を見るかな

秀逸

東京 服部彌惠子

そへちするかたてにひらくひめかゞみ
にはの教のしのはるゝかな

東京 高野元子

秋さめのふるやの窓にをとめ子が
やまとふみよむ聲のきこゆる

東京 西村直子

奥ふかき窓に文よむをとめ子の
こゝろきくおやはうれしかるらむ

美濃 傍島みゆき子

まどによりて少女書讀優眉を
ほのかにてらす初秋の月

甲

○ 東京 渡邊花子

小夜更けて破れ戸もれくる月明りに文路をたどる少女床しき

○ 東京 林 艶子

おしまつき椽にとりいで蟲鳴く夜月にひめきみふみよみたまふ

○ 千葉 海上嵩子

文まなぶ庭のなでしこやがてその國のはしらのかざしとなるらむ

○ 甲府 名取正代子

書よみてこゝろ正しきをみな子はなよひかなからけたかゝりけり

○ 甲府 風間千代子

をみならが御國に盡す眞心も文よみてこそ力ありけれ

○ 廣島 平城淳子

花はちす濁りにしまぬ文讀めば浮世のうさは忘れられつゝ

○ 横須賀 高橋つれ子

人のふむ道を知らんと賤の女も文よむ業は怠らぬなり

○ 名古屋 不破きみ子

抱く稚子の泣かぬうちにも文よみて敎のくさの種をこそ摘め

○ 東京 松原岑子

女子もみな身をみがく世となりぬあさ夕ふみをかゞみにはして

○ 備後 角倉茂子

この姫が書院のまとに月たけて庭のをちこち鈴むしの聲

○ 岩代 岸野菊子

つれ〳〵の琴の音やみて少女ひとりふみよむ窓に秋の日ながき

○　　東京 牛山棠子
こゝろさし誰におとらん少女子も文よむわざのしげき世なれば
○　　岩代 岸野常子
よむふみをそとゞめてはゆく雲をながむる少女おもやつれたる
○　　横濱 鈴木まつ子
なす業のそのひま〳〵にをみな子も書よむことのたのしかりけり
○　　備前 武村留意子
ひにそへて咲まさりけりひらけ行くをしへの庭のやまとなでしこ
○　　東京 原 三幸子
やへむくら茂れる中に姫ゆりもにほひあらはすよとなりにけり
○　　東京 松本まつ子
いつかたのをとめなるらむなつかしく文讀む聲のふけてきこゆる
○　　東京 五十嵐清子
をとめ子かいかなる文をたどるらむ長きよすから聲のきこゆる
○　　東京 益子逸子
をとめ子もふみのはやしに分いりてひらけ行よの道まなぶらむ
○　　肥後 友永常子
文の上に心うつして女郎花いろ香そへゆくともしひのもと
○　　美濃 芳翠敏子
琴やめて白百合いけて文机に少女ふみよむ秋のそよかぜ
○　　旭川 佐藤央子
たちぬひの業にいとまのなき身にもまなへはけまむ文のはやしに
○　　東京 川合しほ子
みちのくの賤が女も文よみてこゝろをみがくみ代のたふとさ
○　　神戸 足立あさ子
たをやめのことわざ多きその中にわきてやさしき讀書の道
○　　伯耆 錦織千代子
身も心もよみゆくふみのその如く世に美しく高くとぞ思ふ
○　　清國 富成梓子

しろをだにいはぬ色なるをみなへし文のはやしにさかまほしけさ
○　　東京 服部光子
丈夫の母となるらむひめ小松まなびの窓にふみをよむ聲
○　　宮城 三浦ゑん子
讀むふみに心をかためかくもじに女のみちのあらはれにける
○　　伯耆 錦織さち子
三千と世のみいつの下に咲く花の類なき實をふみにもとむる
○　　伊賀 佐々木いすゞ子
ふみ讀めばいよゝ恥づかしをみな子の道にはづれぬ身とは思へど
○　　兵庫 梶原京子
たわやめが窓に繙く書やなに萩訪ふ月に身をそむけつゝ
○　　越後 松永繁子
鳴く虫の音をやとめむ美しき文のこゑきく赤き窓かな
○　　名古屋 山根しげ子
少女子が文よむまとの芭蕉葉にたとりてのほるかたつむりかな
○　　東京 秀島けい子
をみならの才の泉はこゝよりと知られけるかな文机のふみ
○　　東京 よし子
母君の好み給ひし古の聖の文をまたもよむかな
○　　東京 佐々木壽子
せなに泣く子をあやしつゝ木がくれにもりする女子詩集讀みゆく
○　　備後 杉原衣子
古の文讀むたひに思ふかな子の爲めたちし機のたて絲
○　　東京 檜皮與志子
文机にものよむ妹聲とめてしはしきゝ入る鈴虫のこゑ
○　　陸前 大槻初音子
燈の下にふみよむ少女子のはなにもまさるかけのやさしさ
○　　千葉 吉松龜子
美しう文讀む聲の主やらむ綺羅すくや紫の衣

乙

○ 神奈川 吉田はな子
鑑としあした夕に讀む文は女子がをさむる家の庭なる
○ 福岡 島村作子
書よまはつひに末野のをみなへしよにかくはしき花もにほはん
○ 埼玉 濱野秀子
手弱女がおばしま近く月あびてひもとく詩集に影ぞさしける
○ 東京 林環子
里遠き賤の乙女も外國のふみよむ御代となりにけるかな
○ 松山 上原のぶ子
よむふみの栞をはけみて竹馬に心はのらぬをさな子のとも
○ 山口 村上操子
君が世はほたるも雪もあつめすてをさなき子等も書をこそよめ
○ 越後 水野やすゑ子
徒に百千の文をよみ上げてこの夜更けたり我が身老いたり
○ 東京 木下元子
鈴虫もしばし草葉に聲とめて書讀む少女子をなつかしみけり
○ 和歌山 植木撫子
文よむはいつこなるらむたをやめのやさしき聲に月もすみゆく
○ 神奈川 中島光子
ひらけゆくみ世にしあれは女子もみかくは文のことのみにして
○ 奈良 栗山たか子
をとめ子も外國ふりやまなぶらんあやしき文をよむこゑのする
○ 陸前 前田河みさを子
女子のよみかくふみも己れのみか世をも益することぞ多かる
○ 陸前 前田河千年子
よみかきはやさしくみゆれ女子を男の子はちらふふみもみえけり
○ 東京 中村千代子
身を治め智識ひろめよと女子にやさしくときし書をよむかな
○ 奈良 栗山俊子
とつくにの文字をまなびて少女子もたみたる聲に書をよむなり
○ 秋田 細矢はる子
まなびやにならひし文をとめこが繰返しよむこゑのやさしさ
○ 土佐 秋月廣江子
更くる夜の月にそむきて少女子が美しゑみに書よみやめぬ
○ 東京 小林芳子
針とめてしばしひもとく諧のふみに夕餉を思ひつゝ見る
○ 東京 吉岡龜子
奥まとに朝ゆふたえず文よむはたがかしづけるをとめなるらん
○ 東京 小島榮子
ふみまなぶ聲のきこゆる少女子はかしづく親の心なるらん
○ 岩代 菅野和子
ぬひはりにみたしゝ部屋を燈火のかけにかくしてふみを讀むかな
○ 長野 關屋己子
明らけきみよの惠をそとうけて涼しの窓に文よむうれし
○ 岐阜 長濱關子
書讀むと萩さくまどにたゞずめる少女の袖にうす月夜かな
○ 東京 堤いく子
ふみの名は源氏かあらず少女子が窓にひもとくこの國の詩
○ 東京 渡邊花柳子
虫の音と共につかれし昼や書を讀む妹や秋の夜の雨
○ 下總 高木美代子
奥も見ん賤の女床しすゞ學ぶ紫にほふ山下の家
○ 磐城 木幡きよ子
賤の女に開くるみよの影見えて月にふみ讀む山の奥哉
○ 東京 川合りく子
貴人も賤かをみなももろともに文の林に花をつむなり

○　東京　原田まつ子
人とはぬみ山かくれに住ふとも世のさかしろは文讀めばこそ

○　長野　北澤千枝子
千よろづの言葉のかゞみ身にしめていよゝたどらん少女子の道

○　廣島　鈴森きみ子
千種なる文は讀までも實用を旨と撰ばんことのそましき

○　神戸　井口その子
ものうげに鬢のほつれ毛撫で上げつ書讀む人の美くしきかな

○　松山　田村多豆子
ふみをよむ聲をしきけば幼子もたゝに螢はあつめさりけり

○　東京　土田八重子
少女子が初山ふみに行きなやむ文字が關根をみちびかれつゝ

○　飛驒　南峯子
み園生の虫より清き音をたてゝ書を繙ける女郎花かな

○　東京　山本しづ子
よむ人もおのがむかしを偲ふらむ嵯峨野のおくのつまことの音に

○　韓國　原野みき子
奥ふかくたどりつおみなの讀む文はやがて身にそふ光とそ知れ

○　東京　岩谷淺子
文机にかゝる少女の愛らしき姿は繪にもかゝれさりけり

○　神戸　足立ゑい子
雲井にや終に聞えむ吾妹子が學びの窓に讀書のこゑ

○　伯耆　錦織嘉子
おほけなくふみまき返し夜はふけぬ女またれし世をなげきつゝ

○　神戸　今西操子
裁ぬひのわざはかりかは昔今繙く書の光り添ひつゝ

○　宮城　大槻慶子
少女子がゑみをふくみてよむ書はいとも樂しきつゞりなるらん

○　千葉　中川千鶴子
文よむは心のかゞみみがくなりたかぶりなせそ大和女子

短文

文學士　鹽井雨江先生選

天

野の家　名古屋　橘たか子

草色の露ふる小野の朝わけを、夢と流るゝさゝ川の縁に沿ひながら、涼しい夏草の露をわけると桔梗、女郎花の黄紫に、星を蒔いたやうな野菊の花が白う咲いて、よもすがら鳴きあかしたる虫の音が、今も幽けく地に泌入るかのやう――野薔薇の紅い實を底に沈めて、水はゆるく紫に流れて。徑の末は菅笠を伏せたやうな丘の腰、波濤と伸びて長く綠をこめた夏草に浮いて、灰色な茅葺の屋根が所々に白い糸瓜の花を野の風に搖がして居る。流れをめぐつて野に浮ぶ秋を劃つた紫折戸を内に柱も軒も古風な古家の扉を叩くとか髪の毛白い叔母の懷しい顏が言許りない優しさと温さをつ

んで其所に迎へられる。
壁の落書に幼い昔の懐しさに泣いて、障子を開くと昨宵の星はまだ夕顔棚の葉隠れに宿つて眞白な花葩と匂ふに、露干ぬ花畑は夏菊の紅や白、向日葵は藥金色の香に映えて、すら〳〵と竹椽の端にのびた縷紅草の焔のやうな花は、柱に小さう炎えて居る。
「大層待つて居たわ、今年は裏の柿もなつたからゆつくら游んで行くが良いよ」
朝流れに釜も洗へば、夕べは月に花も流そう。背戸は木槿の垣にぶら下る糸瓜の尻を風が吹いて山の鳥に忘られた野の家の柿の紅熟むまで、私は短うなつた夏休を叔母と笑むべく思定めたのである。

（雨評）思想の組み立てに新しきところあり。叙景の筆に優美に清新なる詩趣あり。評者も一度夏休みを暮らしたき心地する野の家に候かな。

地

日誌　　越後　松永繁子

八月一日　尋常一學年　露子

ケフカラオヤスミ。アネサンノオソバデオサラヒヲスルノデス。
一リンモラッタ、アサカホノハナ、キレイナコト

八月二日　尋常二學年　正夫

カホヲ洗ッテ、庭ヲミルト、日マハリハ頭ヲアゲテ、オ早トアヒサツシテオル。
サンジユッノケイコウスンデ、兄サント妹ト川へユキ、石ノキレイナスンダ水ノ中デ、オヨギヲ習ヒマシタ。
川セミガ、水ノ音、オモシロクタテ、小サナ魚ヲ取ッテ、ウレシサウニ柳ノカゲヘカケイッタ。

八月三日　常尋三學年　玉子

朝飯すましたら、日ははや妙光寺の森へ昇つたんですから、暑いことつたら。とんぼ二羽、庭を舞つて舞つて、遂くもの巣に掛りましたから、これはと見て居ると、はねます、はねるけれど、糸は益身にかゝるばかり、かはゆさうで、たまらなく

て、取つてにがしてやり……姉樣にほめられまして嬉しかつたよ

せみが松の枝に鳴いて居ますと蜂が來てさして殺すのよ……花に舞つて居つた蝶は今……花の蜜をすつて居る。さぞ甘いでせう。

八月四日　　尋常四學年　武　雄

時計は今し午前の九時だ。今日の日課はこれで切り上げ裏庭へ運動に出た。妹や弟は早やとくに遊んで居る。自分も仲間入りして晝めしに至つた。晝食後西瓜をわつてみると、中が赤い何の爲めだろーと思つた。海邊の夏……これが今日の綴方、二時間でやうやく作り終つて、日が角田山へ近くなつた折、弟を伴ひ釣に出かけた。

安養寺の森に蜩がしきりに鳴いて居るさー歸ろーといふ時に月はまんまるく長巖寺の杉梢に青光を……、蝙蝠が西から東へ南より北へとんで涼んで居る。否餌を求めて居るのだろー。

袖に涼しい風が吹く、籠の中では魚は元氣よくはねあがて居る。

（雨評）趣向に新しき思ひつきあるところよし。其の日誌にいふところも先づ其の子供に應じたるもよし。

人

引越　　靜岡　岡田いち子

姉樣のおうちの轉宅で、荷物は門内に堆く上も下も入り雜じつて火事場の如な混雜。若い人達は面白半分、草臥れるのも知らずに、笑い興じてゐる。先着の荷が概略片着いて、少し火の手が鎭まると、まづ目に着くのは、見馴れぬ家の樣子、庭はと緣側へ出ると、姉樣には子姑の梅子樣も其處に燃ゆる如な紅葉の影を撮した池の水は、紅の小波を打つてゐる「あ、まあ、古風な燈籠」「楓につるしたのでまた一段」「葡萄棚にベンチをあしらつたのは、思ひきつてハイカラ」「朽木の橋」「汀の萩」と、せはしない月旦。と見る向ふは、杉木立の崖、下は町立高等女學校の運動場。日光を浴びた硝子窓も、木間隱に煊いて、折りから幽にオルガンの音がする、曲は露營の夢。思はず釣込まれて、小聲に合せてゐると、玄關の方で騷がしい聲、驚いて

別れ〳〵に駈け出した。

（雨評）筆のよくひきしまり、文に氣のあるところ愛すべし。

秀逸

◯◎庭の奥　　東京　奈良八重子

あまりの暑さに堪へかねて、飛石づたひに奥庭へと行くと、藤棚の下には、今年七ッの美ちやんが人形だいて夢も輕く、もう涼風にのつて塵の境をへだてゝをる。すぐ傍を流れる清水は、チヨロチヨロと、幾多の笑渦を湛へ、樹の影をくづし、少女の歌ふやうな美歌をうたひながら、蓮池の方へと走つて行く。

芝生に腰を下して、ぢつと美ちやんの顔を見てをると、何處から來たか蝿一つ、林檎のやうなその頬に止ると、可愛らしい手が五月蝿さうに二三度顔のあたりに動いて、蝿は逃げて彼方の木にとまつた。小さな朱唇が、かすかに動いて、猶深く夢路をたどるらしい。

この心地のよい木陰に、未だ浮世の苦みも知らぬ美ちやんの魂は、定めし天にでも上つてをるであらうなどと思ひながら、天使のやうな寝顔を見まもつてをつたが、いつか木の間〳〵を吹いてくる涼風に顔を撫でられて自分もうつら〳〵夢に入つた。

＊　＊　＊　＊

『玉の宮居は丸の内、近き日比谷に……』

うつゝのやうに其歌を聞いて、水底から浮び上るやうに、睡から醒めると、美ちやんはもう居ない人形が乳ほし顔に袖の上に横たはつてゐた。

『おゝ冷たいこと』

ふと見ると、美ちやんとお隣りの良子さんとが、紅い裳を高くはしをつて、雪のやうな白い脛を水に洗はせながら、小川の中に立つてゐる。

妾はあまりのゆかしさに、名も知らぬ夏草の花一つを、手折つて、水に浮へで、そつと送つた。

（雨評）幼子のあどけなさはありふれたる材料なれど筆は美しく才氣もこもりてよく整ひたるはめでたし

◎他郷の兄の許へ

越後　丸山孝子

行く雲に思をよせ、うつろふ花に音を忍ばせて、愁ある身は秋ばかり、わびしきものは候はず。もみぢ散り交ひ、すゝき亂れて、寂しき宿の秋も漸うに更けまさり、小鹿なく音に夢駭かす宵々は、何とはなしに兄上居ます里なつかしう、夜すがら衾の袖を絞ることさへ候うて……

きのふけふ、晴れ間なく時雨るゝ空にも、先づ忍ばるゝ旅路のうさ、秋草なびくひろ野の夕ぐれ、笠傾けて孤影力なく、露の小みちのつゆを分けつゝ、辿り行き給ふらん兄上の御姿、目にこそ見えね胸に描いて、只只健やかにおはすやう、幸くてわたらせ給ふやう、明けくれそをのみ祈りまゐらせ候を、御兄上、雲遠き旅枕、かり寝の夢はいかゞに候や。

おんなつかしさ、慕はしさ、つたなき節をもかへりみて、おぼつかなくも辿り行く水くきの跡、岡のくずの葉かへすがへす、御身すこやかにわたらせ給へ。

積る思は濱の眞砂の數知れず侍れど、胸うちふさぎて、筆の動かぬ苦ほしさ、お兄上、妹の心の中を察し給へやかして。

（雨評）前二節は、筆優美に情もこもりて、誠にゆかしけれど、後段のそれに伴はず物足らぬをなしむ

◎嵐の朝　東京　檜皮與志子

昨夜あれほど暴れまはつた風と雨も、日の神には勝ち得ないと見えて、今朝雨戸をあけた時には、影も形もなかつた。けれど、この庭をあらした樣子には、とても眉をよせずには居られなかつた。水のたれさうな庭下駄で、直に自分の土かふ花壇に、かけてゆくと、目を見はつたぎり、言葉も出ぬ。一寸こしらへた四目垣を、それでもたよりとしてからんだ朝顔は、垣ごとたふれて、けさは花もさかぬらしく、わきの白はぎは、長い小枝がみだれにみだれ、白萩の木の上に、ばつさりかぶさつて、小さな花は、葉や土の上にふりまいた樣に散て居る、昨日御隣から戴た女郎花は、植かたが下手であつたためか、根こそぎになつて、隣のほゝづきの中に、黄色い頭を入れて居る。結ひて置

た薄は、紙よりがきれて、四方に向た細い葉先からは、ボタリボタリと水晶の樣な露を落して、折々風もないのに、さやさやと音を立てるのが、何となく夕べの恐ろしさを泣てかたる樣。日頃の丹精もさんざんなので、くちびるかんで眺めて居たが、思ひきつて、すそや袖をかゝげ、下駄をぬぎすてて、冷たい土をふみながら、一つ一つたふれたのを起しかけた、すると、いきなり、廣くもないそばの畑から、作造のさわぐ聲が起つた。きつとあの折れかかつた茄子の枝や、つるからはなれてはふり出された樣に轉げて居る胡瓜を見て、口惜しがつて居るのであらうなど考へながら、尚も手先をはたらかして居たら、昨日はなしてやつたくつわ虫が、露しとゞになつて、桔梗の枝から我手にとびついた、ああ、この虫も、まだせまい籠の中に居た方が幸福だつたかも知れぬ、

（雨評）詞はなほ洗練を要するものあれど、文才も見え其の情景も見えたり。殊に可憐なる情の何處ともなくこもるを愛す。

◎靜夜　小樽　澤谷都音子

美しい繪さながらの靜夜……軒の若竹が、そよ風にゆれて、澄みきつたお月樣は、今葉越の青白い光りを、一ぱいに文机の上に投懸ていらつしやる眞實（ほんたう）に夢の樣な靜な夜、興ゆくまゝに、詩集をひもといて居ると、何處から迷うて來たのか、眞白な蝶々が一つ、一輪さしの花瓶に投げ込まれた。緋牡丹の廻りを右に左に……と見る間に、サラリ紅の花辨は一片又一片、くづれて詩集の上に、優しう美しい栞の、長に色あせぬやうと心に念じて靜に々々キッスを與へた。

（雨評）先づ一寸氣のきいた繪葉書のやうの文に候かな

◎秋庭の恨　下野　井上尚子

妾ばかりの秋ならぬに、なぜこのやうに寂しいのか、秋は誰しもさびしいものか。されど、秋なればこそ、昔こひしい我庭に、千草の花咲いて、樂しかつた、うれしかつた、思ひでに、知らず笑まひの洩るゝのである。いたみある胸に、手を添へて、想ひに重い身を、椽の柱にもたすれば、月の光りのいかにも冷たい

瞳こらして見上ぐれば、青い光の奥に〳〵、さびしい影があり〳〵とみゆる、空にきらめく幾千の星は、何かの啓示を與ふるかのやう。みだれはげしい黒髮を思ふさま吹くる風になぶらせて立てば、壁にうつる影の、我ながら淒い世にも哀な子が、涙涸るゝ迄泣てもたえてやつれ行くを、意地わるい運命の神は、こゝちよげに笑ふのであらう？

秋のなが夜をくりてもくりても、思ひはつきぬ心の糸それをたつたならば、心安すからうに、妾にはたつ刄物がない、勇氣がない、これが女の命か寂しさに堪へられず、取り出づるヴァイオリンも調みだれて狂ひて、自から悲曲を奏し、云ひしらぬ思ひに閉されて、弓をなげだせば、露しげきくさ垣に、音高く虫が鳴き出した。妾と同じく秋に泣くのであらう。

（雨評）　情は動きたり

ヽ◎海邊のあらし　東京　土田八重子

紫の空は濁り、生ぬるい南風は、顔も心も濕らして吹く、漁師の恐るゝいなさ風である。洋墨をぼかせるやうな雲は、龍の如く、虎の如く、空を翔けりて、山を包み、麓を被ふ。前なるは這ふやうに去れば、後よりは飛ぶが如くに、來りて、遙に見ゆる山村を、呑みつ吐きつして居たがやがてはそれも見えずなつた。漁夫等は赤裸々、急ぎ濱邊に走り出てゝ、漁舟を引き上げ、婦女は忙しく網を收む。程なく、雨はばら〳〵と降り出し、風はいよ〳〵吹き募る、空か水かと黑づめる海は、龍神や怒りましけむ、千尋の底より鳴り吼えつゝ、一波より一波は高く、巖を蹴散らし磯を踏み越えて、鞺鞳たる響すさましく、陸を目がけて打よせる、雨は暫時にして止んだが、沖には一帆の影だにない。唯丈餘逆卷く千波萬波のうねりが、消炭色の空と、青黑なる水面との境を更に墨濃く、大く、長き、眞一文字を引いて居る、常には景色を添へる孤島も、大濤をかぶり、白煙を上げて、恰も怪物の如く、屹然として立つを見るのみ。風は猶荒び、海は益々猛り、碎けても〳〵な

ほこりずまに寄せて來る、止んだと思ふた雨は、時を隔て丶、一しきり、又ひとしきり、雨戸の開閉忙しき中を、漁夫は出つ入りつ、己が持ち舟を陸へ〳〵と引き上げて、小傳馬などは往來に行列させてある、

今や點燈に間もなきをと、人の胸まで波立つたがいつか風は變つて、冷々と、筑波のあたりより、吹き下して居る。人心漸く夕餉の膳におちついた兎角する間に、夜の幕は下りて、星は忙しくまた丶いて、又忙しく隱れたり見えたりして居る。浪の音は前よりも高い、けれども明日は靜まるであらう。漁夫は妻子等に明日は早朝濱へ出て丶、海草を拾ふべく命じて居つた。

（雨評）　風雨の空と波とを叙する筆は見るべきものあり。

◎友の許に　千葉　吉松龜子

露子樣このわたりは八千草の花盛り、細谷川も小路もたゞ花ですの。一人眺めますもあまり惜しき心地の致しますから、何卒野分襲はぬまに、明日と申さず、月を御しるべに、今宵嵯峨野の宿へ御出で遊ばせ、白萩の折門御目あてに、何の御もてもなしぶりも出來は致しませぬが、食道樂を便りに、未熟ながらも手料理をと、下女を相手に初めましたら、早速庖丁の傷をうけましたが、御安心遊ばせ、御料理はどうやら無事にすみました。母は貴女の清き一節を樂しみに、自慢の栗飯の仕度して居ります。脊戸の流れには梨がよく冷えてゐるでしよう。何卒萩が葉がくれに、優しい虫の鳴き初める頃ほひより、御出で下さい、私は其頃ともなりましたら、竹椽の、ちりを清め、ぼんぼりに灯ともして、小琴取いだし、簾の内に、小督の調べに、御姿御待ち申します。貴女にも丸木橋のあたりより、御笛とうでながら御出下さい、何も彼も御目もじの上聞え上げます、さよなら。

（雨評）洒落げなる筆見るべきところあれどまだ筆のまはらぬところあるををしむ。

丶丶丶〇夢　東京　諏訪高子

二年前天國へ逝かれた父樣が、いつ御存じに成つたのか、昨夜お友達と錦輝館へ活動寫眞を見物に行きしに、其時友は今何時ですかと尋ねられた故、

懐中から時計を出して見て居ると、思ひも寄らぬ、「お前時計を如何したの」と問はれて、よく〳〵見ると、それは父様。「アラお父様、私ね、富ちやん（弟の名）のを借りて來たのよ」といふと、父様は「そうか、可愛想に、では買つてやらう」と仰しやつたと思へば、あとははかない現。………ヲヽ、夢にでも樂しい天國に逝つて、父様と手を引合つて、樂園に軒を列ねたる眞の天賞堂で時計を買つて頂きたひ……だけど、母様を思ふと、逝かれもしない…アヽ貧はつらい。此度の遠足迄には、如何しても欲しい……今の夢が醒めずに、長い浮橋を天津女神と共に、美しい清らかな音樂につれて渡りたい……夢よ、なぜさめた。にくや夢。さめずに、なせ時計を夢になりと買つて貰はなかつたらう……さはいへ、父様にお逢ひ申したは、夢なりともうれしい……ドレ、今朝も朝顔がよく咲いた、露のひぬ間に、お父様がおすき故、一輪なりと手向けませう。

（附評）可憐なる情の見ゆるところ愛すべし。されど筆のたど〳〵しきは、夢故とは、辨じがたし。

〇淋しき夜　上野　吉田賤女

寂しい淋しい實に今宵は寂しい夜である。妾只一人、裏庭に彳んで、既往を追想したり、未來を想像したり様々の思に沈んだ。オヽ最早秋風が吹くのか、半分黄色になつた楓の老樹を、さは〳〵と動かして、薄寒いやうな風が、面を撫たかと思ふと、向ふの桐の葉が聲もなく、ほろ〳〵と落ちる紫濡る桔梗の花も、今宵は只淡黑く、時々風にゆらいで、歩み出しさうに見える枯竹を杖に、危けに立つた白萩が、灰色の雲間に見え隠れする月の光を、淡くうげて、蒼味を帶びて見えるのが、凄い程寂しく感ぜられる。

オヽ此の月、大磯の海の上も照らして居るであらうか、姉様はいかにおはすであらう。伯母様はお優しいけれども、義理ある中、屹度悲しい事があるに違ひない、早く病氣が癒へて歸つて下さればいヽ、二人此の庭に抱き合つて泣いたのは、忘れもやらぬ先月の今宵であつた、姉様は、此の萩の様な蒼白いお顏に月を仰いで、アヽ、お亡母様

が有つたなら、恁んな愁しい思ひはせぬものを、と後は言ひ得ず。

姿い手を犇と取られた其の手が、わな〱と顫へたのが、電氣の如くに身體へしみ渡つたのである。アヽ、此の手には、今も尚姉様の熱い涙が、しみて居るのだ。其の夜は様々の感想、胸に亂れた、遂に眠り得なかつた。

翌朝早く、白い煙を名殘に、玆、一ヶ月計りと、惜しい別れを告げたのである。オヽ、今宵で一月になつた。けれども姉様はお歸りなさらぬ。今日のお文に、今二十日間と書いてあつた、いつも淡い墨にも厚い心はこめられてある。アヽ二十日間、其間妾どうして暮したらいゝのかあの楓が眞紅になつて、桐の葉が一葉殘らず落ちて終はなければ、姉様は歸らぬのである。淋しい寂しい月は朦朧として薄雲に包まれ、其の前に姉様の姿が幻の如く浮んで、月の後を追つて行く、アヽ、姉様月の世界へ行かしやるのか、オヽ待つて下されと、身を顫はして叫んだので、ハッと夢から醒めたやうな氣がすると、夜は靜に〱更けて、梢に下りた夜露が袖にしと〱に。

（雨評）姉な思ふの情はあはれにおほゆるものあれと、筆はなほ練熱を欠くものあり。

ヽヽヽ○紅百合　東　京　船　津　康　子

（歸省日誌の一節）

八月十七日、百合の花が三つ赤く咲いた。

夕方、妹の様に愛してる琴子は、百合を寫生するとて、打水の跡心地よい庭に降りた。私は椽の柱に寄つて、湯上りの熱した頬を、紅葉の優葉渡り來る、涼しい和らかな風に吹かれて居る。「康、お武さんが入らしつたよ」とお母様のお聲。耽ろうとした空想は、淺く破られて、「は」と御返事をするとともに、すぐ玄關に走けてゆくと、例の様に武さんは、眼鏡の美くしいお顔を、戸口に見せて被居しやる「まあ武さん」「入つてもよくつて？」二人が例ときつと癖の様に言ふ言葉だ。「ようござんすとも」手を引張るやうにして、武さんを私の室に連れてゆく。椽側に出ると、「まあ書の様」、切の長い表情に富んだ眸を、私に向けると、武さんは立

ち止つて、かうおつしやる。薄朦朧に暮れた庭の低い松の上の枝の邊から、琴子は中形の半身を横に見せて、紅白合の美くしい姿を寫生して居るのが見える。實際に好い畵題だと思ふ。「琴ちやん……」武さんの清いお聲が、細く響くと、可愛い笑顔が椽を振り向いて、「あら……」琴子はもう寫生も何も止めにしたらしく、寫生帳を抱へたまゝ、嬉しさうに走けて來る、机を圍んで詩集を手にすると、誰も物を言はぬ、けれど、沈默の中にも、三人の胸は、絕えず暖かな糸につながれて居るのだ。夕暮れの美くしい雲が、だん〳〵に消えると、庭は次第次第に夜の幕に包まれてゆく。「月はまだ早いのかナー」。隣り家に若い男の聲が聞える。と琴子は椽に出た。嚴かな夜の神の黑い裳裾は、遂に地に曳いて、澄み渡つた空には、數知れぬ星が美くしう輝いて居る。「此室は更けなきや月が見えない」獨言して琴子は、又室に入る。武さんは歸つた。萬象は寂として音がなく、夢見る樣な夏の夜は、かくて靜に、靜に更けてゆくのだ。

（雨評）少しく殊更に氣取らうとする跡が面白くない。個文の結び方が、每時同じであるのも一層の工夫を要するところだ。

○秋海棠　越後　海野幸子

やさしの花の姿よ、庭の置石のわたりにあまた咲ける秋海棠に、朝夕の水そゝぐは、我が業となりぬ。かはゆき花、優しき花、さはれ、姿の艷にもあらぬを、かくてぞ、我はこよなき花とこそ、愛づるなれ。たとへば、らうたき君が憂もつそれにも似て、いひ知らぬ悲哀の風情、身にしむるをおぼゆるぞかし。さなり、そは病みたるよき人の、心地涼しければと、青葉の下風にうろしの黑がみふかせて、すゞろあるきするさまにもたぐひすべき。あはれ花はさきぬ、秋の面影しのはせて、我が秋海棠、こぞも、ことしも同じ色にぞ匂ひぬる。こん年も、又こん年も、此花は同じ姿に匂ひなんものを、我やみての人は、我愛もつ君は、永劫に、秋の恨を、此花によせて、今は再び歸りまさぬさだめと、泣きの淚に、去年の此花みてぞ淚いやます此秋よ。

（雨評）初心の筆とは思はれねど、殊更に筆を氣取らんとする跡をなしむ。

○蜘蛛の糸　越後　丸山孝子

あまりつれ〴〵なるまゝに、窓おしあけし夕まぐれ、掌ほどの大きな蜘蛛が、庭の青桐の梢より、鉛直線に下りしが、吹きくる夕風に、蜘蛛の體はゆられて、窓の格子の隅に達し、之が起着點となりて、巧みなる彼が網は見る間に竣功したり。

飛ぶ力も弱げなる一羽の蝶は、巳が寝床に急ぐならむか、窓のあたりをめぐりくて、あはれなる最後を、蜘蛛の網に遂げんとする一刹那——風強く吹きて桐の一葉は心ありげに蜘蛛の糸にかゝりぬ……蜘蛛の網は破れぬ、蝶は軽く舞ひ出でぬ、桐の葉は落ちて秋の聲あり、蜘蛛はもとの桐の梢に。

（雨評）感情想像を更に強く活かして欲しき文なり。

〽〇番僧　越後　水野やすゑ子

私の寺の番僧が、今朝庭を掃きながら、散りかゝつてゐる楓をふりおとしてゐました。掃いた跡にまた落ちると、わるいといふのでせうか お前も早く往生安楽せよといふのでせうか。それとも、ひらりひらりと風に落ちるのを、美しいといふのでせうか。私、番僧にきいて見ましたが、黙で答へがありませぬでした。



（雨評）多少の感あり

〽〇祭の朝　相模　飯島とよ子

まだ夜明の星は、楽しい鎮守の森の上に、五ッ六ッ光つて居る。其れも、何時しか一ッ消え、二ッ消え、遂に皆消えてしまつた。一羽の烏が、東の方から飛んで来て、裏の柿の木にとまつて、カアーカアーと啼いた。其れかあらぬか、隣の家で、雨戸を開ける音がした。今迄暗かつた東雲は、次第に薄らきて、紅くたつたと見るまに大きな御日様が雲の切目に半ば笑顔を出して、はや今日の御祭を喜んでゐる。「日は暖かく——空晴れて……景色すぐれし——よき野邊に……」彼方の森蔭から洩れて聞える。いつも朝寝の義雄、今日は御祭りであるから、朝寝も仕得ないで、まだ薄暗いのに、床を離れて、近

隣の子供を誘つて出掛た。森かげから、聞えた唱歌は、其れの一行である。自分は今顔を洗ふべく、裏の折戸を出たが、餘り景色のよいので、涼風に嬲らるゝのも知らず眺めて居た。バタバタと駈けて來た君ちやん「姉さん、今日の御日様は、いつものより大層大きい事ネー、御祭りなので今朝は大きいの」と、君ちやんの無邪氣な問ひに思はず聲を立てた。足元を流れてゐる小川は、滾々として、清らかに鏡の様。痩せ衰へたる紅葉、巳を寫して、今日の御祭を悲んでゐる。左の岸には、萩桔梗女郎花、さては撫子と秋の草花が時を得顔に咲き亂れて、自分を招いて居る、夕べの鈴蟲が、殘り惜しさうに、露深い草の底に、何か訴へてゐる。其聲が甚だ細く甚だ微に、妹に促されて急いで折戸の内に入つたが、まだ[illegible]雑は歸らない様、御膳に向つたが、今朝の御飯の甘味しいことは。鎮守の森から馬鹿囃の二聲三聲。後は亦も大鼓の音のみ頻りに聞える

（雨評）すべてなほ洗錬を要する文なり

○寫眞にそへて妹より　　東京　星野清子

秋風たもとをかへしますが、暑さはなかなかまけず、大威張りで居るには困つてしまひます。姉様、此頃はいかが。先日は誠におめでたうございました。あの母様はれ、始めから女の子たらうと私は男の子と、お互にいひはりましたが、私が勝つて大よろこび御名にもうつきましたでせう。早う可愛い御寫眞を頂戴。一同まつて居ります。三人おそろひのは、漸う出來ましたから、一枚おめにかけます。一番をかしいのが、私れ。澤山お笑ひ下さいて、母様からですが、御産後は一番大切なものですから、よくよく御用心なさいつてれ、くはしくは後便に、さよなら。

（雨評）やつと洒落れて見た。嗚呼むつかしい。悪口失禮。

○夕暮の三時間　　相撲　渡邊久子

入相の鐘、ゴーン……と、二杵、三杵、今しも秋の日は暮れんとする。眞赤な夕燒が、書齋を覗いて、僅に照してゐる。雨をはらんだ黑雲は、南の方へ低くう這つて行く。今しも村の衆が土手の下を、清い、清い、平和な鄙歌を唄ふて戻る。あまり懷しさに裏の折戸を出て、歩むともなく一町ばかり田甫道を拾つて行くと御隣の君チヤンと、御向ふの義雄さんと、叢の中をかき廻してゐる「義雄さんとれァ」「知らナイヤイ、亦逃げタ」で二人は目を皿のやうにして探して居る。塒を求めて、忙しい、烏の聲も、何時しか鎭守の森に消えて、四方は黑い幕に包まれた様で、眞黑に、何となく物寂しう感じて、思はず身を震はせた。三日目の弓張月は今しも、結明山を五六寸離れて、路傍に淋しう立つてゐる石地藏の背中を照して。其の餘りが叢に落ちてゐる。さなきだに可憐の鈴虫が、唱ふる歌聲の、いと細う。村端れの方から犬の遠吠が微に、秋風に煽られて、近く、遠く。亦も流星が、細く長く、遠く彼方に。今迄叢に啼いて居た鈴虫何に驚いてか、云ひ合したやうに啼き止んだ。二人はもー見えない、風も止んだやう。何處ともなう、燕打つ砧の音が、小さく、大きく、大きく、小さく、交々聞えて來る。

（雨評）すべて今一いきの修練を要す。

○秋雨日記　　東京　神田けい子

色づき初めし門田の面を、静に波打ちつ夕風に、屏風繪の様なる夕紫の富士の姿を眺めつゝ、庭下駄のまま、たどり行けば、例の橋の邊に出てぬ。眞帆片帆波に揺れて、床しき欸乃の聲、水の面をかすめて通ひつ。一陣森の葉渡る風冷たう。襟かき合せて、空を仰げは薄墨を流したらむやうなる雲漂ひて、雨や落ち初めけむ、ぽつぽつと波輪を畫くは。水上遥けき森の邊、薄靄立こめて、遠

の景色は朧ろになりぬ。やう／＼繁く降り來るに、もすそ少し掲げて紅き柿の實色づく門へと。

端に立ちて眺むれば、次第に迫る黄昏の霧に夜のとばりは、やう／＼あたりをこめて、見渡す限り黒ずみ果てぬ。風折々、雨脚しどろもどろに亂れては、軒の芭蕉に高うあたる音、野末の家のあたり燈火の二つ微に夢のやうなるまたゝき。遠くよりさと音して歩み來るやうなる、窓の板戸に打つけのさわがしき、何れか淋しからぬかは程近き野寺に響く曉の鐘に夢破られて、板戸くりやれば、夜もすがら降りにし雨も、やゝ間遠になりて、遠近の景色、羅に包みたらむやうに霧立ち渡れり。明け行くまゝに、雲間多くなりぬ。槿垣の邊、人影見えて、やがて背戸を入り來るは、家の翁なりけり晉より先に起きて行きけむ、籠に溢るゝ計擔へる秋茄子、雨に濡れて瑠璃の色の美しきことよ。

夕暮書讀む程、漸く小暗く、文字微かになりしかば、窓によるに百舌鳥の聲高く、庭の柿の枝に止りしが、我姿に驚きて、とび立つや、彼方の田の面に、影消えたる野末のあたり、黒くあやしげなる雲出でたり。やうやう暮れ初めぬ、今宵亦雨や降るらし。

追想　　岩代　岸野常子

花やかなりし夕榮の雲も、いつしか其影を收めて、夕鐘寂しう川面をわたれば、黄昏の色、何方よりともなく平和なる里閭をば罩めつ、そよ風徐ろに水面をなでゝ、汀の小波細う、灯の影をくだきぬ。

いつ昇りけん、朧の月は、夢の如く淡く、松が枝に懸れり。何とはなしに、暫らく打仰ぐに、美しき神のみ懷に抱かれけん心地。やがて四邊の靜寂は、そゞろに妾をして、よしなき過去の空想に耽らしめぬ。

思ひ起す、四とせのあと、我がいとしき祖母君は逝き給ひぬ。昨日の淵は今日の瀬となる飛鳥川の、流れて常なき世にしあれど、人の運命のなどはかくはかなき。あはれ、幼き折りは、祖母君に伴はれ、日影麗かなる春の旦、匂ひ床しき菫の床に横はり、暖かき春の光を樂しみて、花に休らふ胡蝶の夢をおどろかし、雲井遙かに春を讃ずる雲雀をきゝて樂しみにき。あるは、風寒き冬の宵、埋火暖かき處に、昔語りきゝて、膝を枕に平和の夢路を辿りしこともありしが。オゝ其の昔、あゝこの今、其間僅かに四とせにして早くも幽明界を異にせること、いと悲し。

一とせ、人の心も霞と共に浮き立つ彌生の始め、ふと病の床に打ふし給ひければ、名たゝる醫師を迎へ、數多の藥をすゝめて、只管癒え給はむことを祈りたれど、露しるしも見えざりき。

桐の一葉に秋の音づれ、籬の朝顏やう／＼やつれ行く頃、いとも靜かなる祖母君の打ふし給ふ室にて、折々咳嗽し給ふ聲の、襖を隔てゝ此方に臥せる我耳に入りて、ふと眠をさませば、彼方の室には、仄暗き殘燈の隙間もる風に明滅して、祖母君の苦しげなる息づかひし給ふに、如何と覗ひまゐらすれば、又すやすやと眠り給ふに、胸なで下しゝ事幾度なりけむ。此後、妾は故ありて遠く他鄕の空にさすらひの身となりしが、水にも似たる空を掠めて、雁が音寒う鳴き渡る夕べ、ひとり筆のすさびに餘念なき折から、祖母君危篤との報に接し、取るものも取りあへず、心もとなく汽車に打乘りぬ。日頃早きも物急ぐ身にはいと遲く停車場なんど無くもよけむと、氣もいらだちぬ。程なく汽笛高く響きて、我里へ入りたる時の妾が心の裡、そもいかばかりぞ。急ぎ車を下り道の程も遠からねば、ひた走りに走りて、家に着くや、まず寢室を訪ひまつりぬ。其時、祖母君は兩眼ひたと閉ぢ、口塞ぎて何事もいひ出で給はず、たゞ枕邊なる線香の煙、細うなびきて、法の灯の明滅する時の妾が心よ。今少し早かりせば、此世の俤を見まゐらしけむものをと、亡骸にすがりて泣きに泣きぬ。あはれ懷かしの祖母君は、永劫の眠に就き給ひぬ。ありし夕、別れを惜み給ひし俤は末だ眼底にあれど、早や四とせを經ぬなど思ふも、かひなし。折しも鎭守の杜のあたり、青う長く尾をひきて、流るゝ星の二つ三つ

ゝゝあゝ蝶よ　美濃　傍島　みゆき子

しとゞにふりそゝぐ雨は、やうやく晴れて、夕日力なくも淡う庭園にさしつ、初秋のそよ風は、思出にたゞずむ我れを訪れつゝも呼よ、やさしくも咲きそめし糸萩の花を、ゆら〳〵とそばだゝせぬ、あはれ、愛らしきその花は、うるはしきルビーのやうに、光りをやどす玉露をのせたまゝ、ほろ〳〵と散る。何處よりか胡蝶一つなよりきたりて、其花にとまつて居る。あまりのながめに心とられ、夢とたゝずむ折から、妹の聲、「姉さん、其蝶をとつて頂戴な……」妹を思へば、とらへたくもあれど、如何でかはとらへ得べき……あゝまだあの散つた花に居る。あゝ屹度あの花の最後を悲んで居るのならん。これを見た我れが小さき胸は……あゝかくまで胡蝶は花にたよるを……なで母君はかなしき妾と妹をのこしてゆきたまひしぞ。あゝ、しばらくを世にいまさば、思のかぎり語らひ告げまゐらせて泣かんものを……みなし ごの吾はらから二人を、草ばの陰に居たまふ母上よ、少しは思はせられよ。折しも、妹「姉さん明日は母さんの日れ」たしか妾が涙を見て、小さき胸に思ひうかべたのだらう……いつしか日はくれて、庭の糸萩に淋しい月の光りをやどした時、空を渡る雁がれの聲、あゝさびしい夜かな。ふとくれつかたの蝶を思ひ出で、なつかしみゆけばあはれまだもとの花にいこひて……そと手をふるれば、かはいさうにも、眠つたやうにやさしく死んでしまつたのである。

ゝ臨終　長野　關谷　已子

姉君、このごろのお暑さ、如何渡らせ給ひてぞ。二百里の遠國にいます姉君が御便りこそ、待ち遠しいものに候なれ。さて、此度の母君が死去こそ、いかゞ夢へ申しても夢に候へ、國の衣押しぬけて、幻の如き一瞬に、母君を戀ひまつれば、なつかしのみすがたは、目の前に現れ申して候よ。亡くなり給ふ前日も、快げに畑より歸りたまひ、夕餉も事なう濟み申候就床の頃に到り少しく腹痛の氣味にておはしますれば、仁丹など勸めまつりし故にや、又すや〳〵と睡り給ひて候ひき。夜中に到りて、蚊帳の中より妾を呼びたまふに、馳せつけ申せば餘程御衰弱の体にて、折々の腹痛に苦しみ給ふに候。家内の者いたう驚き、醫師よ親者よと、騷ぎをる間に、おいたはしや、激しき腹痛を覺え給ひて、子分の人々集り候頃は、血色あせたまひて、日頃のみすがたとは、いたく變りたまひて候ひし。「母君氣を確に持つて下さい」胸の底よりひた〳〵とこみあぐる涙押へて、青白き御手をとれば、最早御覺悟の体にて、「達者でゐてくれ、北海道の千代によろしく」と、僅に面を上げ給ひ、醫師の注射一回にて、はかなくも息絶えさせて候。あまりにはかなき御臨終にて生者必滅は浮世の常習、とは申せ、一夜二夜泣き候ても、逝きませし母君は、歸りたまはず、せめて冥途の供養とも思ひ、朝な夕な絶えぬ線香の煙も涙と散りて、母君は最早、冥途の人になりましたまひて候。愛て給ひし白百合の、心なう咲き亂候も、かくては散りて逝くものかと心細う袖を絞りて候。

我村の洪水　埼玉　濱田　秀子

「おゝ警鐘それ早鐘よ」と、村の若者數なくして、堤の防禦に取りかゝり、手をかへ品をかへ、固めに固めたれど、運命遂に極まりつ、山なす水は凄じき勢もて、堤防を破壞し、内つ方にあふれ出ければ防ぎ兼ねたる若者どもは、唯々顏色蒼然として、「あゝもうだめだ」とあきらめつゝ、今はと家人にまさかの時の用意を警しむやがてのほどに、幾里家は見る〳〵水もて取り圍まれ、あはれや離れ小島のそれの如、四面は唯見る荒浪の寄せ返すのみ。心細さいはん方なく、川添ひの家は流れやせん倒れやすらんなど、あだし事まで浮ばれて、現心もあらばこそ、人も空を仰ぎて歎くのみ、風の鳴る聲、櫓を漕ぐ音も寄せ來る波かと聞なされ、人の聲さへきこ

ゆれば、溺れやしけむと、胸おどろかして、夜なく〳〵圓かなる夢も結び得ず。あはれかゝる折には、世に神々の助はなきにもや。かくて、水勢いよ〳〵烈しくて、四方より押し入る水は、刹那も待たで床上を浸し、屋根をもかくさんとす。すはや低き家には居られずとて、人々は何も其處に彼處にと難を避けて、僅に命ばがりを拾ふのみ。さるからに、數ある寶も、悲しや、運命を水に任せてながむるのみ。こゝに至りて饑えに泣く人幾計りぞや。軒ある家に避難せるは、不幸中の幸とや云ふべき。老いはすがり、幼は泣けども、如何にせん、何所に行かんともたよる術なき窮民は、せん方つきて、一家族打つれ、やうやく高地に逃け出でぬ。かくて、堤の芝生に莚蓙敷き述べ、月板一枚に、辛うじて雨露を凌ぎ、露命をつなげるもあり。いと憐になむ。心なき牛馬も路傍の樹々につながれて、頭うなだれ、わめきだにせぬは、何をか憂ひてか、はた主との別れを悲しみてか、わびしくぞ見えける。

かくても、われられぬ夜半計りに、弦月の影、濁水の海に浮びて、折りからなれば斷腸の思ひに沈みぬ。嗚呼天災地變は如何計り、人畜を惱殺せしむるならむ、あなあはれ。

新體詩

文學士 鹽井雨江先生

天

社頭少女　備後　杉原衣子

幾夜み前にをろがみて、　かくまでいのる我が願ひ
神はいかにぞ聞しめす、　しるしなきこそ恨みなれ
我れ等三人の同胞の、　杖とたのみし其の母は、
すでに此世の人ならず、　たのむは今は父一人。
其いたつきの始めより、　我れ等三人の同胞は、
なでつ、さすりつ、終夜、　終日、床をまもるなり。
心つくしの甲斐もなく、　藥師のわざも利かばこそ
日毎日毎によわりゆく　父の玉の緒いかにせん。
風の前なるともし火の、　今かきえなんみけしきを
我等三人の同胞い、　見る朝夕の悲しさは。
一人は死ねの御言ならば　我が身を父にかへてまし
のこる二人の同胞に　我が身の命はいとやすし
二度かけぬ願ひなり、　聞しめしてと、御殿の
前に少女はぬかづきぬ、　涙千行にたぎちつゝ。

（雨評）新しきふしはなけれど、やさしき眞情は、あはれにひゞきたるを愛す。

地

草刈女　名古屋　橘　多　賀　子

姉樣冠りしよんぼりと　雨に絞つた草籠に
霧がつむなり露霑れし　鎌は二十日の後の月
紅の襷は裝へども、　浮世の色に遠ければ、

結んで見たる花束の　こい紫もいかにせむ。
籠をこぼれし白百合の　清きを髪にかざせばか
紅き野薔薇は、自ら　珊瑚の珠と色映えぬ。
露の甘きに、野葡萄を、　つと噛みて見ぬ含笑みぬ
濃醬の色に歯を染めて　谷の小川に映る眉目。
深山がくれの花なれば　春を重ねて十八の
若き胸、血は騒げども、　嫁に行かれぬなりはひや
つとる鎌の柄に曳いて葛の裏葉は搖げども、
蔓の長きも恨みゐる　われは深山の草刈女

（雨評）想に詞に何處となく詩韻のこもるものあるを以て撰ぶ。工みすぎて、意味のむづかしくさとりかぬるふしあるは、卿が筆の缺點なり。此の歌の冒頭結末の二節は、其の缺點を明かに示したり。

人

花賣　　備後　角倉茂子

京は五條を呼び行く乙女赤の襷に染地のけだし
白い頸にまつはる髪は、黄揚の小櫛に一寸かひとめた
緑したゝる糸束ね。
たわむ腕の小籠の中は　桔梗苅萱花すゝき、

何によそひの藤袴、　艶な色香の女郎花、
尾花をさへもなびかせて。
好奇な町子が現在の身聞ば年は十七名はとひますな
峠三里のさ霧を分けて、いさゝ小川の流に添た秋
の垣根は家ぢやます。

（雨評）洒落なる花賣、一種すてがたき詩韻あり。

秀逸

○◎若き愁ひ　　越後　游野幸子

夜はあけぼのゝ神の座に　妙なる花や燈にもゆる、
雲むらさきに煙りつゝ、　匂ふくれなゐ野に照りぬ
草籠おきて彼の少女　蝶を夢よりさましつゝ、
今日もはやくぞ刈り初めぬ。
草刈る少女年十五、　鎌の刄冴き香にゑむよ、
ゑめる面わを我と見て、　行く人覗むの氣づかひに
はぢかむ容のらうたしや　むら濃の襟ゆるうして
蝶の戯るに任せつゝ。
ゑみては歌ふひな唄の　しらべを受けて野の花は
瓣ほのかにもふるふかな　玉ぬく露のかつ散りて
虹の七色みだるれば、　足元うるほす水更に、

琥珀をといて流れ行く。
草葉かくれに咲く花を、
あはや刈りては湧き出る
若き愁ひのなからずや。
涙を眼に浮べつゝ、
しをれ行く花見守りつ。
無心の唄はこの日より
あゝとこしへにさびにけるなか。

（雨評）捉り來たれる問題は、慥に詩あり。詞にも多少の詩あり。されど若き愁ひの題意あらはし足らず。せめて末段の一節に今一入の工夫をなして此の意を強くあらはしたきものなり。



◎朝顔　　土佐　秋月廣江子

夜の間の露に夢醒めて、朝がほ清く咲き初めぬ。
やがて萎まむ果敢なさも神に委せて安らけく、
我が世の息吹けがれなき朝を命の美はしな。
限りある世に限りなき、名利に狂ふ人の子よ。
只束の間を滿足の　花の滴を摘ばずや、
安きが上を望まねば　我が世は清きものぞかし

（雨評）然り〳〵

丶丶丶○白萩　　下野　土屋藤花子

朝經もる丶山寺の　杉の木立ちの茂みより、
引きし筧の音冴えて、　浮世を餘所の住居哉。
見上ぐる岨の岩襖に、　幾代を經しか、白萩の
枝もたわ丶に露の玉、　旭きらめく其の風情。
やがて木魚の音も絶え、　煙る香のみ匂ふなる。
折りから、渡る秋風に、　もろくもおつる露の玉。
座禪の窓を押し開き、　見とる丶僧の心やいかに

（雨評）　多少の感あり

丶丶丶○城の跡　　東京　格皮與志子

くづれし垣に草生ひて、　御堀は半ばうづもれぬ。
かづらはひたる老松の、　みどりは今もかはらねど
變りはてたる城のあと。
しばしの榮華夢見つ丶浮世をこ丶に送りたる、
人やたれかとこと丶へば昔の名殘かたらんと、
耳にさ丶やくいとすゝき。
さえゆくま丶の月かげにあはれをしれと鳴く虫の
聲はいよ〳〵高まりて　松のこずゑを吹く風の
いとも淋しき城のあと。

（雨評）　すなほに整たるはよけれど、平凡にして詩趣も取り立てゝきくべきものなきををしむ。

丶○述懷　　越後　水野やすゑ子

大空は蒼く冴えて、　高根には雪白し、
廣野を辿る我れ獨り、　心碎くか徒らに、
されど高きは空のごと、　清きは雪の白きごと、
遠き理想に進まずや、　泣くもかこつも心短き

（雨評）　これも然り〳〵

丶丶○みいちやん

垣の朝顔、紺、流璃、絞り、八重のかすりの鳳仙花
父が秘藏の花を摘りてみいちやん白の糸染める哉

（雨評）　多少の感あり

丶○漁り人　　東京　秀島けい子

映る月影水馴棹に碎き、　舳先は着きぬ入江の渚。
ひらりと計り身をば濱邊に　鱗輝く得物を片手、
雫滴る櫂をば肩に、　わらの胸當て腰切り姿、
月に照して砂路に黒う。　さびある聲は波に和して
太く細く短く長く、　餘韻はひゞきぬ小唄一節

（雨評）　其の景を叙したるまでにて、感情の動かぬををしむ。

〇初秋　　相模　渡邊久子

一夜の雨にそほたれて、　露重げなる朝顔の、
花小さうして蔓細く、　まがきにすがるおぼつかな。
朝風そよぐ庭の面、　一本しろき桔梗の、
そよふく風にほろ〳〵と　零るゝ露のあはれやな。
仰げは、たかく白雲の　靜かにうごく秋の空、
己が心もうこきつゝ、　紙とり展へて墨すりぬ。
いつこともなう秋風は　無絃の琴をひき鳴らし、
筆執りあぐる我が胸の　心の糸を亂しゆく。

（雨評）すべて今一奮發の歌なり。

〇門出　　越後　松永繁子

夏の休みも終りたり。　又たらちねの膝下を
別れて旅へ行く身なり。　赤き鷄頭の花おほき
柳たなびく門さきに、　しはしとまりてふりむけは、
柳の幹に身をもたせ、　手をふりあげてやさしうも、
殘る暑さは倘はけし、　病おそれてつゝしみて、
身をいたわりて能くはげめ、　遠くさひしき一人旅、
心ゆるさて、着きたらば、　報せおこせと懇に
そへます心のみ言葉の、　ありがたさにぞ袖ぬるゝ。
なほさりがてにおもほへと、　さらは父母すこやかに
おはせと申し、三あしゆき、　四あし五あし、後より、
袖を引かるゝ心地して、　緣にくらき森かげに、
あゆみ入るまで、幾度も　名殘おしまれなつかしく
かへり見しが那、吾が草屋　門邊にいます人影を。

（雨評）意味はきこえたり。言ひまはしに、なほ一層の工夫をせば、はじめてきくべき詩とならむ。

〇秋蝴蝶　　下野　井上倘子

小さき彩羽に、人の世の　榮ある春をうちのせて、
長きひれもす、春姫が　霞の袖にまひ狂ひ、
こがれ菜の花、さくら花、　すみれに甘きさゝやきや、
榮華のゆめに醉し日の、　名殘はあらぬ淵はれの、
情なき風にふかれては、　まゝに動かぬ哀れさよ、
萩のはかげにやすらへは、　露さへおもき羽衣に、
秋の寂しさ包みかれて、　あへき〳〵てさ迷へは、
まよひ出るをまちて居し、　蜘蛛のとりこと成りはつる、
宿世はかなき秋こてふ。
されど、こてふよ、百花の、　香によふ春は、又もこん、
めくるわたちの運命を、　この世の限りくり返せ、

（雨評）辭句になほ大に工夫を要す

〇悲調　　長野　關谷己子

朱の小枕そと抱き、　かよわき兒をは見がへりつ
立ちたる胸の、　もつれ。
堪え得じの胸を押さへ、　をのゝく双脚に廊をけりつ、
病魔つのりし、　田のみもとへ。
湧き出つる胸の血潮、　聲はりあげて『田上』と
呼へと、　こたへは
淸靈眠るそれ永久、　萬事すでに止みぬ、
冷えし唇、　動かず。
頰にほゝ押しあてゝ泣く、　冷えしみ顔、あゝ力なし、
み名よびて多く、　泣かん。
うたての思や夢なりし、　むくろは涙のかたみそ、
双手合せて、天に　祈る。

願はくはそれ百合の如、清く〱清きくにに、
せめて祈りの、かすかすを。

(雨評) 殊更に工夫せられたる調ならむが、ごつ〱したる散文の如きをしむ。

〇星姫　伯耆　錦織さち子

今宵嫁入りし星姫の、嘸とり〱友星の
笑ひさゝめくこゑきゝぬ。君は名に負ふ北斗國
其の王星の一の君、ゑみ笑しきかゞやきと、
清きさやけきまたゝきは、あまねく世界に知られけり、
婿君御名は火星君、幾千萬の其中に、
一きはしろき光明に、艶姿の様を忍ばるゝ
森羅萬象かぎりなき、地球を下に見おろして、
此月此宵千代かけて、契りこめたる明星殿、
燦々として空高し、祝ひのうたけ樣々に、
舞の手長きはゝき星、もすそ萬里に引いてゆく
涼しき秋の夜は明けて、朝のほき言申さんと、
一はけ清き紗旗雲、朝日まはゆくてり添ひて、
世々に榮へゆく、御末かな、

(雨評) 少しく妄想に落ちたる嫌ひあり

〇かるた　靜岡　岡田いち子

み空につゞく池水に、映る夕日を仰がんと、
欄干近く立ち出て、下ゆく道をつい見れば、
この秋寒むを、袖もなき、單衣にふるふ男あり。
かほそき聲に、己が身の、不運を託ち、ぬかづきて、
ひたすら物を乞ひながら、惠みの露の一滴は、
衢に搔投り行き過ぎぬ。さらば、何をか望むなる。
浮世はめぐる小車の、あと辿り來る嫗あり、

負ふは孫かや、そが背に、ともに襤褸を身にまとひ、
うゑてか、たゆげの足もとに落ちてし飯の一握り、
嫗はあたりを窺へば、背にはうなじ伸ばすなり。
塵打ち拂ひ頂きゝ、其一くれを、己れ先づ、
やがて、安げに子に與ふ。かくてもあはれ、夜の鶴、
折りから、峯の御寺より、おつる夕の鐘の音は、
秋の日沈み、もの凄の池の面に消え入りぬ、
あはれ、この夜を、彼どちは何處の宿に明すらん。

(雨評) 捉り來れるところは、哀れなる詩なれども、發表の法の工夫足らず。

ヽヽヽ山のいほり　韓國　原野みき子

立やのきばの山高く、峯の松風いと妙に、
終日神の玉琴の、音ともまがひてひゞくなり、
背戸を流るゝ水清く、岩ねに碎け岸にむせぶ、
波は、よすがら流泉の、曲おもしろくひゞくなり。
自然を友の此の庵り、うきよの華は遠けれど、
塵に汚るゝうれひなし。うれしきはわがいほりかな。

(雨評) 意味はきこえたれど、平凡をまぬかれじ、

ヽヽヽ秋の眺　名古屋　不破きみ子

荻の上風肌さむく、夕の軒におとづれて、
庭の八千草露ふかく、やさしき花の秋海棠、
咲ける下には、きり〲す、唱ふかなくか聲細し。
遙にあふぐ高嶺より、心も澄める月影を、
掠めて渡る雁もあり。砌りに植ゑし牧の葉に、
いつしか置きし白露は、磨き上げたる玉の如、
やがて咲くらん花園の、菊の若葉の香も高く、
さやけき秋の眺め哉、いざと取りづる八雲琴、

おぼつかなくも、虫の音に、合して弾けば、夜は更て、
さすがに繁き大道の、あたりは寂と風もなき、
谷間の庵の心地して、淋しさ増さる頃をしも、
かすかに聞ゆ遠砧、蘇武が笳子の發にや、
哀れ催す屋根の上に、澁柿おつる音もして、
實にこそ秋の眺かな。

(雨紅) 辭句くだくだしき嫌ひあり。一層の洗錬を要す

ゝゝ病む人を守りて　東京　船津康子

紫陽花の色あせにしを、神の御告のそれかとも、
只病む君の枕邊を、安らはでこそ守るかな、
物の影追ふ夫のごと、微かに呼ぶと目醒めては、
「あな君！」人や夢に見し、不安の色に我れを見る、
「痛やいかに？」我が聲の、燈冷たき夜の壁に、
ふれて奇しくふるゝ時、あゝ君が眸の涙はよ。
戀得て三年只幸に、美くし夢に醉へる君、
あゝ永久と誓ひけん、戀の命は短かくて、
あはれ今宵を限る身か。
又夢に入る病人の、血のけは絶えし白き頰に、
今影寂し死の神の、冷たき唇やふるゝかと、
思ひては我只泣きぬ。
あゝ夜の神は、情あらば、黒き髪に、いつまでも
日の世を包め、病む人は、暁星の消ゆるまで、
それ消ゆるまでの命なるをや。

(雨評) 詞と言ひまはしとを、今一層ねり給はば、はじめて其の情きくべき歌とならむ。

ゝゝ風鈴の音　相模　飯島とよ子

秋風そよぐ此の夕べ、去りにし春の偲ばれて、
いつしか獨り辿りいでて、花咲きにほふ其の昔、
君とちかひし高殿の、ほとりに近く身をよせぬ。
仰げば殿は暗くして、弓張月の影高く、
あたり寂しく人もなく、仇し嵐の只ソヨと
訪するまゝにチリくと、つるせる風鈴の音哀れ。

ゝ姉を偲ぶ　京都　堤登久子

加茂の夕べの橋の上、北風輕う袖打ちて、
三十六峰緑濃く、下の流はいと清し。
團扇の手をばそと止めて、仰ぐみ空に星一ッ、
さても光の強いかな、欄干近う身を寄せて、
偲ぶ心は西の國、夜毎に出る東の
遠きみ空の星眺め、我が妹の身に幸あれと、
祈るはみ姉の御心、今宵も君は見渡すや。
宇宙に戀し君と我れ、心の逢うて嬉しくも
語らん時のなくてかや。いよゝ數増す星かげに、
心は空に恍惚と、身は浮雲の夢の中、
思を君にのみ寄せて、君が心や若し夫れと、
定むる一つの明き星、心も無しや、西の方、
金糸長う引きのべて、雲の彼方に流れ行きぬ。

ゝ秋夜逍遙　和歌山　植木素子

何處の里もおしなべて、ながめさびしき夕つかた、
見えみ見えずみ雁がねの、鳴きて渡れる山見れば、
おぼつかなくも見えわたる、麓の寺の入相に、
おどろき立つる群がらす、そこともわかずさまよへば
いとしめやかに結びたる、垣根のもとのはなすゝき

招くと見えて立ちよれば、今をさかりの菊の花
千世のかたりを送りきて、衣の袖もにほふなり

短歌

御歌所寄人小出粲先生選

天

ながめやる千さとの外も照る月の
光のうちに成りにけるかな
神戸 足立えい子

地

思ふこと思ひのこしてぬる夜半の
夢はうつゝのあとやおふらん
東京 岩谷浅子

人

峯も尾も木々のもみぢは散りはてゝ
松にあつまる木枯の聲
越後 岩本芳子

秀逸

眞友 東京 中村千枝子
眞なる友の情ははらからの
うときにまさるこゝちこそすれ

擣衣 神戸 今西操子
槇の戸にさし入る月をうしろにて
初かり衣うつはたが妻

初秋虫 陸前 末永喜惠子
風のおとのかはりしのみと思ひしを
よるはかきねにむしもなくなり

女郎花 飛彈 平田賓子
わびしさはいはねとしるしをみなへし
花にあまれるつゆの涙に

甲

折にふれて 美濃 飯島みゆき子
なはしろの種の名かきし板札にあきつとまりぬ雨はれし朝

行路薄 鳥取 大塚信子
穂すゝきみたれてまねく秋の野は旅行く人も道まとふらん

○

夕風に露ちる萩の何なれは我か戀まさるつまとなるらむ　東京　豐田とよ子

○

衣うつ聲きこゆなりさらぬたに戀しさまさる故里のそら　飛彈　南　峯子

中秋月

わが友の心つくしのかけかとも思ひなさるゝ秋の夜の月　名古屋　山根しげ子

松下禪尼

やれふすまつくろひおきし敎にてあらき風さへおこらさりけむ　備後　杉原　衣子

月向前星

夕づゝのうすれる影はすむ月のひかりのそらにみつるなりけり　東京　原　三幸子

○

片ゐみて月にわが名をよびませし夕べ許りは忘れかねつる　越後　松永　繁子

山里秋夜

衣うつ音をさまりてさを鹿のなくねさしひき秋のよは哉　下野　井上　尙子

月夜虫

月淸き秋の花野をわけゆけばむしの聲さへさま〳〵にして　東京　神谷てる子

初秋月

そよ〳〵と吹きくる風に靑桐のゆるぎて葉わけに月の影みゆ　東京　秀島けい子

野曉月

虫のねもやゝかれそめて秋の野のつゆにしらめるありあけの月　岩代　岸野　菊子

紅葉

梅が香にわけてし山のした庵をふたゝびとめて紅葉見るかな　岩代　岸野　常子

行路萩

あさ露に袖はぬるとも一枝は手折りて行かんあき萩の花かさ　奈良　栗山たか子

古戰塲虫

むら雨はいつしか晴れて客人のかさをわすれてかへりけるかな　東京　白井　春子

初秋風

武士の露と消えにし跡訪へば聲哀にぞこほろきの鳴く　東京　横田芳野子

玉すたれもれくる風も秋めきて月影淸きこの夕かな　東京　白井　岑子

草花滿野

ゐのしゝも巳か臥處に迷ふらん咲き亂れたり野邊の秋萩　常陸　岡田　萬子

虫

とり〳〵にふしおもしろき虫の音にふかしがちなる秋の夜半哉　千葉　中川千鶴子

秋の夜

文見れはやかてふけ行く秋の夜を誰か長しとかこち初めけん　越後　水野やすゐ子

月を見て亡母の忍はれて

なき母かかたみの小琴取出てゝしらぶる夜はの月の悲しさ　埼玉　野中まつ子

○

秋の雨さびしくなりてふる山里に糸ひきおはす母しのばるゝ　名古屋　橋　多賀子

山家月

訪ふ人もたえて程ふる里にひとりながむる秋の夜の月　兵庫　田淵みき子

秋雨

をり〳〵は窓のはせをに音つれて淋しさ見ずるあきの雨かな　東京　神田けい子

深山秋

筏士の笠に紅葉をのせくれはみやまは秋のもなかなるらし　靜岡　岡田いと子

にはとりの聲いとうれしたつ霧にゆくても見えぬみやまちの旅　東京　松原　岑子

◎和歌兼題

十一月 {水鳥 / 看護婦}

十二月 {落葉 / 歲暮}

乙

水鳥

しも氷るあしまに月の影ふけてなくねも寒し池の水鳥　信濃　毛利かつ子

すゞむし

人はみな浮世はなれて夢の原あはれ淋しう鈴虫のなく　群馬　吉田きく子

遠砧　東京　岩谷淺子
たえ／＼に音ぞ聞ゆるさ夜更けて 誰たが爲めに衣うつらん

渡頭月　陸前　大槻初音子
乘る駒のかけよりほかのくまもなし みのゝわたりの秋の夜の月

父母を思ひて　東京　原田まつ子
いとほしや我が古郷のかそいろは ひれもす小田に草とたゝかふ

虫　東京　川合しほ子
月さえて草葉きらめく庭の面に ありかさためぬ虫の聲々

○　磐城　木幡きよ子
吹き匂ふ花の都はいかならん 風の便も菊の香ぞする

木曾にて　美濃　芳翠敏子
木曾の道わらじさげたる藁屋店 老母苧をつむぐひなたほこりに

なみなごによせて　岐阜　長濱鬪子
父の旅つとに得たりと絵日傘をほめられにきぬは しきなみな子

秋夕思　神戸　今西操子
とり／＼に鳴く虫の音も秋の人の 心こゝろにひゝく頃かな

歸省する友を送りて　東京　山本しづ子
ふるさとの母刀自いかにまつならむ ことなき友の花のすがたを

野月　旭川　佐藤央子
ちる萩のつゆに名殘をなしむらん よすがらやとる野邊の月かけ

竹　肥後　友永常子
ともすれは虎もいつべく見ゆるかな しげりて續く園の竹村

秋田家　肥後　友永草子
稻追ふ賤がこゑのみ聞えつゝ いれの香ふかきを山田の里

古戰場　東京　西村直子
白河のあれにし城のあとゝへば いはがきしのぶつゆぞこぼるゝ

古戰場　東京　河合清子
ふきあれし木曾山おろししのはれて もみぢ散しく栗からのたに

○　岩代　菅野和子
弟なみ寺に捧げて獨り身の身にしみわたる入相のかね

出水しける夜に　東京　高野元子
あら川のあら波こよひたかゝらし おもひやるせのやる方ぞなき

友の文を見て　東京　五十嵐清子
數ならぬのなかの草もうつくしく 君かにほはすことのはのはな

紅葉　土佐　秋月廣江子
罪のなき少女ねむるに似たる哉 夕日てりそふ峯のもみぢ葉

○　越後　海野幸子
別れ路の今日のこよひのかなしさを みそらの月やひとり知るらむ

○　福岡　島村作子
家のみのあはれならねと野も山も さむしきものは秋の夕暮

○　神戸　足立あさ子
手弱女のさせるくしげの箱根山 あけがた寒き秋のはつ風

露　東京　山本しづ子
誰が袖にふれてちりけむ秋の葉に おきしはかりの露のしら玉

立秋　韓國　原野みき子
山か家は入る日に赤うきり一葉落ち初めにけり秋ほのみゆれ

○　東京　渡邊花柳子
旅衣秋の二夜は虫の宿 草を枕に月を眺めし

稻妻　和歌山　植木撫子
風に散る千草の上の露にたに やとりもはてぬいなつまのかけ

水邊の菊　奈良　栗山俊子
川そひの峰にさきたるかぶときく 水にうつるもゆかしかりけり

○　神奈川　鈴木まつ子
なく虫の聲もほそりてわか庭に ふき來るかせの身にそしみけり

○　秋田　古瀬惟子
かなたにも村のありけん風呂しきを 肩に負ひ行く生糸商人

山中鹿　伊豫　田村多豆子
露もあれと木曾の山路のたひ衣 鹿の聲にはなにゝぬれにし

露　　　　長野　北澤千枝子
つゆおきて枝をもげにもたわむなり今をさかりの百合の一もと
○　　　　品川　星野清子
久方の月の桂も手をれかし今朝生ひいてしその竹の子
夢中戀　　　　東京　松下萬里子
何方に枕置きけん時なりし其夜戀しき人の夢見つ
秋夜　　　　横須賀　高橋つれ子
月させは玉とちりぬる白露に秋の哀れのこもる夜半哉
永別　　　　東京　土田八重子
かへりきて見るべき身にはあられども おもひたちたる旅衣かな
秋の色　　　　神戸　すい子
東雲の秋たつ空をながむれば 山は紅葉のいろぞうつらふ
紫式部　　　　備後　杉原きぬ子
心にもなきすきことを書きしより 心ありとや人の見つらん
○　　　　神戸　井口その子
玉萩の若葉吹く風そよ〳〵と 夕暮ちかし野の孤の家
虫　　　　東京　青木たま子
思ひ〳〵夜すからすたく虫のこゑ ふしおもしろし何うたふらむ
尼御前　　　　播磨　田淵ふじ子
しかすかに月雪花のをり〳〵に いにしむかしや戀しかるらん
秋の月　　　　廣島　鈴森きみ子
時雨こて晴したゝる木の間より 清けく出でし秋の夜の月
虫聲　　　　千葉　海上孝子
秋されば千草の花のかげしめて 月まつむしのこゑ聞ゆなり
習字　　　　甲府　名取正代子
人柄も偲はれぬべき業なれば 文字こそ妙にかゝまほしけれ
雑誌の發刊を祝して　　　　長野　北澤ちえ子
吹き出でし言葉の花は香にみちて 末とこしえににほひいづらん
白菊　　　　東京　奈良八重子
文置きて雲の行方を眺めます尼君わかし白菊のはな
舊友に遣はしける　　　　埼玉　濱野ひで子
暇あらば尋ねて來ませ我やどに 長き一夜を語り明かさむ
萩　　　　千葉　吉松龜子
まきあげし小簾の緋房に烟ゆれて 秋雨細し白萩の窓
○　　　　名古屋　淺野米子
虫の音を枕にしめて見し夢に さまぞ聞きたき野の庵の人
秋夕　　　　東京　諏訪高子
噴水に千草こと〳〵流しけり ことしは淋し秋の夕くれ
折にふれて　　　　横須賀　渡邊比佐子
亡き友の墓石をめぐる秋の川 音なき水に萩のこぼるゝ
○　　　　神奈川　飯田白露子
物あらふすべもあらしな河の上を おほひて咲ける糸はきの花
折にふれて　　　　東京　増田春子
ながめしてふかき心を染め合ひし 昔の月の影ぞ戀ひしき

俳句

内藤鳴雪先生選

天
秋の蚊帳青さを今朝の恨めしさ　　　　神奈川　高橋つね子

地
砦守る篝や雁のみだれとぶ　　　　東京　中川ゑい子

人
螢火を吹き飛ばしけり草の風　　　　神戸　足立あさ子

難波江や新酒の船に帆をあくろ
雁なくや夜泊の船の朝灯　　　　東京　杉江光子

詞藻

新嫁や月に衣紋を整ふる　東京　渡邊花子
舟縁に平家一門涼みけり　東京　土岐ゆき子
初嵐野澤に山の影を吹く　駿河　仲野とみ子
秋雨や聲古りたる二天門　岩代　岸野常子
名月や汐にまかせて詩酒の舟　和歌山　島田千代子
翠嵐に寒き小坂や奥の院　神戸　足立ゑい子
秋雨や讀みも殘したる須磨の巻　東京　松下萬里子
つくれんとたるゝ窓や雁の聲　東京　山下みの子
七輪の火の勢や今朝の秋　横須賀　柏原みな子
病む友を木槿の垣におとつれぬ　奈良　寺内ちく子
朝寒の軒に吊りたり鮑の皮　兵庫　梶原京子
夕立のしぶきも涼し玉すだれ　東京　土田八重子
見なれたる庭の景色もけさの秋　能登　粟倉菫子
宿かへて心に寂し白槿　下野　井上瑞枝子
水底の古びし旗や秋の風　新潟　岩本芳子
晝がほの花の下なるあゝさかな　松山　上原のぶ子
芒野や犬の聲して村近し　相模　飯島南子
秋草や關の小まんが茶屋の跡　横須賀　渡邊久子
魂呼へは天高くして稲光り　横須賀　齋藤松代子
一の陣二の陣空に稲かり　横須賀　山下照子
秋風や林を過ぎる小提灯
將軍は女倶したり紅葉狩り　横須賀　三島涙子
蛍火の煙に續く雲の峰　東京　本橋つや子
置きかふる床几一つや門すゞみ
秋の日や鴉がなけは黄昏れぬ
一船は詩人なりけり月の川　美濃　芳翠敏子
滿ち潮にかげありなしの二日月　千島　相本ふみ子
涼しさや灯にひらくと舞の袖　金澤　圀井芳惠子
四阿に灯さてすゞむ人は誰れ　下野　土屋そのぶ子
稲妻に障子閉ちけり女の童　兵庫　梶原京子

定價

一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾貳冊	前金	貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附あり度し●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年九月廿八日印刷
明治四十年十月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　保本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋　特八八番）

國光社發行

◎女學校用教科書

文部省檢定濟

阿[illegible]介
岡田竹熊　先生編纂

◎女子補習讀本

菊判和綴美本

正價　上三十五錢　下三十錢　送料　各四錢

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二ヶ年の高等女學校技藝専修科生の使用に供せん爲め編纂せられたるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其材料は家事、家政、女工等を始め實業に關する事項の國家經濟に對する必要なる心得、美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを撰擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

川村理助先生著

◎高等女學校用　生理衛生新教科書

全（文部省檢定濟）　正價　五十錢　送料　六錢

東京府第一高等女學校教諭　市川源三先生著

◎高等女學校用　教育學教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

市川源三、利根川與作兩先生共著

◎高等女學校用　國史教科書

全二冊（同）　正價　各五十錢　送料　各六錢

川村理助先生著

◎高等女學校用　動物學新教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

川村理助先生著

◎高等女學校用　植物學新教科書

全（同）　正價　五十錢　送料　六錢

國光社發行

理學博士　坪井正五郎先生講述

人類學講義

總クロース製　菊判
全一冊
正價金壹圓拾錢
送料拾錢

坪井博士が人類學の泰斗たるは普く世人の知る所本書は同先生が極めて平易なる言文一致にて講述せられたるものにして創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論諸種族系統探り方、人類の大別小別、日本種族論等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたれば歷史及人類を研究する人には勿論普通人士も之れを一讀せば無限の趣味を感ずべき座右必須の良書たるを疑はず

國光社發行

島田三郎先生序　小畠幾次郎先生著

腦力增進論

全　正價三拾五錢　送料六錢

沼南島田三郎先生本書の冒頭に序して曰く心身の二者を保養して人始めて其發育を完全にするを得べし、心性を措ひて偏へに身體を說き身體を外にして專ら心性を論ず二者各其半面を語るものにして全局を蓋ふの見解に非ずと、著者夙に玆に見るあり世の青年學生の腦病に罹る者多きを慨し研究を積み推考を重ね汎く專門諸大家を歷訪し其所說を叩き大に悟る處あり遂に此書を作せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成病院長、鈴木胃腸病院長等の卓說高論は著者の實驗及び古今に涉れる實地談と共に輕妙快活なる文章に由りて描寫され一讀の下頓に精神の壯快なるを覺ふ蓋し心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず一般學生の爲めに無上の淸涼劑たるべし

小畠幾次郎先生著

體力增進論

全　正價四拾錢　送料八錢

著者前に腦力增進論を著し世に裨益せしもの少なしとせず更に本書を公にし相俟て心身の完全なる發達に資せんとす由來體質の軟弱なるは我が國民の一大缺點殊に一般學生の通患なり希くは此書に據り研究鍛錬して軀幹長大體力剛健の人と爲り以て戰捷國の民たるに負かざれ

文部省體操遊戲取調委員

井口あくり　可兒德　川瀬元九郎
高島平三郎　坪井玄道

諸先生共著

第六版

體育の理論及實際

總クロース　菊版五百餘頁

正價　金壹圓參拾錢
郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き敎育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細（新式基本姿勢は特に詳密に）解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操敎室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親く敎授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八、二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

女鑑

治四十年　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
十一月一日發行　第拾七年第十號　第三種郵便物認可



東京西地株式合社國光社印刷